

SSP-W 2020 1st

報告書

2021 年 3 月

SSP プロジェクト

総格差社会日本を読み解く調査科学

The logo for the SSP Project. It features a blue icon on the left consisting of a 3x3 grid of dots, with the top-left dot missing. To the right of this icon, the letters 'SSP' are written in a large, bold, blue serif font. To the right of 'SSP', the word 'Project' is written in a smaller, blue, sans-serif font. Below the 'SSP Project' text, the words 'Stratification and Social Psychology' are written in a very small, blue, sans-serif font.**SSP** Project
Stratification and Social Psychology

はしがき

1. この冊子は、SSPプロジェクト（正式名称「階層と社会意識研究プロジェクト」研究代表者・吉川徹）の一環として行ったSSP-W2020 1st（調査実施担当：神林博史・永吉希久子）について、調査実施概要、調査データの分析報告、調査データのコードブック、基礎集計表、および調査票をまとめたものである。本調査研究は、日本学術振興会科学技術研究補助金研究 基盤研究（A）「階層意識全国調査の時系列データの収集と標本抽出 WEB 調査法の確立」（課題番号：19H00609）の支援を受けて実施されたものである。
2. SSP-Wとは、SSPプロジェクトにおいて行った、モニター方式のWeb法による、質問項目についての試行的調査シリーズの共通名称である。SSP-W2020 1st は2020年3月に実施した。
3. 本調査のデータはSPSSデータファイル形式で研究会メンバーに配布されている。
4. 調査画面のイメージは掲載していない。しかし「4. 調査票」で示している質問文と選択肢のテキスト情報は、実際に使用した調査票画面のものと同一である。
5. 調査票画面に適用した回答条件（論理式など）については「4. 調査票」内に付記されている。
6. 職業情報のコーディングに当たり、東京大学社会科学研究所附属社会調査・データアーカイブ研究センターが提供する自動コーディングシステムを利用した。SSP-W2020 1st データの学歴クリーニング、職業および産業コーディングは、吉川徹（大阪大学）、平松誠（大阪大学）および大阪大学人間科学研究科経験社会学ゼミの院生が主に担当した。
7. 本報告書に収録された5編の分析報告は、新規項目の提案者自身によるものである。

2021 年 3 月 SSP プロジェクト

神林博史（東北学院大学）

永吉希久子（東京大学）

目次

1. 調査の設計と回収状況	3
2. 基礎分析	
2.1 若年層における相補的世界観の緩衝効果 —生活満足度への影響に注目して— (狭間諒多朗)	11
2.2 階層帰属意識, 主観的幸福感と結びつくのはどのような言葉か —自由回答の計量テキスト分析— (小林盾、カローラ・ホメリヒ)	21
2.3 社会の将来認識と社会不公平感 (村瀬洋一)	33
2.4 信頼とサポートネットワーク形成 —親族・非親族ネットワーク人数の規定要因の基礎的分析— (内藤準)	41
2.5 選択の自由と資源分配・ネットワーク —SSPW2020 データにおける主観的自由の基礎的分析— (内藤準)	68
3. 基礎集計表	85
4. 調査票	95

1. 調査の設計と回収状況

調査の設計と回収状況（SSP-W2020 1st）

1. 調査設計

SSP-W2020 調査（2020 年「くらしと社会についてのインターネット調査」）は、調査会社のモニターを用いて Web 法によって行ったインターネット調査である。2020 年度実施予定の SSP2020本調査用の予備調査として、質問方法・質問項目のテストを行うことを主な目的とした。対象者は全国の男女個人である。調査票は 1 種類を用いた。

(1) サンプルサイズ

目標回収数を 3,000 とした。

(2) 対象者の範囲

対象者は、調査時に満 25～64 歳の男女とした。

(3) 都道府県・年齢・性別による割当

平成 30 年 1 月 1 日の住民基本台帳年齢別人口（都道府県別）を用いて、都道府県ごとに 20 代（25～29 歳）、30 代（30～39 歳）、40 代（40～49 歳）、50 代（50～59 歳）、60 代（60～64 歳）の男女別人口数を計算し、人口比に応じて回収数を割り当てた（表 1、表 2）。

2. 対象者の選定

株式会社ネオマーケティングのインターネットモニター（ネオマーケティング社の呼称は「クロズドモニタ」）の中で、登録している年齢が該当年齢である回答者に、調査会社から調査依頼を配信した。

3. 実査と回収状況

(1) 実査

株式会社ネオマーケティングに実査（調査依頼の配信、回答の回収）を委託した。

調査依頼の配信開始は 2020 年 3 月 20 日で、3 月 24 日に全セルの目標回収数が充足され、調査を終了した。

(2) 回収状況

総回収数は 6,187 であった。その中で、下記 4 つの判断基準すべてを満たしているケ

ースを有効回収とした。割当数を超えた有効回収については無作為に削除した。最終的な有効回収数は2,998 である（表3、表4）。

【有効票の判断基準】

- ①アンケートサイト登録属性情報と回答属性情報の整合性
- ②アンケート回答時間の下位 1%、上位 1%に非該当
- ③「Q16 と Q17:同居している家族」項目での整合性
- ④「自由記述回答」項目における不正記述なし

4. データの注意点

(1) 調査時のミスにより、学歴関連情報（Q12、Q12t9、Q13t1、Q13_2）の有効回答数は2,278となっている。これは直前までの職業関連質問の回答条件指定（有職者のみ回答）が学歴関連情報にも適用されていたために発生したものである。

(2) SSPW2020 では、本調査における職業情報測定テストとして、①職業の内容についての自由記述（Q6）、②簡易な職業分類の選択回答（Q7）、の2つの質問を行い、その結果を総合して最終的な職業分類コーディングを行なった。同様に産業も、①事業内容についての自由記述（Q2）、③簡易な産業分類の選択回答（Q3）、の2つの質問を行い、これらをもとに最終的な産業分類コーディングを行った。コーディング済の職業・産業変数は、SSP プロジェクト事務局より 2021年1月に配布されたデータの末尾に追加されている。

(3) 調査票上では質問していないが、調査対象者が回答に使用した端末（PC／スマートフォン）の情報が変数（Device）として付加されている。

以上

表1 都道府県と年齢による割当数（男性）

		20代 (25～29歳)	30代	40代	50代	60代 (60～64歳)	計
1	北海道	5	13	18	16	8	60
2	青森県	1	3	4	4	2	14
3	岩手県	1	3	4	4	2	14
4	宮城県	3	6	8	7	4	28
5	秋田県	1	2	3	3	2	11
6	山形県	1	3	3	3	2	12
7	福島県	2	5	6	6	3	22
8	茨城県	3	8	10	9	4	34
9	栃木県	2	6	7	6	3	24
10	群馬県	2	5	7	6	3	23
11	埼玉県	9	21	28	24	10	92
12	千葉県	7	17	24	20	8	76
13	東京都	20	47	55	46	17	185
14	神奈川県	12	27	36	32	12	119
15	新潟県	2	6	7	7	4	26
16	富山県	1	3	4	3	1	12
17	石川県	1	3	4	3	2	13
18	福井県	1	2	3	2	1	9
19	山梨県	1	2	3	3	1	10
20	長野県	2	5	7	6	3	23
21	岐阜県	2	5	7	6	3	23
22	静岡県	4	10	13	11	5	43
23	愛知県	10	23	29	24	10	96
24	三重県	2	5	6	5	3	21
25	滋賀県	2	4	5	4	2	17
26	京都府	3	7	9	8	3	30
27	大阪府	11	24	32	27	11	105
28	兵庫県	6	14	19	17	7	63
29	奈良県	1	3	4	4	2	14
30	和歌山県	1	2	3	3	1	10
31	鳥取県	1	1	2	2	1	7
32	島根県	1	2	2	2	1	8
33	岡山県	2	5	6	5	3	21
34	広島県	3	8	10	8	4	33
35	山口県	1	3	4	4	2	14
36	徳島県	1	2	2	2	1	8
37	香川県	1	2	3	3	1	10
38	愛媛県	1	3	4	4	2	14
39	高知県	1	2	2	2	1	8
40	福岡県	6	14	17	14	7	58
41	佐賀県	1	2	2	2	1	8
42	長崎県	1	3	4	4	2	14
43	熊本県	2	4	5	5	3	19
44	大分県	1	3	4	3	2	13
45	宮崎県	1	3	3	3	2	12
46	鹿児島県	1	4	5	5	3	18
47	沖縄県	2	4	5	4	2	17
	計	146	349	448	391	177	1511

表2 都道府県と年齢による割当数（女性）

		20代 (25～29歳)	30代	40代	50代	60代 (60～64歳)	計
1	北海道	5	13	18	17	9	62
2	青森県	1	3	4	4	2	14
3	岩手県	1	3	4	4	2	14
4	宮城県	3	6	8	7	4	28
5	秋田県	1	2	3	3	2	11
6	山形県	1	3	3	3	2	12
7	福島県	2	4	5	6	3	20
8	茨城県	3	7	9	9	4	32
9	栃木県	2	5	7	6	3	23
10	群馬県	2	5	7	6	3	23
11	埼玉県	8	19	26	22	10	85
12	千葉県	7	16	22	19	9	73
13	東京都	20	45	53	44	16	178
14	神奈川県	11	25	34	29	12	111
15	新潟県	2	5	7	7	4	25
16	富山県	1	2	4	3	2	12
17	石川県	1	3	4	3	2	13
18	福井県	1	2	2	2	1	8
19	山梨県	1	2	3	3	1	10
20	長野県	2	5	7	6	3	23
21	岐阜県	2	5	7	6	3	23
22	静岡県	4	9	12	11	5	41
23	愛知県	9	21	27	23	9	89
24	三重県	2	4	6	6	3	21
25	滋賀県	2	4	5	4	2	17
26	京都府	3	7	9	8	4	31
27	大阪府	11	24	33	28	11	107
28	兵庫県	6	14	20	18	8	66
29	奈良県	1	3	5	4	2	15
30	和歌山県	1	2	3	3	2	11
31	鳥取県	1	1	2	2	1	7
32	島根県	1	2	2	2	1	8
33	岡山県	2	5	6	5	3	21
34	広島県	3	7	10	8	4	32
35	山口県	1	3	4	4	2	14
36	徳島県	1	2	2	2	1	8
37	香川県	1	2	3	3	2	11
38	愛媛県	1	3	4	4	2	14
39	高知県	1	2	2	2	1	8
40	福岡県	6	15	18	15	8	62
41	佐賀県	1	2	3	2	1	9
42	長崎県	1	3	4	4	2	14
43	熊本県	2	5	5	5	3	20
44	大分県	1	3	4	3	2	13
45	宮崎県	1	3	3	3	2	12
46	鹿児島県	2	4	5	5	3	19
47	沖縄県	2	4	5	4	2	17
	計	144	334	439	387	183	1487

表3 有効回収の分布（男性）

		20代 (25～29歳)	30代	40代	50代	60代 (60～64歳)	計
1	北海道	5	13	18	16	8	60
2	青森県	1	3	4	4	2	14
3	岩手県	1	3	4	4	2	14
4	宮城県	3	6	8	7	4	28
5	秋田県	1	2	3	3	2	11
6	山形県	1	3	3	3	2	12
7	福島県	2	5	6	6	3	22
8	茨城県	3	8	10	9	4	34
9	栃木県	2	6	7	6	3	24
10	群馬県	2	5	7	6	3	23
11	埼玉県	9	21	28	24	10	92
12	千葉県	7	17	24	20	8	76
13	東京都	20	47	55	46	17	185
14	神奈川県	12	27	36	32	12	119
15	新潟県	2	6	7	7	4	26
16	富山県	1	3	4	3	1	12
17	石川県	1	3	4	3	2	13
18	福井県	1	2	3	2	1	9
19	山梨県	1	2	3	3	1	10
20	長野県	2	5	7	6	3	23
21	岐阜県	2	5	7	6	3	23
22	静岡県	4	10	13	11	5	43
23	愛知県	10	23	29	24	10	96
24	三重県	2	5	6	5	3	21
25	滋賀県	2	4	5	4	2	17
26	京都府	3	7	9	8	3	30
27	大阪府	11	24	32	27	11	105
28	兵庫県	6	14	19	17	7	63
29	奈良県	1	3	4	4	2	14
30	和歌山県	1	2	3	3	1	10
31	鳥取県	1	1	2	2	1	7
32	島根県	1	2	2	2	1	8
33	岡山県	2	5	6	5	3	21
34	広島県	3	8	10	8	4	33
35	山口県	1	3	4	4	2	14
36	徳島県	1	2	2	2	1	8
37	香川県	1	2	3	3	1	10
38	愛媛県	1	3	4	4	2	14
39	高知県	1	2	2	2	1	8
40	福岡県	6	14	17	14	7	58
41	佐賀県	1	2	2	2	1	8
42	長崎県	1	3	4	4	2	14
43	熊本県	2	4	5	5	3	19
44	大分県	1	3	4	3	2	13
45	宮崎県	1	3	3	3	2	12
46	鹿児島県	1	4	5	5	3	18
47	沖縄県	2	4	5	4	2	17
	計	146	349	448	391	177	1511

表 4 有効回収の分布（女性）

		20代 (25～29歳)	30代	40代	50代	60代 (60～64歳)	計
1	北海道	5	13	18	17	9	62
2	青森県	1	3	4	4	2	14
3	岩手県	1	3	4	4	2	14
4	宮城県	3	6	8	7	4	28
5	秋田県	1	2	3	3	2	11
6	山形県	1	3	3	3	2	12
7	福島県	2	4	5	6	3	20
8	茨城県	3	7	9	9	4	32
9	栃木県	2	5	7	6	3	23
10	群馬県	2	5	7	6	3	23
11	埼玉県	8	19	26	22	10	85
12	千葉県	7	16	22	19	9	73
13	東京都	20	45	53	44	16	178
14	神奈川県	11	25	34	29	12	111
15	新潟県	2	5	7	7	4	25
16	富山県	1	2	4	3	2	12
17	石川県	1	3	4	3	2	13
18	福井県	1	2	2	2	1	8
19	山梨県	1	2	3	3	1	10
20	長野県	2	5	7	6	3	23
21	岐阜県	2	5	7	6	3	23
22	静岡県	4	9	12	11	5	41
23	愛知県	9	21	27	23	9	89
24	三重県	2	4	6	6	3	21
25	滋賀県	2	4	5	4	2	17
26	京都府	3	7	9	8	4	31
27	大阪府	11	24	33	28	11	107
28	兵庫県	6	14	20	18	8	66
29	奈良県	1	3	5	4	2	15
30	和歌山県	1	2	3	3	2	11
31	鳥取県	1	1	2	2	1	7
32	島根県	1	2	2	2	1	8
33	岡山県	2	5	6	5	3	21
34	広島県	3	7	10	8	4	32
35	山口県	1	3	4	4	2	14
36	徳島県	1	2	2	2	1	8
37	香川県	1	2	3	3	2	11
38	愛媛県	1	3	4	4	2	14
39	高知県	1	2	2	2	1	8
40	福岡県	6	15	18	15	8	62
41	佐賀県	1	2	3	2	1	9
42	長崎県	1	3	4	4	2	14
43	熊本県	2	5	5	5	3	20
44	大分県	1	3	4	3	2	13
45	宮崎県	1	3	3	3	2	12
46	鹿児島県	2	4	5	5	3	19
47	沖縄県	2	4	5	4	2	17
	計	144	334	439	387	183	1487

2. 基礎分析

若年層における相補的世界観の緩衝効果

—生活満足度への影響に注目して—

狭間 諒多朗

(南山大学)

1. 本稿の検証課題

1-1 若年層の生活満足度は何に支えられているのか

若年層における生活満足度の上昇が指摘されて久しい(古市 2011; ホメリヒ・清水 2019 など). 若年層の置かれた状況は経済的に厳しく(藤田 2016), 将来展望も困難だとされるにも関わらず(山田 2004), 生活満足度が上昇し続けるのはなぜなのか. 多くの研究が若年層の生活満足度を支える要因を分析してきた. たとえば岩田考は, 大学生を対象とした調査データの分析から, 恋人がいることや親友数が多いことなどが生活満足度を高めていることを明らかにしている(岩田 2015). また浅野智彦は, 暮らし向きが豊かで, 将来展望が開けている若年層の生活満足度が高いこと, 友人関係と家族関係がうまくいっている若年層の生活満足度が高いことを明らかにし, 若年層における社会生活要因と親密性要因の重要性を指摘している(浅野 2015). 本稿では, これらの研究に続いて新たな知見を加えるべく, 若年層の生活満足度に影響を与えている要因について分析していく.

1-2 相補的世界観とその緩衝効果

本稿では, 注目するのは「相補的世界観」である.

相補的世界観とは, まず, 社会心理学におけるシステム正当化理論の中で用いられる考え方である. システム正当化理論では, 人間は基本的に現状を肯定したいという動機を有しており, 今あるシステムや社会を正当化しようと考ええるものであるとされている(Jost et al 2010). しかし, 現状のシステムや社会には問題点も多く, そのまま正当化できるわけではない. そこで「世の中はバランスがとれている」「良いことが起これば悪いことも起こる」というように相補的にシステムや社会を捉えることで, 今あるシステムや社会の悪い点から目を背けて正当化しているのではないか, というメカニズムが考えられている. ここで「世の中はバランスがとれている」「良いことが起これば悪いことも起こる」といった, ものごとに対してバランスをとった認識のことを相補的世界観という(Kay and Jost 2003; 池上 2012).

若年層が置かれている状況は確かに厳しいが, それでも, 相補的に世の中を捉えることで, 現状の悪い点に目をつぶり, 日々の生活に満足している可能性がある. 狭間諒多朗は, このように相補的世界観を現在の若年層が置かれた状況に当てはめ, 分析を行っている.

その結果、強い相補的世界観を持つ若年層ほど生活満足度が高いことを明らかにしている。また、非正規職の若年層と比べて正規職の若年層、配偶者のいない若年層と比べて配偶者のいる若年層の相補的世界観が強いことも明らかにし、正規職、結婚という「標準的な」ライフコースを歩んでいる若年層が、強い相補的世界観を持つことで生活満足度を高めているというメカニズムを発見している（狭間 2019）。

しかしながら、相補的世界観が生活満足度を支えるメカニズムは他にも考えられる。その中で本稿が注目するのが、相補的世界観の「緩衝効果」である。これは、相補的世界観がもたらすポジティブな効果が、より厳しい状況に置かれている人ほど強くなるというものである。たとえば、池上知子と矢田尚也は、30代、40代を対象としたweb調査から、相補的世界観が強いほど日本社会を肯定するようになるという効果があるが、その効果は非正規職の人のほうが強いということを明らかにしている（池上・矢田 2015）。若年層の生活満足度に引きつけて考えるならば、相補的世界観が生活満足度を高める効果が、非正規職、低収入、無配偶といった生活満足度が低いとされる状態にあるほど人ほど強い可能性がある。これらの状態が生活満足度を下げるのを和らげる、すなわち緩衝材となると考えられることから「緩衝効果」と呼ぶことができる。本稿では、従来、生活満足度に影響を与えていると指摘されている就業状態、世帯収入、婚姻状態といった属性によって相補的世界観が生活満足度を与える効果に違いが表れるのかを検証する。

2. 方法

本稿で使用するデータは「くらしと社会についてのインターネット調査」（SSP-W2020 調査）である。本稿では、若年層を25～39歳と定義し、分析を行う。なお、分析対象者数は973人である。

続いて本稿で使用する変数について説明する。

まず、生活満足度については、「あなたはつぎのようなことがらについて、どの程度満足していますか」という質問項目の中から「生活全般」について尋ねた項目を使用する。回答選択肢は「満足している／どちらかといえば満足している／どちらともいえない／どちらかといえば不満である／不満である」の5つである。回答分布を確認すると、「満足している」「どちらかといえば満足している」を足し合わせた値が47.9%となっており、「どちらともいえない」の28.0%、「不満である」「どちらかといえば不満である」を足し合わせた24.2%よりも多い（図1）。すなわち、自らの生活に対しては満足している若年層のほうが多いことがわかる。分析に使用するときには、「満足している」=5～「不満である」=1となるように数値を与え、数値が高いほど満足度が高いことを示すようにしている。

次に、相補的世界観については、2018年のデータを用いた狭間と同じく、「全体としてみれば、世の中はバランスが取れている」「悪いことばかり続いた人も、次には何か良いことが起こるものだ」という2つの質問項目を使用する（狭間 2019）。この2つの項目はC.

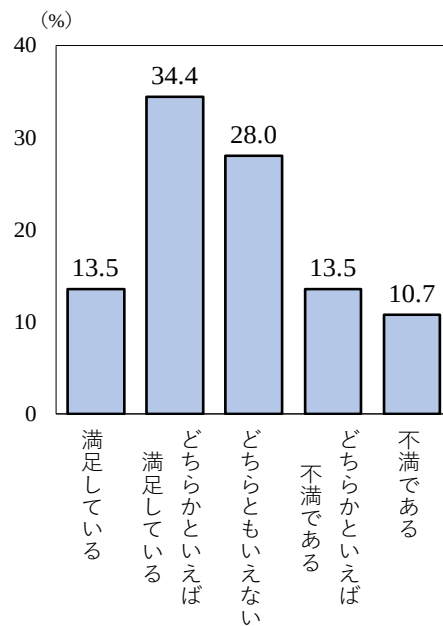


図 1 生活満足度の回答分布

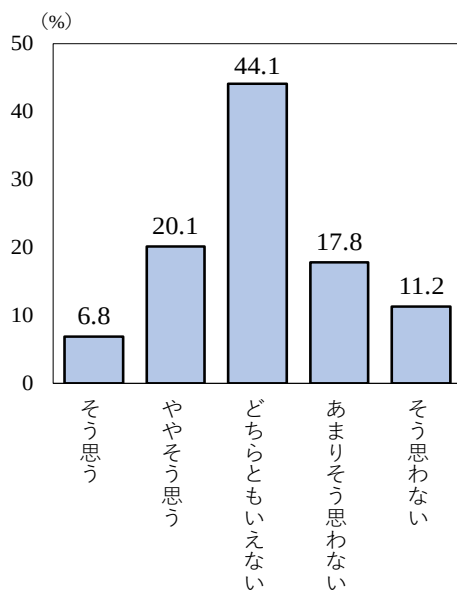


図 2 「全体としてみれば、世の中はバランスが取れている」の回答分布

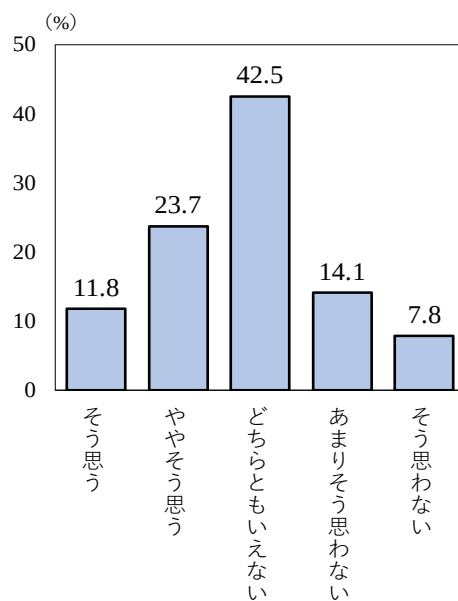


図 3 「悪いことばかり続いた人も、次には何か良いことが起こるものだ」の回答分布

Kay と T. Jost が相補的世界観の尺度として質問群の中に含めているものである (Kay and Jost 2003). 日本語訳については、池上知子が翻案したものを採用している (池上 2012). 回答選択肢はともに「そう思う／どちらかといえばそう思う／どちらともいえない／どちらかといえばそう思わない／そう思わない」の 5 つである. 回答分布を確認すると、ともに「どちらともいえない」を頂点とする山型の分布を示している. 頂点の「どちらともい

表 1 使用する変数の記述統計

変数	割合 (%)	変数	平均	標準偏差
性別 (女性)	49.1	年齢	32.7	4.35
正規職	55.7	世帯収入 (実数)	559.6	382.95
非正規職	22.6	世帯収入 (対数変換・中心化)	0.00	1.30
無職	18.3	相補的世界観	0.00	1.87
学生	1.3	非正規職×相補的世界観	- 0.04	0.90
有配偶者	43.5	無職×相補的世界観	- 0.03	0.82
		学生×相補的世界観	0.01	0.23
		有配偶×相補的世界観	0.15	1.14
		世帯収入×相補的世界観	0.41	2.47
		生活満足度	3.27	1.17
n	973			

えない」の回答割合は両方の項目で4割を越えるほど高く、やや尖った山型を示しているといえる (図2, 図3) ¹⁾。分析では、それぞれ「そう思う」=5～「そう思わない」=1と、数値が高いほど相補的世界観を強く持っていることを示すように数値を与えた上で、2つの数値を足し合わせたものを使用する。なお、2つの変数の相関係数は0.571 (1%水準で有意)、クロンバッハの α は0.727となっている。また、属性変数との交互作用効果も検証するため、数値から平均値を引き、中心化した状態で使用する。

属性を示す変数については、就業状態、収入、婚姻状態を使用する。就業状態については従業上の地位を「正規職／非正規職／無職／学生」の4カテゴリに分類し、それぞれダミー変数を作成した ²⁾。参照カテゴリは「正規職」である。収入については、対数変換を施した世帯収入を使用するが、相補的世界観との交互作用項を作るために、数値から平均値を引き、中心化を行っている。婚姻状態については、現在配偶者がいない場合=0、いる場合=1と与えた「有配偶者ダミー」を使用する。

最後に、コントロール変数として性別と満年齢も使用する。性別は男性=0、女性=1と値を与え、年齢は調査時の満年齢を使用する。

生活満足度、相補的世界観、属性変数、属性変数と相補的世界観の交互作用項、コントロール変数の記述統計については表1に示している。

本稿ではまず、相補的世界観を従属変数とし、属性変数とコントロール変数を独立変数としたOLS重回帰分析を行い、その結果を確認しておく。その後、生活満足度を従属変数、属性変数と相補的世界観、コントロール変数を独立変数としたOLS重回帰分析を行う。本稿のポイントは相補的世界観の生活満足度に対する緩衝効果があるのか否かである。そこで本稿では、各属性変数と相補的世界観の交互作用項を独立変数に投入する。この交互作

表 2 相補的世界観の規定要

	B	SE	β
定数	.257	.452	
性別 (ref: 男性)	.307 *	.127	.082
年齢	-.017	.014	-.039
正規職 (ref)			
非正規職	-.250	.151	-.056
無職	-.293	.169	-.061
学生	1.143	.516	.070
世帯収入 (対数変換)	.217 **	.046	.150
有配偶者	.541 **	.124	.143
調整済み R^2	.058**		
n	973		

注1) B:偏回帰係数 SE:標準誤差 β :標準化偏回帰係数

注2) * $p < 0.05$, ** $p < 0.01$

用項は、属性によって相補的世界観の効果がどのくらい異なるのかということを意味している。非正規職や低収入、無配偶という生活満足度が低いとされる人において、相補的世界観が生活満足度を高める効果が強くなるという結果がみられれば、それは緩衝効果がみられたとってよいだろう。分析では、独立変数に属性変数と相補的世界観、コントロール変数のみを投入したモデル 1 と属性変数と相補的世界観の交互作用項を加えたモデル 2 の両方の推定結果を提示する³⁾。

3. 分析結果

3-1 高収入者、有配偶者の相補的世界観が強い

相補的世界観を従属変数、属性変数とコントロール変数を独立変数とした OLS 重回帰分析の結果が表 2 である。まず調整済み決定係数 R^2 の値は.058 であった (1%水準で有意)。各独立変数の値を確認すると、性別 ($B=.307^*$)、世帯収入 ($B=.217^{**}$)、有配偶者 ($B=.541^{**}$) に有意な結果がでている。女性であるほど、世帯収入が多いほど、配偶者がいるほど、相補的世界観を強く持っていることがわかる。

3-2 相補的世界観が無配偶者の生活満足度低下を和らげる

生活満足度を従属変数とした OLS 重回帰分析の結果が表 3 である。モデル 1 についてみると、調整済み決定係数 R^2 の値は.239 であった (1%水準で有意)。各独立変数の値を確認すると、非正規職 ($B=-.319^{**}$)、無職 ($B=-.223^{**}$)、学生 ($B=.639^*$)、世帯収入 ($B=.153^{**}$)、有配偶者 ($B=.421^{**}$) に有意な結果がでている。正規職と比べて非正規職、無職であるほ

表 3 生活満足度の規定要因

	モデル1			モデル2		
	B	SE	β	B	SE	β
定数	3.153 **	.255		3.180 **	.255	
性別 (ref: 男性)	.078	.072	.033	.074	.072	.032
年齢	.000	.008	-.001	-.001	.008	-.002
正規職 (ref)						
非正規職	-.319 **	.085	-.114	-.305 **	.085	-.109
無職	-.223 *	.095	-.074	-.195 *	.096	-.064
学生	.639 *	.291	.063	.796 *	.322	.078
世帯収入 (対数変換)	.153 **	.026	.169	.148 **	.027	.164
有配偶者	.421 **	.071	.178	.432 **	.071	.182
相補的社会観	.207 **	.018	.330	.245 **	.028	.390
非正規職×相補的世界観				.021	.044	.016
無職×相補的世界観				-.033	.050	-.023
学生×相補的世界観				-.225	.160	-.045
有配偶者×相補的世界観				-.091 *	.038	-.089
世帯収入 (対数変換) ×相補的世界観				-.019	.015	-.039
調整済みR ²	.239**			.243**		
n	973					

注1) B: 偏回帰係数 SE: 標準誤差 β : 標準化偏回帰係数

注2) * $p < 0.05$, ** $p < 0.01$

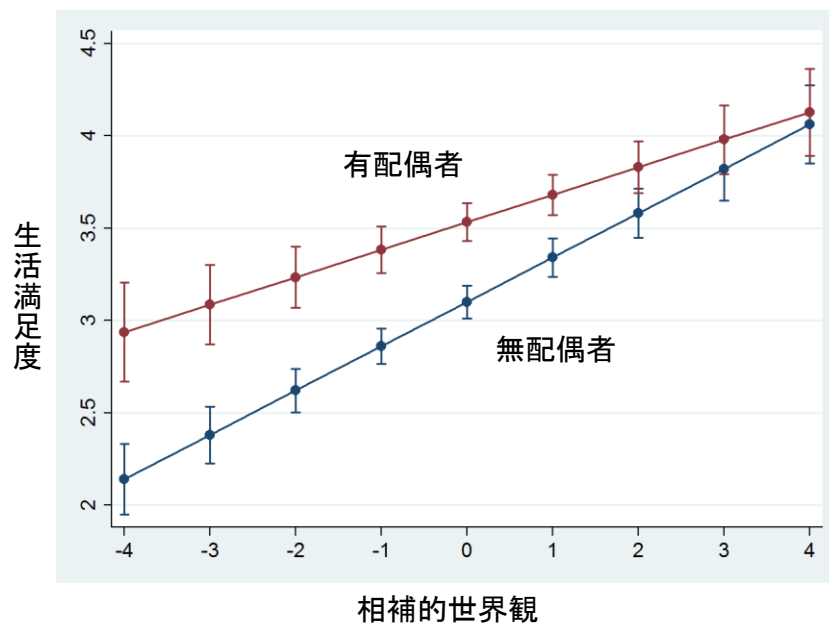


図 4 配偶者の有無別にみた相補的世界観と生活満足度の関係

ど生活満足度が低く、正規職と比べて学生であるほど、世帯収入が多いほど、配偶者がいるほど生活満足度が高いことがわかる。そして相補的世界観に有意な正の結果がでていることから ($B=.207^{**}$)、相補的世界観を持つことで生活満足度が高くなるということがわかる。従来指摘されてきた関連が本稿でも確認されたといえる。

続いてモデル 2 の交互作用項についてみると、有配偶者と相補的世界観の交互作用項のみに有意な結果がでている ($B=-.091^{*}$)。係数が負の値を示していることから、有配偶者では相補的世界観が生活満足度を高める効果が弱いということがわかる。この結果をわかりやすくするために、配偶者の有無と相補的世界観、生活満足度の関連をグラフに示したのが図 4 である。これをみると、配偶者のいない若年層ではグラフの傾斜が急になっていることがわかる。すなわち、配偶者のいない若年層では、相補的世界観が生活満足度を高める効果がより強いといえる。相補的世界観が弱い状態（図の左側）では配偶者の有無と生活満足度にははっきりとした差がみられ、無配偶者の生活満足度が明らかに低くなっている。他方、相補的世界観が強い状態（図の右側）では配偶者の有無によって生活満足度の差があるとはいえない状態になっている。このことから、相補的世界観は無配偶という状態が生活満足度を低くする効果を緩和する効果を持ち、その効果は、最終的に無配偶者の生活満足度を有配偶者とそんなにないほどの水準に保つほどであるといえる。

4. 考察

4-1 緩衝効果は若年層にのみみられる

分析の結果をまとめると次のようになる。

- ①世帯収入が多い若年層と配偶者のいる若年層の相補的世界観が強い。
- ②相補的世界観が強いほど生活満足度は高いが、この効果は無配偶者のほうが強い。

これらの結果からは、若年層が今の生活に満足する背後には相補的世界観が存在することがわかる。「世の中はバランスがとれている」「良いことが起これば悪いことも起こる」と相補的に認識することで、自らの現状について、悪い点があったとしても目をつぶることができ、高い生活満足度を保つことができるのだろう。

②の結果は、このような相補的世界観と生活満足度の関連をよく表している。配偶者のいない人の生活満足度が低いという効果はこれまで多くの研究によって提示されてきたが（脇田 2014; 狭間 2018 など）、相補的世界観を持つことが、無配偶者における生活満足度の低下を緩和している。すなわち緩衝効果があるといえる。相補的世界観の緩衝効果が、より厳しい状態にある人にみられるということであるならば、若年層にとって配偶者のいないという状態はそれだけ生活満足度を下げる要因になるということかもしれない。あるいは、たとえ現在配偶者がいなかったとしても、相補的世界観を持っていると、いずれは結婚できるとポジティブに考えることができることによって生活満足度が低くならず済むのかもしれない。なお、図表は省略するが、相補的世界観の緩衝効果は 40 歳以上の壮中

年層にはみられない。それだけ、相補的世界観の生活満足度を高める効果が、配偶者のいない若年層において強いということがわかる。

4-2 今後の課題

2018 年のデータでは非正規職の若年層において相補的世界観が弱くなるという結果が得られている（狭間 2019）。しかし本稿の分析では、就業状態と相補的世界観との間に関連が見られなかった⁴⁾。引き続き相補的世界観についてのデータをとりながら、結果の頑健さを検証していきたい。

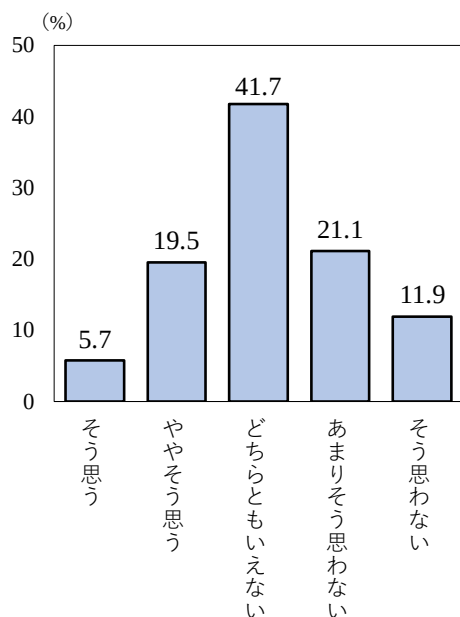
また、配偶者のいない若年層においては相補的世界観の生活満足度に対する緩衝効果がみられたものの、就業状態や世帯収入に関しては相補的世界観の緩衝効果は見られなかった。本稿の分析からは、非正規職であるほど、世帯収入が少ないほど生活満足度が低いという結果が得られている。であるならば、非正規職や低収入の若年層ほど相補的世界観が生活満足度を高める効果が強いという緩衝効果がみられてもおかしくはない。婚姻状態にはみられた緩衝効果が他の属性変数では見られなかった原因は今後の課題としたい。

付記

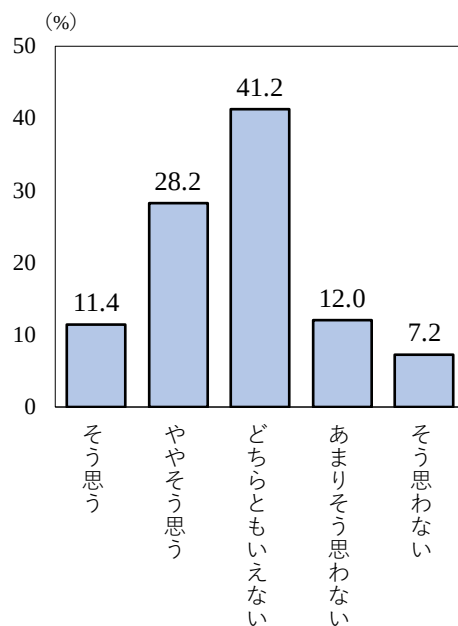
本稿は、2020 年度南山大学パッヘ奨励金 I -A-2 の助成を受けたものです。

注釈

- 1) なお、25～64 歳の全年齢層での分布を図注 1 と図注 2 に示しておく。分布の形は若年層だけの図 2、図 3 とほとんど変わらない。
- 2) 「正規職」には「経営・管理」「正規雇用」「自営業」が含まれる。若年層では、「経営・管理」「自営業」の人数が少なかったため 1 つのカテゴリに集約した。
- 3) OLS 重回帰分析に使用したソフトウェアは IBM SPSS Statistics25 である。重回帰分析の結果は最小二乗法で推定した。また交互作用項の結果を図示する際には Stata12 を使用した。
- 4) ただし、10%水準でみれば、非正規職の結果は有意となり、正規職の若年層と比べて非正規職の若年層の相補的世界観が弱いという結果になる。



図注 1 「全体としてみれば、世の中はバランスが取れている」の回答分布（全年齢層）



図注 2 「悪いことばかり続いた人も、次には何か良いことが起こるものだ」の回答分布（全年齢層）

文献

- 浅野智彦, 2015, 「若者の幸福感は何に支えられているのか」『現代の社会病理』30: 37-55.
- カローラ・ホメリヒ・清水香基, 2019, 「若者の人生評価——「幸福」と呼ばれる理想の適応」吉川徹・狭間諒多朗編『分断社会と若者の今』大阪大学出版会, 149-177.
- 藤田孝典, 2016, 『貧困世代——社会の監獄に閉じ込められた若者たち』講談社.
- 古市憲寿, 2011, 『絶望の国の幸福な若者たち』講談社.
- 狭間諒多朗, 2018, 「親同居無配偶者の自己評価」荒牧草平編『2015 年 SSM 調査シリーズ 2 人口・家族』2015 年 SSM 調査研究会, 185-198.
- , 2019, 「若年層における相補的世界観が満足度に与える影響」SSP プロジェクト (狭間諒多朗) 編『SSP-W2018 報告書』SSP プロジェクト, 60-71.
- 池上知子, 2012, 『格差と序列の心理学——平等主義のパラドクス』ミネルヴァ書房.
- 池上知子・矢田尚也, 2015, 「相補的世界観による体制正当化と社会経済的地位——正規雇用と非正規雇用の比較」『日本社会心理学会第 56 会大会発表論文集』315-01.
- 岩田考, 2015, 「「大学生」に関する総合的研究(2)大学生の生活満足度の規定要因——全国 26 大学調査から」『桃山学院大学総合研究所紀要』40(2), 67-85.
- Jost, J. T., Liviatan, I., Van der Toom, J., Ledgerwood, A., Mandisozza, A., & Nosek, B., 2010, “System justification: How do we know it’s motivated?” D. R. Bobocel, A. C. Kay, M. P. Zanna & J. M. Olson eds., The psychology of justice and legitimacy: The Ontario symposium, 11: Hillsdale, NJ: Erlbaum, 173-203.

Kay, A. C., & Jost, J. T., 2003, “Complementary Justice: Effects of “Poor but Happy” and “Poor but Honest”: Stereotype Exemplars on System Justification and Implicit Activation of the Justice Motive,” *Journal of Personality and Social Psychology*, 85(5), 823–837.

脇田彩, 2014, 「生活満足度と婚姻状態・修行状況との関連における男女差」『東京大学社会科学研究所 パネル調査プロジェクトディスカッションペーパーシリーズ』78.

山田昌弘, 2004, 『希望格差社会——『負け組』の絶望感が日本を引き裂く』筑摩書房.

階層帰属意識，主観的幸福感と結びつくのは

どのような言葉か

—自由回答の計量テキスト分析—

小林 盾 カローラ・ホメリヒ
(成蹊大学) (上智大学)

1. リサーチクエスチョン

1-1 地位，幸せの自由回答：リサーチクエスチョン

人びとは，地位や幸せをどのような言葉でイメージしているのだろうか．そうした言葉は，人びとの階層帰属意識や主観的幸福感と関連するのだろうか．

近代社会では，地位は地位達成として，幸せは主観的ウェルビーイングの1つとして，それぞれ人びとが求める価値となってきた．教育，職業，収入といった地位は，本人の努力によって達成されうる．これにたいして，性別，出身地，人種といった属性は，本人にとって変更できない．教育達成，職業達成，収入達成が地位達成のおもな構成要素とされ，まとめて「社会経済的地位」とよばれる．

ウェルビーイングは，幸福感（幸せ），満足度，健康，ストレスのないことなどから構成される．このうち，幸福感，満足度，ストレスといった主観的なものは，主観的ウェルビーイングとよばれる．

これまで，地位，幸せのどちらについても，規定要因や帰結が多様な形で分析されてきた．たとえば，地位の規定要因として出自（たとえば Blau and Duncan 1967），教育（吉川 2014），人的資本（Becker 1964），社会関係資本（Lin 2001），文化資本（Bourdieu 1979）などが指摘されている．幸せの規定要因としては，家族，収入，健康，ネットワーク，美容などの効果が確認されてきた（たとえば Frey and Stutzer 2002, Layard 2005, 大竹他編 2010, 小林 2020）．

ただし，どれもおもに量的データが分析されてきた．そのため，全体像は描けるが，情報があらかじめ想定されたものに限定されるため，想定外のケースがカバーされにくい．その結果，地位や幸せの多様性を，見のがしてきたかもしれない．自由回答によって質的データを収集すれば，地位や幸せについての人びとの実感を，予断なくありのままに把握できる．

そうした試みとして，小林・ホメリヒ（2018）がある．彼らは，幸せの自由回答を「心理的安定」など7つのコード（論文ではカテゴリ）へと分類し，どのコードが4段階の主観的幸福感と関連するのかを分析した．その結果，家族や生活といった言葉をイメージし

た人は、幸福感が有意に高かったが、収入や仕事をイメージした人は低かった。地位については、このような分析はない。そこで、以下のリサーチクエスチョンをたててアタックする。

リサーチクエスチョン 人びとは、地位や幸せをどのような言葉でイメージしているのか。そうした言葉は、階層帰属意識や主観的幸福感といった心理とどう関連するのか。

ここでは、地位、幸せと聞いてまず思い浮かべる言葉こそ、人びとが地位や幸せをどう捉えているのかをよく表すだろうと仮定している。たしかに、そうした概念について選択肢や（1 から 5 などの）数値レベルで質問しても、人びとから回答を得ることはできるだろう。しかし、そうした回答が人びとの実感と一致する保証はない。むしろ、「これまで考えたこともなかったが、聞かれたから回答した」という場合もあるだろう。

したがって、もしこのリサーチクエスチョンを解明できないと、ともすれば地位や幸せの多様性を、我われは見落としてしまいかねない。地位や幸せは、これまで考えられていたよりも、もしかしたらはるかに豊かで多様な概念である可能性がある。

1-2 仮説

地位や幸せの自由回答は、どのようにイメージされるのだろうか。2 つは明確に異なる概念であるため、つぎのように仮説をたてられよう。

仮説 1（地位、幸せの自由回答の違い） 地位と幸せは異なる概念であるため、自由回答は異なる構造をもつだろう。

では、階層帰属意識、主観的幸福感といった心理との関連は、どうだろうか。小林・ホメリヒ（2018）は、自由回答が心理と関連することを報告する。これにしたがって、つぎのように仮説をたてよう。

仮説 2（心理との関連） 地位の自由回答は階層帰属意識と関連し、幸せの自由回答は主観的幸福感と関連するだろう。

2. 方法

2-1 SSP-W2020 調査：データ

データとして、SSP-W2020 調査（2020 年「くらしと社会についてのインターネット調査」）を用いる。調査会社のパネルを用いたインターネット調査である。

母集団は 2020 年 1 月 1 日に満 25～64 歳であった、全国の男女個人である。目標回収数

は 3,000 ケースであり、住民基本台帳によって都道府県、性別、年齢（20 代，30 代，…，60 代）で標本が割り当てられた。

調査期間は 2020 年 3 月 20 日から 24 日であり、総回収数は 6,187 ケースであった。判断基準を満たさないケースが除かれ、そのうえで割当数を超えた有効回収が無作為に削除された。最終的な有効回収数は 2,998 ケースである。ただし、学歴関連情報の有効回答数は 2,278 ケースとなっている（減少分はすべて無職者）。

分析対象は、分析する変数に回答した 1,758 ケースとする。その構成は、男性 56.1%／女性 43.9%，20 歳代 9.8%／30 歳代 23.8%／40 歳代 31.9%／50 歳代 26.0%／60 歳代 8.5%，平均年齢 44.8 歳，未婚 34.8%／既婚 57.5%／離死別 7.7%，中学校卒 2.4%／高校卒 35.0%／短大・高専卒 12.2%／大学卒 45.2%／大学院卒 5.1%（専門学校など除く公的教育のみ），平均教育年数 14.3 年，正規雇用 57.1%／非正規雇用 28.6%／自営業 14.3%（無職者はいない），平均個人年収 373.7 万円，平均世帯年収 637.3 万円，平均等価所得 398.7 万円だった。

この論文では、自由回答という（オープンエンドな）質的データを独立変数とし、階層帰属意識，主観的幸福感という（クローズドエンド，選択肢式の）量的データを従属変数とする。この意味で、質的データと量的データを統合する混合研究法の 1 つとなっている（混合研究法については Creswell and Clark 2007）。

2-2 地位，幸せの自由回答：独立変数

独立変数である地位，幸せの自由回答は，小林・ホメリヒ（2018）を参考にして以下のように質問された。

質問 1（地位，幸せの自由回答） あなたにとって以下のことは，一言でいうと何ですか。正解はありませんので，イメージしたことをそれぞれについてご自由にお書きください。（お答えは具体的に）

地位とは（）
幸せとは（）

このように，地位，幸せについて，「一言でいうと何か」という形で質問し，自由に回答してもらった。こうすることで，選択肢式の回答では見のがしかねないような，人びとの多様で豊かな考え方をすくいとることが可能となる。

2-3 階層帰属意識，主観的幸福感：従属変数

仮説 2 では，階層帰属意識と主観的幸福感を従属変数としている。これらは，つぎのように測定された。

質問 2 (階層帰属意識) 仮に現在の日本の社会全体を、以下の 5 つの層に分けるとすれば、あなた自身はこのどれに入りますか。(お答えは 1 つ)

(選択肢) 上, 中の上, 中の下, 下の上, 下の下

分析では、5=上, 1=下の下とし、階層帰属意識が高いほど高い値とする。

質問 3 (主観的幸福感) 現在、あなたはどの程度幸せですか。「とても幸せ」を 10 点、「とても不幸」を 0 点とすると、何点くらいになると思いますか。(お答えは 1 つ)

(選択肢) 0 点 (とても不幸), 1 点, 2 点, 3 点, 4 点, 5 点, 6 点, 7 点, 8 点, 9 点, 10 点 (とても幸せ)

分析では、この得点をそのまま用い、主観的幸福感が高いほど高い値となる。

3. 分析結果

3-1 地位、幸せの自由回答をコーディングする

自由回答は、そのままでは分析できない。ここでは、コーディングをおこない、共通の概念をコードへとまとめていく。この段階では、全有効回収標本 2998 ケースが対象となる。全員が、2 つの自由回答になにかしら回答している。

さて、自由回答のコーディングの結果は、一意に決まるものではない。コーディングの目的によって、結果が異なる。ここでは、地位と幸せを比較できるよう、コードに共通の枠組みを設けておくことにする。

もし(地位、幸せの)「本質は～である」といった表現があれば「地位(または幸せ)の意味」、(地位、幸せの)規定要因にかんするものなら「地位(または幸せ)の条件」とする。条件は、「教育」「職業」「収入」という社会経済的地位の 3 つの要素をすくなくとも採用することとする。つまり、(地位、幸せどちらにも)教育コード、職業コード、収入コードがあらかじめ設定され、必要なら追加される。

もし「自分の～」や「社会における～」のように、参照点が言及された場合、「地位(または幸せ)の参照点」とし、自分コードと社会コードへと分ける。

もし「意味がない」「不必要」などネガティブな評価があったら、ネガティブコードとする。ぎゃくに、「大切」「ある程度必要なもの」など、ポジティブな評価はポジティブコードとする。他に、「とくにない」「分からない」などは分からないコードとした。

コーディングにあたり、SPSS テキストアナリティクスというソフトを使用した。まず、すべての自由回答について、単語(ソフト上はコンセプトとよばれる)および似た単語をあつめたもの(ソフトではカテゴリ)を抽出した。表 1 が、各自由回答における頻出単語(上位 10 単語)を報告する。このように、「自分」「人」などは地位と幸せで共通している。

いっぽうで，地位における「立場」「役職」，幸せにおける「家族」「生活」「健康」のように，共通していないものもある．

表 1 コーディングにおける頻出単語（各上位 10 単語）

質問	単語	ケース数
地位	自分	216
	ない	170
	社会的	162
	なし	160
	特に	149
	立場	147
	わかる	112
	役職	111
	ステータス	108
	人	84
幸せ	自分	328
	家族	214
	心	161
	金	156
	生活	150
	健康	145
	ない	127
	ある	126
	人	111
	なし	95

注）全有効回収標本が対象のため， $N=2998$ ．

つづいて，上記の大枠にそって単語を分類していった．できるだけおおくのケースにコードを割り振るようにしたが，コードのないケースが 400 以下となったところでコーディングを打ちきった．「ある」「ない」といった言葉には，実質的な内容がないので，コーディング対象から除外した．

その結果，表 2 のように地位について 10 コード，幸せについて 13 コードをえた．地位の意味コードが 2 つ，地位の条件コードが 3 つ，地位の参照点コードが 2 つ，地位の評価コードが 2 つ，地位の DK コードが 1 つとなった．幸せでは，それぞれ 1，7，2，2，1 となった．意味コードは地位のほうがおおく，条件コードは幸せのほうがおおくになった．

表 2 コーディング結果

質問	コード	ケース数	含まれる単語数
地位	上下（地位の意味）	1064	140
	ネガティブ（地位の評価）	522	84
	社会（地位の参照点）	513	65
	分からない（地位 DK）	421	15
	職業（地位の条件）	270	36
	自分（地位の参照点）	247	9
	影響力・責任（地位の意味）	217	51
	努力・教育（地位の条件）	170	31
	収入（地位の条件）	132	16
	ポジティブ（地位の評価）	66	14
	未コード化	378	（非該当）
幸せ	心理的安定（幸せの条件）	818	99
	自分（幸せの参照点）	573	19
	生活の安定（幸せの条件）	566	55
	感じる（幸せの意味）	514	72
	家族（幸せの条件）	404	38
	分からない（幸せ DK）	292	10
	健康（幸せの条件）	238	9
	収入（幸せの条件）	232	14
	ポジティブ（幸せの評価）	62	15
	社会（幸せの参照点）	56	7
	ネガティブ（幸せの評価）	39	4
	努力・教育（幸せの条件）	31	9
	職業（幸せの条件）	14	6
	未コード化	384	（非該当）

注）全有効回収標本が対象のため、 $N=2998$ 。

コードのないケースは、地位で 378、幸せで 384 あった。これらは分析から除かれる。他の変数の有効回答とあわせた結果、分析対象は 1758 ケースとなった。

1 つの回答（1 ケース）に、すくなくとも 1 つのコードが付与され、複数のコードが割り振られることもある。たとえば、地位について「自分のステータス」という回答には、上下コードと自分コードの 2 つが付与された。平均すると、地位の自由回答には 1.38 のコードが、幸せには 1.46 のコードが与えられた。

自由回答コードが、該当するなら 1、しない（非該当）なら 0 とする。したがって、地位のコードとして（複数回答可の）10 のダミー変数が、幸せのコードとして（複数回答可の）13 のダミー変数ができたことになる。

3-2 自由回答コードの分布

コードはどう分布するのか。図 1 が分布を報告する。地位では、このように（地位の意味についての）上下コードが 39.3%と突出して多かった。たとえば、「権力の度合い」「社会的立場」「上に立つ人になること」などと表現された。

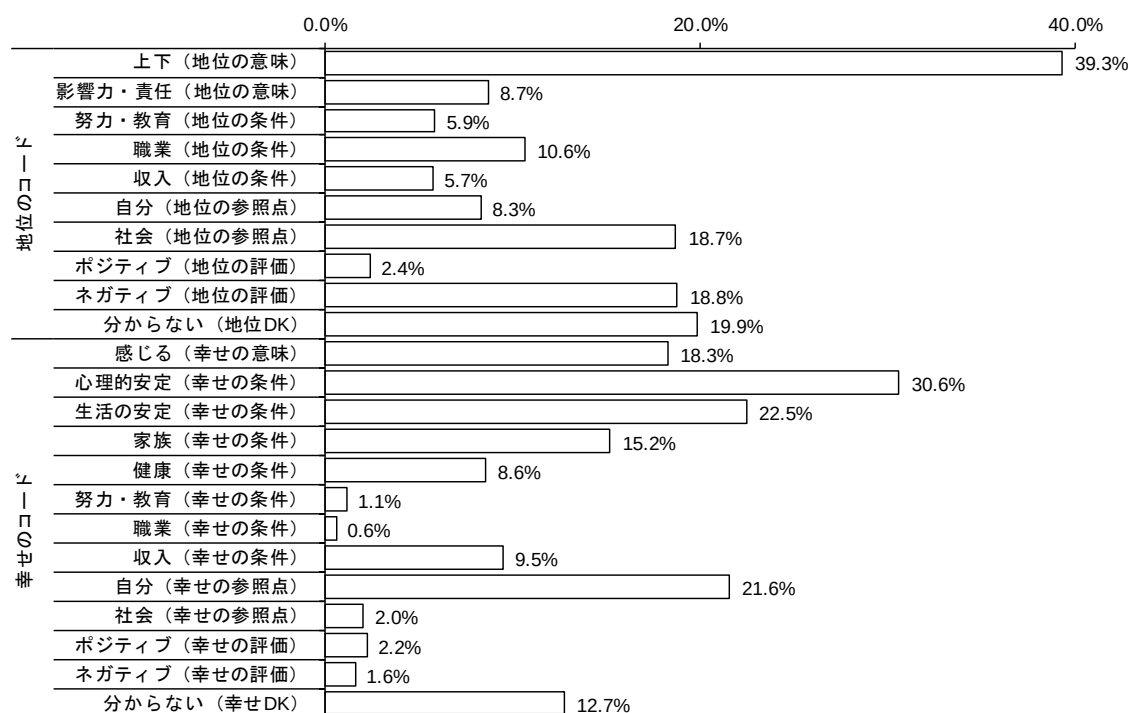


図 1 自由回答コードの分布

注) $N=1758$. 地位, 幸せそれぞれのなかで複数回答可.

つづいて多かったのが, 分からないコード 19.9%, (地位の評価についての) ネガティブコード 18.8%であった. ネガティブな評価には, たとえば「自分には必要ないもの」「見栄」などがあつた. これら以外は, およそ 10%以下の割合となっていた.

社会を参照点とした人が, 自分や個人とした人の倍以上いた. ネガティブな評価は, ポジティブな評価の 8 倍ほどあつた.

幸せはどうか. こちらはもうすこし分散している. 「心の豊かさ」「日々感謝して生きること」といった (幸せの条件についての) 心理的安定コードが 30.6%と最多で, これに「当たり前で過ごせること」「何気ない日常生活」のような生活の安定 (幸せの条件) コード 22.5%, 「自分で見つけるもの」「本人が決めるもの」のような自分 (幸せの参照点) コード 21.6%が続いた.

「感じること」「自分で決めるもの」といった (幸せの意味についての) 感じるコードが 18.3%, 「家族の絆」「愛」といった (幸せの条件についての) 家族コードは 15.2%だった. 他はおおむね 10%以下の割合である.

参照点として, 自分とする人は社会と考える人の 10 倍以上いた. 評価は, ポジティブなものがネガティブなものを上回った.

3-3 自由回答コードによる階層帰属意識，主観的幸福の違い：平均の比較

では，こうした自由回答コードによって，階層帰属意識や主観的幸福は異なるのだろうか．地位の自由回答コードを独立変数，階層帰属意識を従属変数とした分散分析と，幸せの自由回答コードを独立変数，主観的幸福を従属変数とした分散分析をおこなった．

従属変数のうち，階層帰属意識（1＝下の下，5＝上）の平均は 2.84，標準偏差は 0.95 だった．主観的幸福（0＝とても不幸，10＝とても幸せ）の平均は 5.66，標準偏差は 2.23 であった．

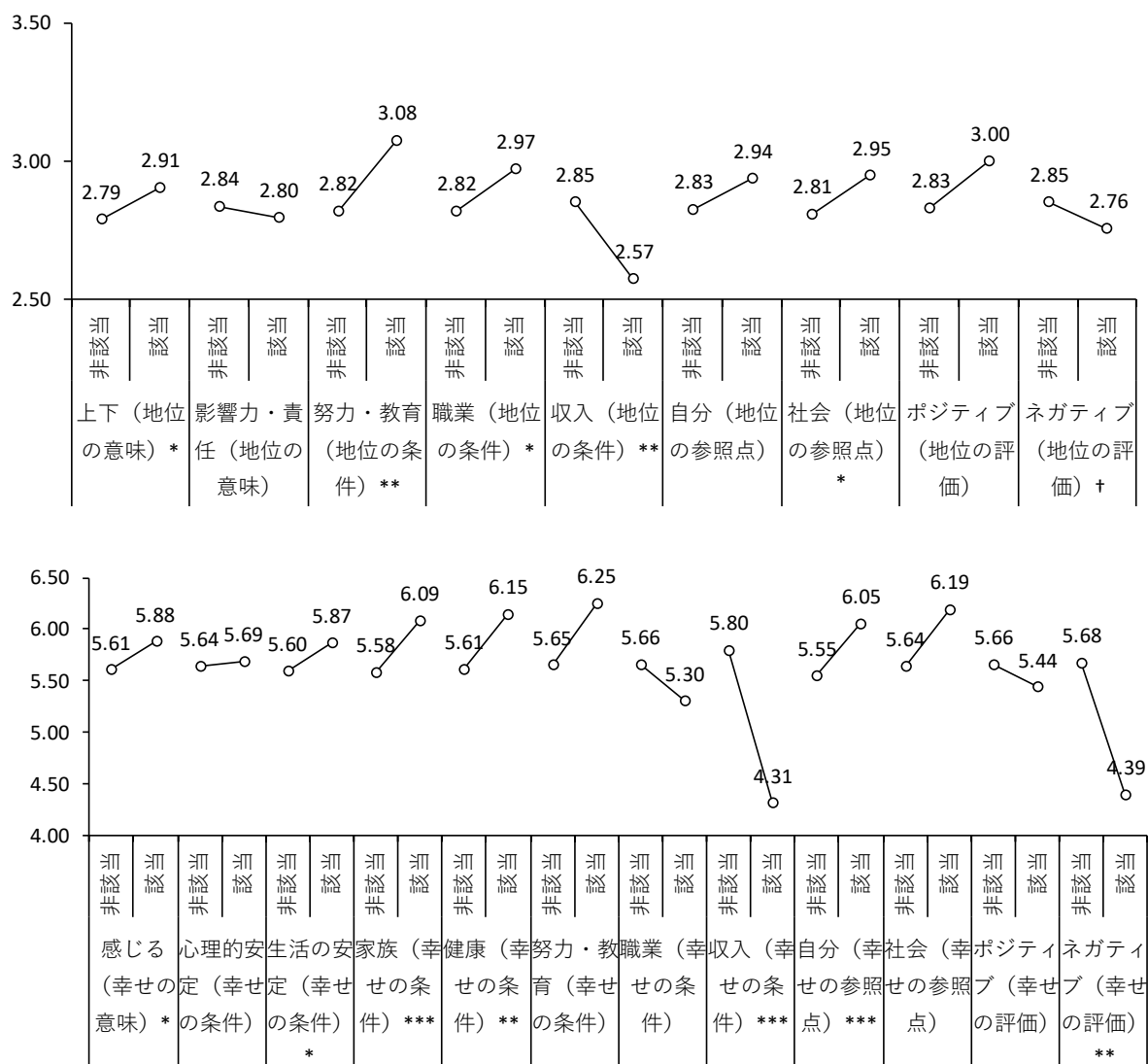


図 2 自由回答コードによる階層帰属意識（上），主観的幸福（下）の平均

注) $N=1758$. 上図では地位の自由回答コードが独立変数，階層帰属意識が従属変数．下図では幸せの自由回答コードが独立変数，主観的幸福が従属変数．***分散分析で $p<0.001$ ，**0.01，*0.05，†0.10.

図 2 が平均の比較を報告する．図 2 上によれば，地位の自由回答コードのうち，「上下」

「努力・教育」「職業」「社会」をイメージした人ほど、階層帰属意識が有意に高かった。たとえば、上下として地位をとらえる人は階層帰属意識が平均 2.91 なのに対し、そうでない人は 2.79 だった。ぎゃくに、「収入」や「ネガティブな評価」をイメージする人ほど、階層帰属意識が有意に低かった。

主観的幸福感はどうか。図 2 下によれば、幸せの自由回答コードのうち、「感じる」「生活の安定」「家族」「健康」「自分」を想起した人は、主観的幸福感が有意に高かった。ぎゃくに、「収入」「ネガティブな評価」をイメージしたら、有意に低かった。

3-4 回帰分析

こうした差は、属性や社会経済的地位で統制したら、どうなるだろうか。そこで、階層帰属意識、主観的幸福感を従属変数とした回帰分析を実施した。

独立変数は、従属変数が階層帰属意識のとき地位の自由回答コードであり、従属変数が主観的幸福感のときは幸せの自由回答コードとする。ただし、コードのうち「自分」「社会」という参照点をあらわすものと、「ポジティブ」「ネガティブ」という評価をあらわすものは、実質的な内容がないため除外する（含めた場合の分析結果も報告する）。

統制変数には、どちらの従属変数であっても、属性として男性ダミー、年齢、既婚ダミー、離死別ダミー（ベースラインは未婚ダミー）、社会経済的地位として教育年数、正規雇用ダミー（ベースラインは非正規雇用と自営）、等価所得（～万円）とした。

表 3 が結果を報告する。統制した結果、階層帰属意識は、地位として「努力・教育」をイメージした人ほど有意に高く、「収入」をイメージした人ほど有意に低かった。

表 3 階層帰属意識，主観的幸福感を従属変数とした回帰分析結果

属性	従属変数	
	階層帰属意識	主観的幸福感
属性		
男性ダミー	－0.067 **	－0.089 ***
年齢	－0.032	－0.070 **
既婚ダミー	0.235 ***	0.245 ***
離死別ダミー	0.052 *	0.099 ***
社会経済的地位		
教育年数	0.153 ***	0.064 **
正規雇用ダミー	0.067 **	0.001
等価所得（～万円）	0.291 ***	0.200 ***
地位コード		
上下（地位の意味）	0.031	
影響力・責任（地位の意味）	－0.021	
努力・教育（地位の条件）	0.042 *	
職業（地位の条件）	0.017	
収入（地位の条件）	－0.058 **	
幸せコード		
感じる（幸せの意味）		0.025
心理的安定（幸せの条件）		0.005
生活の安定（幸せの条件）		0.049 *
家族（幸せの条件）		0.050 *
健康（幸せの条件）		0.066 **
努力・教育（幸せの条件）		0.023
職業（幸せの条件）		－0.024
収入（幸せの条件）		－0.165 ***
決定係数	0.222	0.162

注) $N=1758$. 値は標準化係数. 地位コード，幸せコードそれぞれのうち，ポジティブ，ネガティブ，社会，自分，分からないの 5 コードが独立変数から除かれた. *** $p<0.001$, **0.01, *0.05, †0.10.

主観的幸福感は，幸せとして「生活の安定」「家族」「健康」をイメージすると有意に高いが，「収入」をイメージすると有意に低かった. この結果は，小林・ホメリヒ（2018）とおおむね一致する（健康の効果いがいと同じ）.

統制変数の効果をみると，おおむね女性ほど，若い人ほど，既婚者や離死別者ほど，教育が高い人ほど，正規雇用者ほど，統制変数が多い人ほど，階層帰属意識も主観的幸福感も有意に高かった（年齢の効果は階層帰属意識で，正規雇用の効果は主観的幸福感でなかった）.

なお，地位，幸せそれぞれについてすべての自由回答コードを独立変数としても，階層帰属意識への「努力・教育」の効果がなくなったが，他の有意な効果に変化はなかった.

4. 考察

4-1 仮説の検証結果

まず，自由回答コードの分布から，仮説 1「地位と幸せは異なる概念であるため，自由

回答は異なる構造をもつだろう」は、おおむね支持されたといえるだろう。地位のコードと幸せのコードをくらべると、地位では上下や権力といった「地位の意味づけ」に、人びとの関心が高いことが分かる。これにたいして、幸せでは「幸せの意味づけ」がトップではなく（感じるコード 18.3%は 4 位）、心理的安定や生活の安定といった「幸せの条件」が上位となった。

条件を比較すると、地位では職業、努力・教育、収入の順でどれも 5%以上いた。これにたいし、幸せでは収入、努力・教育、職業の順へと変わり、しかも努力・教育、職業は 1%ほどと少なかった。

個人か社会かという参照点、ポジティブかネガティブかという評価は、地位と幸せで割合が逆転した。地位では社会を参照して、ネガティブな評価が多かったが、幸せでは自分が参照点となりポジティブな評価が多かった。

つぎに、回帰分析の結果から、仮説 2「地位の自由回答は階層帰属意識と関連し、幸せの自由回答は主観的幸福感と関連するだろう」は支持された。地位のイメージのうち、努力・教育は階層帰属意識を有意に促進し、収入は低下させた。幸せのイメージのうち、生活の安定、家族、健康は主観的幸福感を促進し、収入は低下させた。

4-2 収入はブレーキ：リサーチクエスチョンへの回答

以上から、リサーチクエスチョン「人びとは、地位や幸せをどのような言葉でイメージしているのか、そうした言葉は、階層帰属意識や主観的幸福感といった心理とどう関連するのか」に、つぎのように回答できる。

リサーチクエスチョンへの回答 人びとは、地位を上下関係、社会的なもの、職業に基づくものなどとしてイメージした。努力・教育にまつわる言葉はいわばアクセルとなって階層帰属意識が有意に高くなるいっぽう、収入という言葉はブレーキとなって低くなった。幸せについては、心理的安定、生活の安定、自分にかかわるものなどとイメージした。生活の安定、家族、健康といった言葉はアクセルとなって主観的幸福感が高かったが、収入はブレーキとなって低かった。このように、地位や幸せの自由回答は特定の言葉を喚起し、階層帰属意識や主観的幸福感といった心理を左右した。

こうした知見を踏まえると、もし地位を収入や資産といったイメージで捉えているなら、階層帰属意識という点からこれは避けるべきことかもしれない。もし幸せを収入や資産で捉えるなら、主観的幸福感の視点から、やはり回避するにこしたことはないようである。

今後の課題としては、まず自由回答と階層帰属意識、主観的幸福感との関連が、因果関係となりうるのかを解明する必要があるだろう。また、自由回答であるコードを使用する人たちが、(男女、教育グループなど) 特定のグループへと偏っているかもしれない。特定の地

位コードと特定の幸せコードのあいだにも、偏りがあるかもしれない。これらも、分析することができるだろう。予備的な分析（カイ二乗検定）によれば、地位を上下と捉えるのに男女で違いなかったが、女性ほど幸せを有意に心理的安定として捉えていた。地位を上下と捉える人ほど、幸せを有意に心理的安定として捉えていた。

付記

本研究は JSPS 科研費 19H00609 の助成を受けて、SSP プロジェクト (<http://ssp.hus.osaka-u.ac.jp/>) の一環として行われたものである。SSP-W2020 データの使用にあたっては SSP プロジェクトの許可を得た。

文献

- Becker, G. S., 1964, *Human Capital: A Theoretical and Empirical Analysis, with Special Reference to Education*, National Bureau of Economic Research. (佐野陽子訳, 1976, 『人的資本——教育を中心とした理論的・経験的分析』東洋経済新報社).
- Blau, P. M. and O. D. Duncan, 1967, *American Occupational Structure*, Wiley.
- Bourdieu, P., 1979, *La Distinction: Critique Sociale du jugement*, Éditions de Minuit. (石井洋二郎訳, 1990, 『ディスタクシオン——社会的判断力批判』1, 2, 藤原書店).
- Creswell, J. W. and V. L. P. Clark, 2007, *Designing and Conducting Mixed Methods Research*, Sage. (大谷順子訳, 2010, 『人間科学のための混合研究法——質的・量的アプローチをつなぐ研究デザイン』北大路書房).
- Frey, B. S. and A. Stutzer, 2002, *Happiness and Economics*, Princeton University Press. (= 2005, 佐和隆光監訳, 沢崎冬日訳『幸福の政治経済学——人々の幸せを促進するものは何か』ダイヤモンド社).
- 吉川徹, 2014, 『現代日本の「社会の心」——計量社会意識論』有斐閣.
- 小林盾, 2020, 『美容資本：なぜ人は見た目に投資するのか』勁草書房.
- 小林盾, カローラ・ホメリヒ, 2018, 「どのような言葉が人を幸せにするのか——自由回答のテキスト・マイニング分析を用いた混合研究法アプローチ」『ソーシャル・ウェルビーイング研究論集』4: 31-47.
- Layard, R., 2005, *Happiness: Lessons from a New Science*, Penguin Press.
- Lin, N., 2001, *Social Capital: A Theory of Social Structure and Action*, Cambridge University Press. (筒井淳也他訳, 2008, 『ソーシャル・キャピタル——社会構造と行為の理論』ミネルヴァ書房)
- 大竹文雄・白石小百合・筒井義郎編, 2010, 『日本の幸福度——格差・労働・家族』日本評論社.

社会の将来認識と社会不公平感

村瀬 洋一

(立教大学)

1. 研究目的

1-1 将来に否定的な展望を持つのは誰か

人々の将来予測が人々の行動を左右することは、行動計量学等において広く知られている。また、最近の日本においては、少子高齢化や人口減少や経済成長率の低下のため、日本社会の将来については暗い見通しについての言及も多いようだ。閉塞感という言葉がよく使われ、非正規雇用の増加が話題となり、否定的な将来予測が多い。しかし、高度成長期と比べ、日本人の生活は豊かになり、この数年は若者の就職状況も良く、最近では新型コロナウイルス感染症が問題になってはいるが、それ以前のこの数年は有効求人倍率も高く、好景気な業界も多かった。そもそも、戦後 75 年間で富の蓄積があるのだし、人々の物質的な生活は豊かになり、最近の経済状況は、全般的にはそれほど悪いものではない。しかしながら社会の将来認識に関しては、本格的な社会調査データを用いた研究はあまりない。社会意識研究や若者論等において、否定的な将来認識も多いようだ。そもそも、社会について肯定的な将来認識を持つ人と、否定的な人に関して、どのような違いがあるだろうか。本論では、日本社会の将来認識や、社会の不公平感について、その規定因を検討する。

主な仮説は、教育年数や世帯収入のような社会階層に関する変数は、将来認識や不公平感を規定し、社会的地位が高い者ほど楽観的な将来認識を持つこと、また、関係的資源保有や、階層帰属意識など、社会階層に関する他の次元の変数も、将来認識と関連すること、将来認識の変数は、社会不公平感の規定因となっていることである。

2. 方法

本稿で使用するデータは「2020 年階層と社会意識全国調査」(SSP2020W)である。将来認識の指標としては「今後の日本社会は、よい方向に向かっていく」という質問項目を使用する。なお、回答選択肢は以下の図の通りである。これを連続変数として用いる時は「そう思う」を 5 として、数値が高いほど肯定となるようにしている。社会不公平感は「一般的に言って、いまの世の中は公平だと思いますか。あなたのお気持ちは、次のうち、どれに近いですか」というものである。これを連続変数として用いる時は「公平でない」を 4 として、数値が高いほど不公平となるようにしている。生活満足感と、日本社会満足感は「あなたは以下のような事柄について、どの程度満足していますか」という質問項目を用いる。生活全般、日本社会に関して、選択肢は以下の図にあるものである。階層帰属意識

は「仮に現在の日本の社会全体を、以下の5つの層に分けるとすれば、あなた自身はこのどれに入りますか」という質問項目を用いる。関係的資源としては「あなたは以下にあげるようなことをどの程度していますか。あてはまるものをお答えください」という質問項目を用いる。「国会や地方議会の議員とのつきあい」について選択肢は「いつもしている／よくしている／ときどきしている／めったにしない／したことがない」の5段階である。また、個人の内面の不安感の指標として「まごまごしていると他人に追い越されそうな不安を感じる」という質問項目を用いる。選択肢は「そう思う／ややそう思う／どちらともいえない／あまりそう思わない／そう思わない」の5段階である。回答者の従業員規模は「現在の従業員（働いている人）は、会社全体で何人ぐらいですか」という質問項目である。回答選択肢は1人から、1000人以上、官公庁までの10選択肢である。これを連続変数として使用するときには、「1人」を1、「1000人以上」と「官公庁」が9となるように数値を与えた。

3. 分析結果

3-1 基本的分布と年齢別クロス集計

まずは男女別に回答分布を確認する。図1は社会の将来認識に関する結果である。男女差は小さく、男女とも否定的な回答が多い。「どちらともいえない」も多いが、今後の日本社会を悪い方向に認識している人が多い。

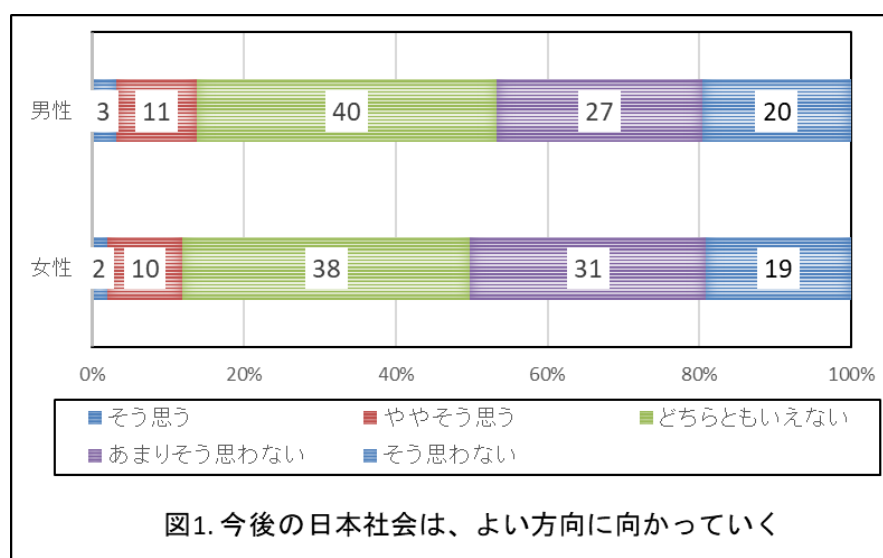


図2は社会不公平感に関する結果である。「公平でない」と「あまり公平でない」を合わせて、7割以上が現在の社会を不公平と答えている。女性はとくに、不公平という回答が多く、「公平だ」という回答はかなり少ない。図3の社会満足感も同様の傾向だが、男女差はあまりない。図4の生活全般満足感では、満足という回答が多く、個人的な生活には満足している人が多いようだ。

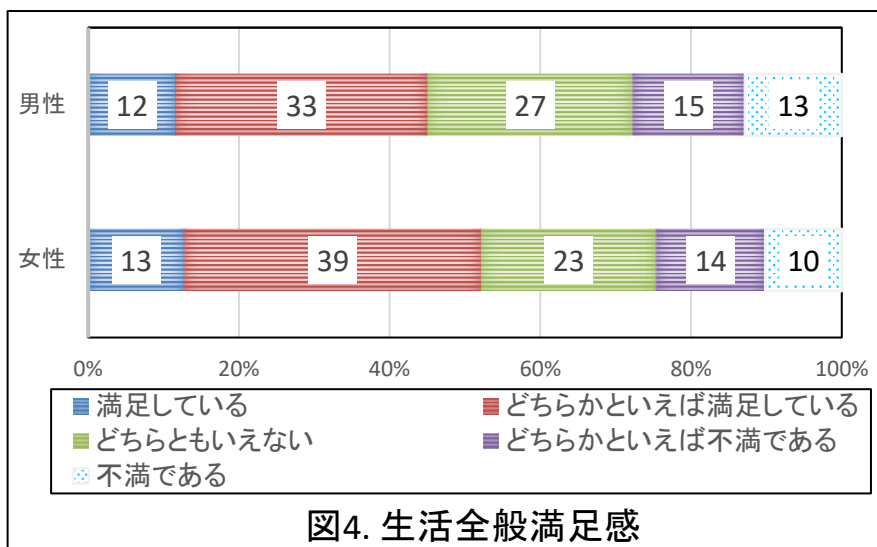
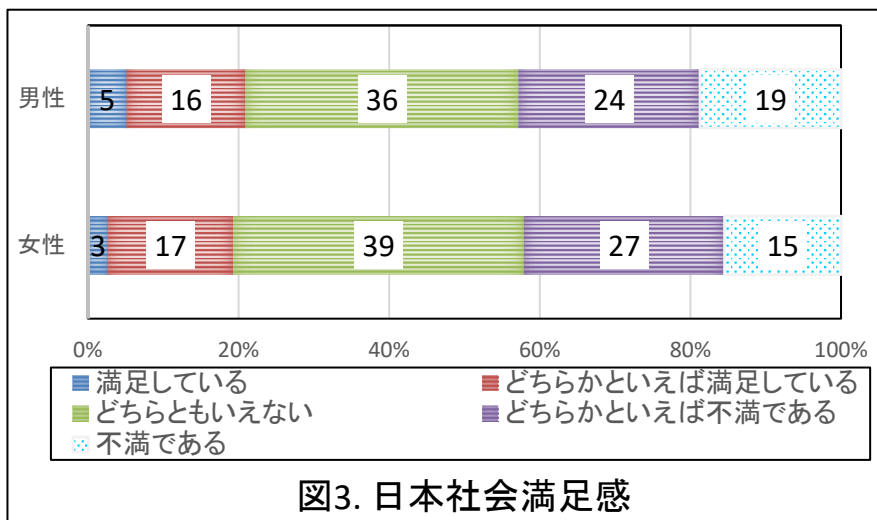
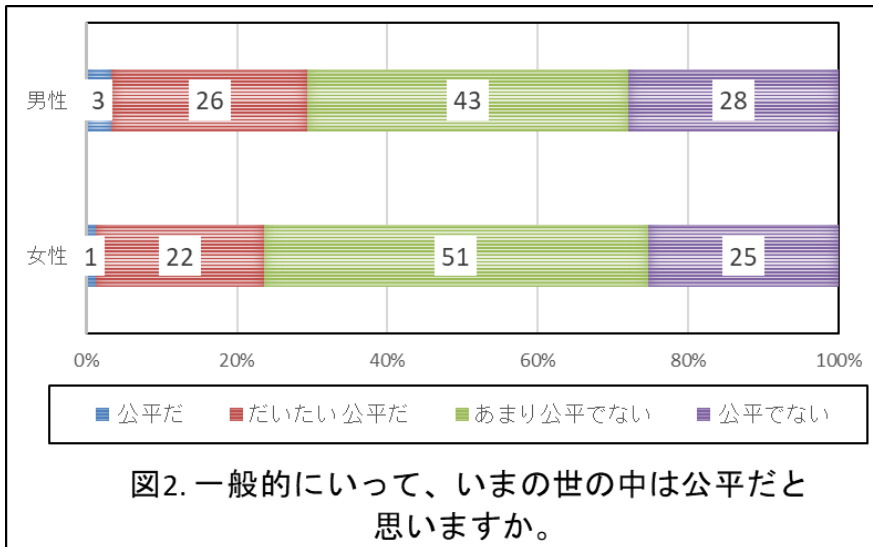
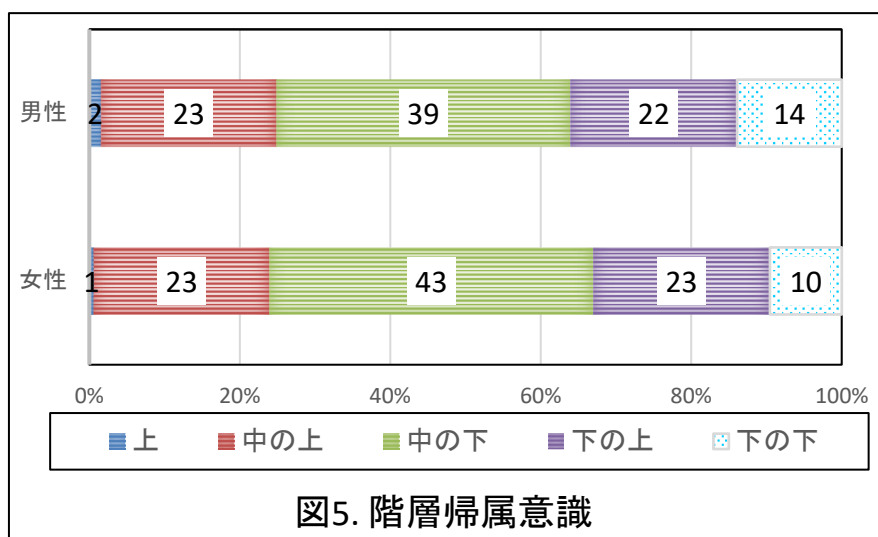
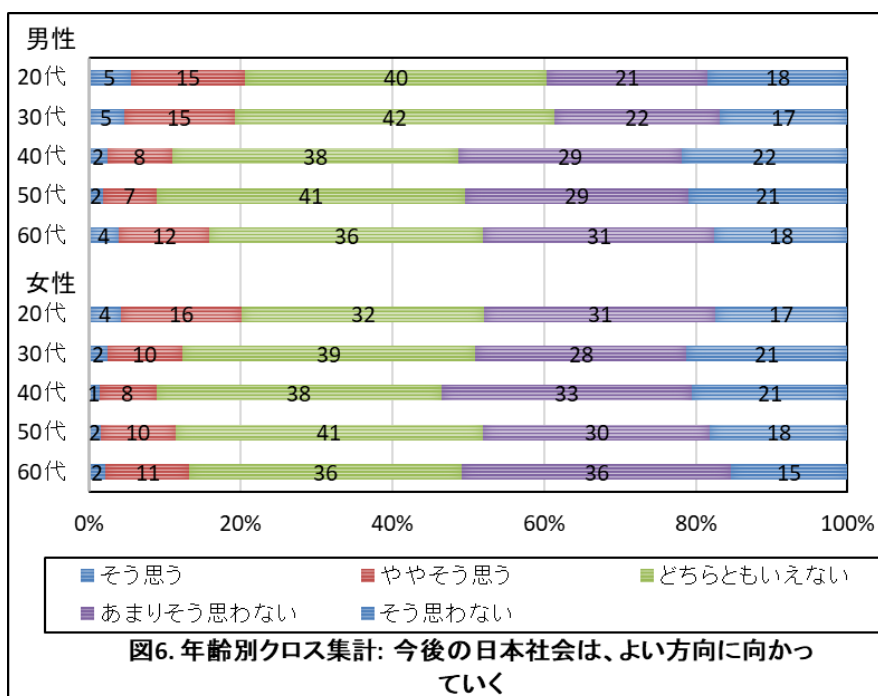


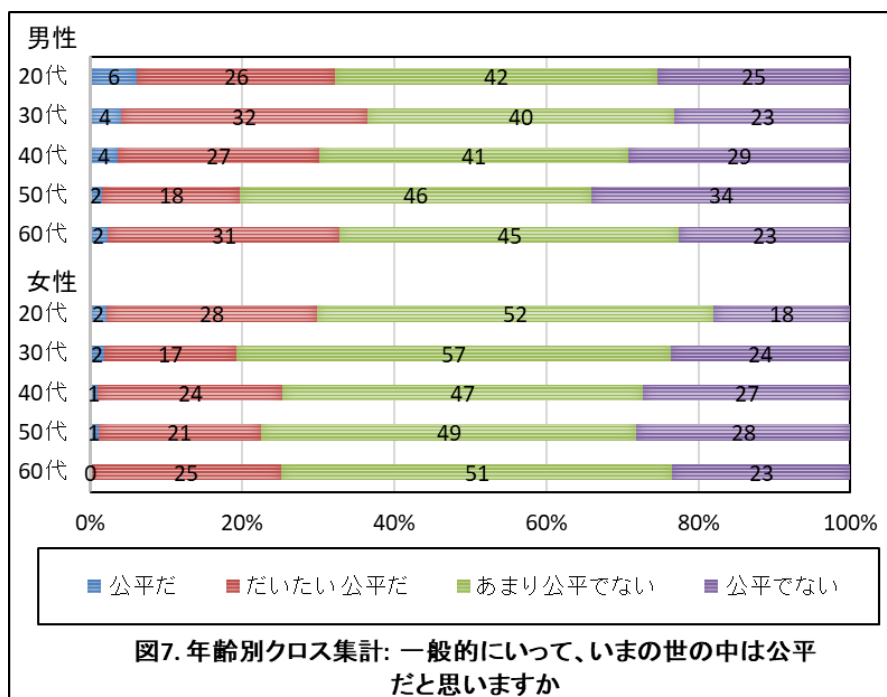
図5は階層帰属意識の分布である。上という回答は少なく、「中の上」と「中の下」を合わせて6割以上が自分を中と答えている。下という回答も3割以上ある。



社会の将来認識と年齢のクロス集計結果が図6である。「そう思う」と「ややそう思う」を合わせた肯定的回答は男女とも20代で多い。もっとも少ないのは、40代と50代であり、60代は、やや肯定的回答が多い。

社会不公平感と年齢のクロス集計結果が図7である。「公平だ」と「だいたい公平だ」を合わせ、男性は30代、女性は20代で、公平という回答が多い。男性は50代、女性は30代において否定的回答が多く、年齢との関連は単調ではない。





3-2 将来認識と社会不公平感の規定要因

次に、将来認識と社会不公平感の規定メカニズムを解明するために構造方程式モデル (SEM) を用いて分析した (分析ソフトは AMOS)。最終的な従属変数は以下の図の右端にある不公平感である。それに将来認識と、社会満足感や生活満足感が影響しているというモデルである。左端には年齢や教育年数などの基本属性を独立変数として配置し、それらの中間に、関係的資源や階層帰属意識を置き男女に分けて分析を行った。有意でないパスは除いて分析した。潜在変数 (因子) は使っていないので従来型のパス解析とほぼ同様のモデルである。男性の結果が図 8a である。最終的な従属変数である社会不公平感(unfairness)を規定しているのは社会満足感(Current Society), 社会の将来認識(Future Society), 階層帰属意識, 年齢であった。年齢は直接効果を持ち、高年齢ほど不公平感が強い。また、社会に満足するほど、肯定的な将来認識を持つほど、不公平感が強い。社会の将来認識をもっとも強く規定するのは社会満足感(.47)だが、関係的資源, 不安感(Anxiety on Others), 階層帰属意識(Self Defined stratification), 年齢, 家族人数などの変数も規定力を持つ。

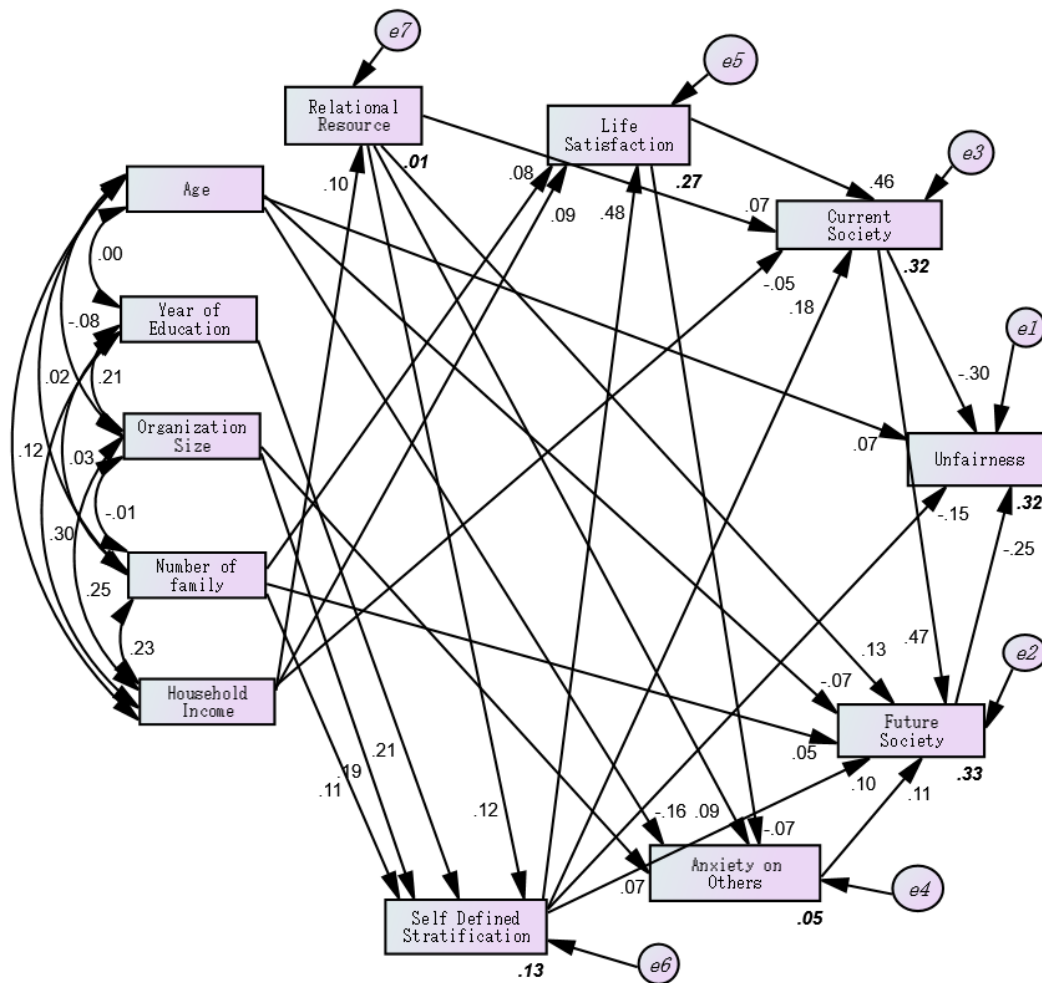


Fig 8a. SEM on Social Unfairness, Cognition on Future Society, and Social Status. 2020 SSPw Survey, male. N=1295. Standardized coefficients. Bold numbers below variables are R-squares. Chi-square=190.27 df=30 p=.00 AIC=286.27 GFI=.98 AGFI=.94 CFI=.94 RMR=.16 RMSEA=.06

女性についての結果が図 8b である。最終的な従属変数である社会不公平感を規定しているのは社会満足感、社会の将来認識、階層帰属意識であり、男性と同様だが、年齢は直接効果がなかった。また、将来認識を規定しているのは社会満足感と関係的資源だった。階層帰属意識は直接効果はないが、社会満足感を通じた間接効果がある。生活満足感は、男性と同様、社会満足感などの変数を通して効果を持つ。なお、男性の関係的資源は世帯収入に規定されていたが、女性ではどの変数とも関連がなかった。

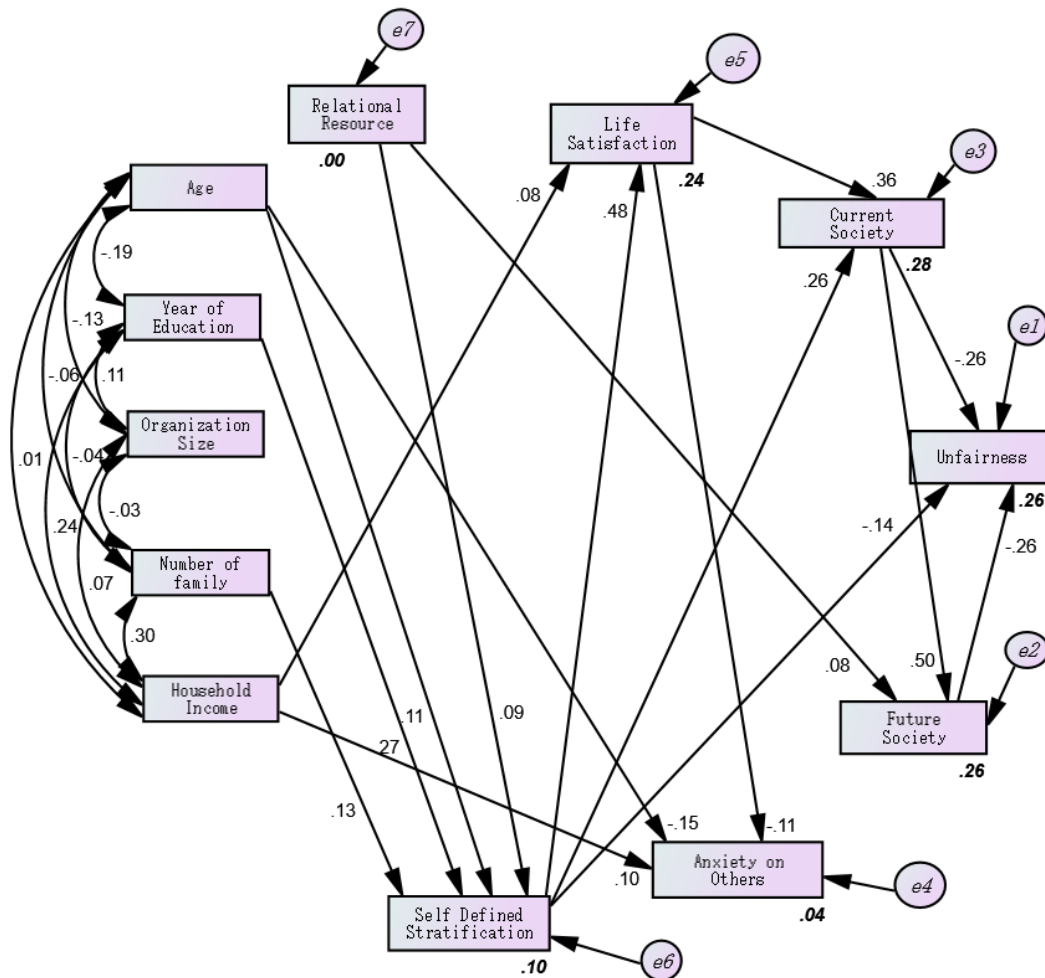


Fig 8b. SEM on Social Unfairness, Cognition on Future Society, and Social Status. 2020 SSPw Survey, female. N=941. Standardized coefficients. Bold numbers below variables are R-squares. Chi-square=170.95 df=40 p=.00 AIC=246.95 GFI=.97 AGFI=.94 CFI=.92 RMR=17.01 RMSEA=.06

4. 考察

男女とも，社会不公平感と社会の将来認識は，教育年数や世帯年収の他，階層帰属意識や関係資源により規定されていた．関係的資源やおり，仮説は概ね支持されたと言ってよい．また，生活満足感や個人の内面の不安感も，社会の将来認識を規定しており，規定要因は多様であることが分かった．男性のみ，年齢は将来認識に対して負の直接効果を持ち，若者において，他の変数の影響を統制しても，将来認識が否定的である事が分かった．また，将来認識は不公平感を規定しており，他の社会認識の重要な規定要因となりうる事が分かった．

今回のデータは予備調査としての性質が強い web 調査であり，データには代表性が十分にはない．また，雇用形態が臨時雇用かどうかなどについては質問項目がなく，自営業かどうか，持ち家，失業経験や挫折経験なども分からないので，十分な分析はできない．しかし，社会の将来認識と，社会不公平感の分布を確認し，それらの規定要因を解明するた

めに、計量分析結果をもとに検討することはできたし、ある程度は有用であったと言えるだろう。今後は、社会の将来認識がどのような要因に規定されているのかについて、さらなる分析が必要だろう。

文献

- 村瀬洋一. 2002. 「日本人の社会意識構造と地域間格差——社会不公平感と政策志向に関する SSM 調査の分析」『社会学研究』72 号: 89-110. 東北社会学会.
- 村瀬洋一. 2013. 「震災後の不安感と被害金額の規程因——被害と社会階層に関する仙台仙北調査の計量分析」『選挙研究』29: 102 - 115. 日本選挙学会.
- 村瀬洋一・立教大学社会学部社会調査グループ編. 2017. 『生活と防災についての社会意識調査報告書——仙台市, 福島市, 東京都における震災被害と社会階層の関連』立教大学社会学部.

信頼とサポートネットワーク形成

—親族・非親族ネットワーク人数の規定要因の基礎的分析—

内藤 準
(成蹊大学)

1. 本稿の課題

1-1 サポートネットワーク・信頼の重要性

この 20 年ほどの間、グローバル化も伴って社会の多様化と相互行為の不確実性が高まると言われるなか、人びとの相互協力を促すとされる「信頼」の働きが注目を集めてきた（山岸 1998）。他方、1990 年代末から 2000 年代にかけて日本社会の格差拡大が注目される中、「孤立」という社会問題が注目を集めるようになる（石田 2011）。そこでは親密な人間関係や、何らかの形で支えとなる人間関係からの排除が社会問題とされる。この「信頼」と「ネットワーク」という概念はともに、「ソーシャル・キャピタル」の概念のもとに論じられ、相互に関連があるものとされてきた。

本稿では、SSPW2020 で新たに導入した「信頼」と「ネットワーク」関連項目について、基本的な分布や関連について検討する。SSPW2020 では「信頼」の項目として、多くの大規模社会調査で広く調べられてきた「一般的信頼」のほか、「特定化信頼 (particularized trust)」の項目を新たに設定した。またネットワーク項目として、多くの調査で広く調べられている「日頃から頼りにし親しくしている相手」の人数（本稿では「サポートネットワーク人数」ないし「ネットワーク人数」と呼ぶ¹⁾）のほか、「そのうち親族は何人くらいか」を質問する項目を新たに設定した。本稿ではこれらを用いて、「他者に対する人びとの信頼のあり方とネットワーク形成のあり方には関連があるか」というリサーチ・クエスチョンについての予備的な分析をおこない、さらなる研究への展望を示すことにしたい。

SSPW2020 調査ではこのサポートネットワークと信頼を調べるための調査項目を新たに導入した。本稿の目的は、これらの調査項目の特性について SSPW2020 データを用いて確認したうえで、分析における有用性を確かめることである。SSPW2020 はランダムサンプリングによらないウェブ調査なので、統計的検定によって日本居住者全体などを母集団として分析結果を一般化する根拠を持たない。これをランダムサンプリング調査の予備調査と位置づけ（歸山 2014）、求められる性能を備えているか検討すること、またサポートネットワークと信頼に関する先行研究の知見を最新のウェブ調査データで確認しつつ、新たな項目による新たな知見とさらなる問いを見出すことが本稿の課題となる。

本節の残りの部分では、先行研究に関する若干の説明と、SSPW2020 に設定されたサポ

ートネットワーク関連項目と信頼関連項目についての説明をおこなう。第2節ではそれらの基本的な分布を示す。第3節では、まず、孤立やサポートネットワークをめぐる先行研究が見出してきた規定要因を中心に、最新のウェブ調査である SSPW2020 でもそれらの要因とサポートネットワークの関連がみられるか確認する。なお、これらの規定要因の確認では、多くの場合、先行研究で見出された関連があることが分かる。だが本稿では、親族／非親族のネットワークを区別することで、単に先行研究の再確認にとどまらない、新たな知見も見出される。次いで第4節では、本稿で照準する「信頼によるネットワーク形成」という観点から、信頼とサポートネットワークとの関連について検討する。信頼の研究では比較的初期の段階から、一般的信頼が固定的な社会関係から行為者を解放し、未知の他者たちとの新しい社会関係の形成を可能にする、というメカニズムが指摘されてきた（山岸 1998: 4）。しかしこの信頼によるネットワーク形成についての経験的な研究は多くない。本稿ではこのメカニズムについての仮説を検討し、SSPW2020 データをもちいて基本的な分析をおこなう。そのうえで、それまでのサポートネットワークの規定要因の分析をまとめる。第5節では本稿のまとめと今後の課題を示す。

1-2 SSPW2020 のサポートネットワーク・信頼関連項目

1-2-1 サポートネットワークの調査項目

日本における社会的孤立やサポートネットワークの研究においては、家族や親族に頼れる者がいないと孤立に陥りやすいことや（金澤 2014; 石田 2011; 内藤 2014b, 2018b）、高齢者より若年層、低所得者より高所得者の方が、多くのネットワーク人数や多様なサポート源を持つことが明らかにされている（菅野 2001; 内藤 2014b, 2018b）。

またサポートの種類によって、サポート源となりやすい社会関係が異なる。例えば、金銭的支援や家事支援などでは家族・親族がサポート源となる一方、相談やとくに失業時の求職では非親族がサポート源となりやすい（内藤 2014b, 2018b）。すなわち今日の日本社会では、親族であるか否かが「頼りにする人」としての働きに大きな違いをもたらす。

そこで SSPW2020 では、通常使用される「日頃頼りにし、親しくしている人」の人数を問う質問に、そのうちどのくらいが家族・親族であるかを問う副問を追加することを試みた。Q26 は SSP2015 調査で用いられたもの、Q27 は今回新たに提案したものである。

Q26 あなたが日頃から何かと頼りにし、親しくしている方は何人くらいでしょうか。

Q27 先程あげていただいた人のうち、家族や親族にあたる方は何人くらいでしょうか。

被調査者は、これらにそれぞれ人数で回答する。Q26 で「ネットワーク全体」の人数を把握し、Q27 でそのうち「親族ネットワーク」の人数を把握する。全体から親族を引くことで、「非親族ネットワーク」の人数を把握する事ができる。これにより、社会的孤立の要因

やサポートネットワーク働きの分析をさらにきめ細かくおこなえるようになる。前者は、サポートネットワークを従属変数として SES や意識との関連を分析するアプローチであり（社会的孤立の研究）、後者は独立変数として主観的福祉（SWB）や人びとの行為に及ぼす効果を分析するアプローチになる（独立変数としてのネットワークの効果の分析）。本稿では、この前者にあたる基本的な分析をおこなう。

1-2-2 信頼に関する調査項目

「信頼」はソーシャル・キャピタルの一部とされ、広範な事柄に影響する重要な主観的変数としての地位を確立している。また、社会の国際化や多様化が進み、人びとにとって多様で不確実な他者との関係形成が求められるようになる今日、ますます重要性を増しつつあると考えられてきた（山岸 1998）。だがさらに、他者に対する信頼には、他者一般に対する「一般的信頼（general trust）」のほか、特定の他者に対する「特定化信頼（particularized trust）」の重要性が指摘されている（この二つの関係については金澤（2016）などを参照）。これらについて、SSPW2020 では以下の調査項目が導入された。

Q30 あなたは以下のような意見についてそう思いますか、それともそうは思いませんか。あてはまるものをお答えください。

Q30_1 たいていのひとは信頼できる〔一般的信頼〕

Q30_2 何をするにしても知らない人よりよく知った人の方が信頼できる〔特定化信頼 1〕

Q30_3 一般につきあいの短い人より長く付き合っている人の方が必要なときに助けてくれることが多い〔特定化信頼 2〕

被調査者はこれらの問いに対し、{そう思う、 ややそう思う、 どちらともいえない、 あまりそう思わない、 そう思わない} の 5 段階から 1 つ選択する。Q30_1 は「一般的信頼」にあたり、2005 年および 2015 年 SSM 調査で用いられた「たいていの人は信用できる」から「信頼」へと文言を変えたものである。Q30_2 と Q30_3 は「特定化信頼」にあたる。「暮らしの安全と安心に関する市民意識調査」（以下、暮らしの安全調査 2017 と呼ぶ）で用いられたものから句読点に変更されたものである²。

これらはともに「信頼」と呼ばれるが、その宛先が「未知の人も含む他者一般」であるか「よく知る相手」という点で異なっている。そのため、一方ではそれぞれの信頼に影響する要因が異なりうる一方、信頼がもたらす影響も異なりうる。例えば、他者との協力を要する社会活動への参加やサポートネットワークの形成などに関して、一般的信頼と特定化信頼が、それぞれ異なる結果をもたらす可能性が考えられる。そこから、社会階層、社会的孤立や貧困リスクの不平等といった分析にもつながりうる。

本稿ではとくに、これらの項目がサポートネットワーク人数とどのように関連するかを検討する。次節ではまず、これらの項目の基本的な分布から検討をはじめめる。

2. SSPW2020 データにおける信頼のサポートネットワーク

2-1 サポートネットワークの分布

表1は、SSPW2020データにおけるサポートネットワーク関連項目の分布を示している。先に述べたように、本稿で「サポートネットワーク人数」と呼ぶのは、調査項目 Q26「あなたが日頃から何かと頼りにし、親しくしている方は何人くらいでしょうか」への回答人数である。SSPW2020ではさらに Q27「先程あげていただいた人のうち、家族や親族にあたる方は何人くらいでしょうか」という質問項目が利用可能であり、これを「親族ネットワーク人数」と呼ぶ。「非親族ネットワーク人数」は Q26 の回答から Q27 の回答を引いた人数である。比較のため表2に、2015年の全国調査データである SSP2015 と、2017年に東京都八王子市でおこなわれた暮らしの安全調査 2017 における分布を示した。

表1 サポートネットワーク人数の分布 (SSPW2020)

SSPW2020 サポートネットワーク人数				親族ネットワーク人数				非親族ネットワーク人数			
人数	度数	相対度数	累積相対度数	人数	度数	相対度数	累積相対度数	人数	度数	相対度数	累積相対度数
0	586	0.195	0.195	0	1,082	0.361	0.361	0	1,369	0.457	0.457
1	429	0.143	0.339	1	768	0.256	0.617	1	513	0.171	0.628
2	646	0.215	0.554	2	605	0.202	0.819	2	487	0.162	0.790
3	501	0.167	0.721	3	307	0.102	0.921	3	268	0.089	0.880
4	130	0.043	0.765	4	103	0.034	0.956	4	116	0.039	0.918
5	427	0.142	0.907	5	88	0.029	0.985	5	94	0.031	0.950
6	50	0.017	0.924	6	20	0.007	0.992	6	34	0.011	0.961
7	24	0.008	0.932	7	8	0.003	0.994	7	32	0.011	0.972
8	17	0.006	0.937	8	2	0.001	0.995	8	21	0.007	0.979
9	3	0.001	0.938	10	12	0.004	0.999	9	11	0.004	0.982
10	142	0.047	0.986	11	1	0.000	0.999	10	25	0.008	0.991
11	2	0.001	0.986	14	1	0.000	1.000	11	1	0.000	0.991
12	2	0.001	0.987	30	1	0.000	1.000	12	2	0.001	0.992
13	2	0.001	0.988					13	2	0.001	0.992
15	9	0.003	0.991					14	3	0.001	0.993
16	1	0.000	0.991					15	4	0.001	0.995
18	1	0.000	0.991					16	1	0.000	0.995
20	15	0.005	0.996					17	1	0.000	0.995
23	2	0.001	0.997					18	1	0.000	0.996
30	4	0.001	0.998					20	5	0.002	0.997
42	1	0.000	0.999					23	1	0.000	0.998
45	1	0.000	0.999					25	1	0.000	0.998
50	3	0.001	1.000					27	1	0.000	0.998
								30	1	0.000	0.999
								38	1	0.000	0.999
								39	1	0.000	0.999
								40	1	0.000	1.000
								50	1	0.000	1.000
N	2998	1.000		N	2998	1.000		N	2998	1.000	
平均	2.960			平均	1.374			平均	1.586		
標準偏差	3.558			標準偏差	1.613			標準偏差	2.831		

表1の SSPW2020 のサポートネットワーク人数をみると「日頃から何かと頼りにし、親しくしている方」として、0人を挙げた人が19.5%、1人が14.3%、2人が21.5%であり、2人までで全体の55.4%を占めていることが分かる（平均2.960人）。それに対して表2の二

つの調査をみると、SSP2015では0人が3.5%、1人が4.4%、2人が14.0%にすぎず（平均4.963人）、暮らしの安全調査2017でも0人が5.5%、1人が6.8%、2人が11.9%であり（平均5.127人）、両調査とも「4人」でようやく50%を超える。SSPW2020調査データは、サポートネットワーク人数が少ない回答者の割合が多いという特徴があることが分かった。

表2 サポートネットワーク人数の分布（SSP2015、暮らしの安全調査2017）

SSP2015 サポートネットワーク人数				暮らしの安全2017 サポートネットワーク人数			
人数	度数	相対度数	累積相対 度数	人数	度数	相対度数	累積相対 度数
0	124	0.035	0.035	0	87	0.055	0.055
1	155	0.044	0.079	1	107	0.068	0.123
2	498	0.140	0.219	2	188	0.119	0.243
3	809	0.228	0.447	3	235	0.149	0.392
4	234	0.066	0.513	4	236	0.150	0.542
5	857	0.241	0.754	5	274	0.174	0.716
6	172	0.048	0.803	6	89	0.057	0.773
7	89	0.025	0.828	7	63	0.040	0.813
8	74	0.021	0.849	8	49	0.031	0.844
9	4	0.001	0.850	9	5	0.003	0.847
10	416	0.117	0.967	10	167	0.106	0.953
11	2	0.001	0.968	11	3	0.002	0.955
12	4	0.001	0.969	12	8	0.005	0.960
13	4	0.001	0.970	14	1	0.001	0.961
14	1	0.000	0.970	15	19	0.012	0.973
15	30	0.008	0.979	16	1	0.001	0.973
16	2	0.001	0.979	17	1	0.001	0.974
17	1	0.000	0.979	18	1	0.001	0.975
18	1	0.000	0.980	20	28	0.018	0.992
20	46	0.013	0.993	21	1	0.001	0.993
25	8	0.002	0.995	24	1	0.001	0.994
27	1	0.000	0.995	25	2	0.001	0.995
30	13	0.004	0.999	30	1	0.001	0.996
40	2	0.001	0.999	35	1	0.001	0.996
50	2	0.001	1.000	40	1	0.001	0.997
				50	5	0.003	1.000
N	3549	1.000		N	1574	1.000	
平均	4.963			平均	5.127		
標準偏差	4.043			標準偏差	4.734		

注：80が1ケース（外れ値として除外） 注：100と150が各1ケース（外れ値除外）

次に、サポートネットワークのうち親族と非親族を分けた分布を確認する。表1からは、親族ネットワーク人数は0人が36.1%、1人までで全体の61.7%を占めることが分かる。他方、非親族ネットワーク人数は45.7%が0人と答えている。また、ネットワーク人数1人の429ケースの内訳を調べると、親族が72.03%、非親族が27.97%であった。このことから、親族の方がサポートを頼める一人目の相手となりやすいことが分かる。「孤立」をめぐる社会学的研究では、サポートネットワーク「0人」を孤立として重視してきたが、多くの人に孤立の回避をもたらしやすいのは「親族ネットワーク」だと考えられる。

他方、親族ネットワークと非親族ネットワークの分布をみると、非親族ネットワークの方が分散が大きいという特徴があることが分かる（標準偏差は親族が1.613に対し、非親族では2.831と大きい）。0～1人の累積相対度数は非親族の方が高く、非親族ネットワークは多くもてない人が多い一方、広い繋がりを持つ人が多いのも「非親族ネットワーク」だということが分かった。

以上から、SSPW2020のサポートネットワークについてまとめる。①SSPW2020 データ

では、SSP2015 および暮らしの安全調査 2017 に比べ、サポートネットワークを持たないか、少数にとどまるケースの割合がかなり多いという特徴があった。②親族、非親族ネットワークを分けた分布をみると、「0 人」の割合は非親族ネットワークの方が大きく、孤立の回避をもたらしやすいのは「親族ネットワーク」の側である。他方、広い範囲のサポートネットワークを可能にするのは「非親族ネットワーク」であることが分かった。これらのうち、①の特徴はウェブ調査という調査の特徴によるものである可能性があり、本稿の結果を他の調査と照らし合わせる必要性を示唆する。②は新設の項目によって見出されたネットワークの特徴であり、やはり今後さらに別の調査で確認する必要があるだろう。

2-2 信頼の分布

次いで、信頼の項目の分布を確認する。表 3 は SSPW2020 における一般的信頼と特定化信頼の項目について、度数分布と基本統計量を示している。表 4 では比較のため、2015 年 SSM 調査（SSM2015）と暮らしの安全調査 2017 の一般的信頼および特定化信頼の分布を示した。基本統計量の計算には、「そう思う」を 4、「そう思わない」を 0 とする一点刻みの得点をもちいた。

表 3 信頼の分布と基本統計量（SSPW2020）

SSPW2020 Q30 あなたは以下のような意見についてそう思いますか、それともそうは思いませんか。あてはまるものをお答えください。			
	Q30_1 たいていのひとは信頼できる	Q30_2 何をするにしても知らない人よりよく知った人の方が信頼できる	Q30_3 一般につきあいの短い人より長く付き合っている人の方が必要なときに助けてくれることが多い
	一般的信頼	特定化信頼1	特定化信頼2
そう思う	0.036	0.153	0.129
ややそう思う	0.211	0.398	0.324
どちらともいえない	0.366	0.316	0.402
あまりそう思わない	0.225	0.071	0.077
そう思わない	0.162	0.062	0.068
N	2998	2998	2998
平均値（最大4, 最小0）	1.732	2.508	2.368
標準偏差	1.076	1.036	1.026

表 4 信頼の分布と基本統計量（暮らしの安全調査 2017, SSM2015）

暮らしの安全調査2017 問27 以下のような意見について、そう思いますか、そうは思いませんか。あてはまる番号に○をつけてください。			SSM2015 問6 世の中の人びとについてあなたはどのように思いますか、それぞれについて、あなたの気持ちに最も近い番号をひとつ選び、○をつけてください		
ク) ほとんどの人は信頼できる		ア) 何をするにしても、知らない人より、よく知った人のほうが信頼できる	イ) 一般に、つきあいの短い人より、長くつきあっている人の方が、必要な時に助けてくれることが多い	ア) たいていの人は信用できる	
一般的信頼		特定化信頼1	特定化信頼2	一般的信頼	
そう思う		0.021	0.390	0.217	0.053
ややそう思う		0.149	0.395	0.362	0.294
どちらともいえない		0.423	0.183	0.343	0.390
あまりそう思わない		0.262	0.022	0.062	0.152
そう思わない		0.145	0.010	0.015	0.111
N		1555	1557	1555	7526
平均値（最大4, 最小0）		1.639	3.132	2.702	2.026
標準偏差		0.971	0.858	0.928	1.050

まず一般的信頼について3つの調査を比較すると、いずれも中間の「どちらともいえない」が最頻値となっている。だが、分布の形はやや異なり、SSM2015では「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」の肯定的な回答で34.7%を占めるのに対し、SSPW2020では「そう思う」から「ややそう思う」までで24.7%、暮らしの安全調査2017では17.0%にとどまっていた。当然、否定的な回答はSSM2015では少なく、SSPW2020と暮らしの安全調査2017では多い。このように一般的信頼の分布が異なる理由は、ウェブ調査とサンプリング調査の違い、調査票の違い、調査年の違いなどいくつか考えられる³。

他方、特定化信頼については、SSPW2020と暮らしの安全調査2017でしか調べられていないため、この二つの調査を比較しよう。まずどちらの調査でも共通して、特定化信頼の方が一般的信頼よりも肯定的な回答に分布が偏っていることが分かる。だが、とくに特定化信頼1については、SSPW2020も肯定的な回答割合が高いものの、暮らしの安全調査2017では肯定的な回答の割合がかなり高くなっていた。それに対し、特定化信頼2では両者の分布の違いはそこまで大きくはなかった。

表 5 信頼項目間の相関係数

SSPW2020				暮らしの安全調査2017			
	一般的信頼	特定化信頼1	特定化信頼2		一般的信頼	特定化信頼1	特定化信頼2
一般的信頼	1			一般的信頼	1		
N	2998			N	1555		
特定化信頼1	0.375*	1		特定化信頼1	0.059*	1	
N	2998	2998		N	1554	1557	
特定化信頼2	0.350*	0.656*	1	特定化信頼2	0.074*	0.427*	1
N	2998	2998	2998	N	1554	1554	1555

次に、信頼各項目間の関連を確認しよう。まず、特定化信頼の2つの項目は想定通り強い相関を示していることが分かる。そこでSSPW2020データでクロンバックのアルファを

計算すると $\alpha = 0.792$ であり、合成変数として使用するのに十分な大きさであった。そこで後の一部の分析では、必要に応じてこれら 2 つを合計した変数も使用する。

表 6 特定化信頼（合計）の基本統計量

変数	N	平均	標準偏差	最小	最大	Cronbach's α
特定化信頼（合計）	2,998	4.876	1.876	0	8	0.792

他方、一般的信頼は特定化信頼 2 つほど強く相関はしていない。しかしながらここにも調査による大きな違いがあり、SSPW2020 では一般的信頼と特定化信頼もある程度強く相関しているのに対し、暮らしの安全調査ではほとんど相関していなかった。

SSPW2020 と暮らしの安全調査 2017 のこうした違いについては、サンプルとなった被調査者の特性（地方自治体における無作為抽出と全国から割り当てられたウェブモニタ）のほか、質問項目の順番が関わっている可能性が考えられる。SSPW2020 が一般的信頼、特定化信頼 1 と 2 を順に並べていたのに対し、暮らしの安全 2017 では先に特定化信頼 1 と 2 を尋ね、その後 6 項目あけて一般的信頼を尋ねていたという配置上の違いがあった。これが今回の各項目の回答比率や項目間の相関の違いの要因となっている可能性が考えられる。今後の調査を通じて、信頼関連項目の配置については、さらに検討が必要だろう。

以上、SSPW2020 におけるネットワーク人数と信頼の分布について確認した。ネットワーク人数については SSPW2020 でやや分布の特徴が異なっており、それはウェブ調査の特徴である可能性が考えられる。他方、信頼についても調査による違いがあった。まず、一般的信頼については SSM2015 と比べて肯定的な回答比率が少なく、暮らしの安全調査 2017 により近かった。他方、2 つの特定化信頼については想定通り強い相関があり合成変数として使用可能であるものであった。地方調査である暮らしの安全調査 2017 はとくに特定化信頼 1 で大幅に肯定的な回答比率が高いという特徴があった。また、一般的信頼と特定化信頼の相関については、SSPW2020 ではある程度の相関があったが、暮らしの安全調査 2017 ではほとんど相関がないという違いがあった。これは前述のように調査票の中での項目の配置による可能性が高く、今後十分に検討を重ねる必要があるだろう。

ともあれ、これらは新たに使用を開始した項目であり、今後さらに調査と分析結果を重ねていくほかない。まずは本稿における予備的分析の結果から、分析における有用性を判断していこう。

3. サポートネットワークと社会階層・信頼

3-1 サポートネットワークを規定する諸要因

この節では、先行研究でも報告されてきた「社会的孤立」ないしサポートネットワーク人数の規定要因について確認する。孤立の研究では従来より、「男性」「高年齢」「離死別」

といった要因によって孤立化リスクが高まることが見出されているため（石田 2011），ここでもそれらの変数を中心にサポートネットワークとの関連を確認する．サポートネットワークと各要因との間に明確な関連がみられるか否かを記述していくことにする．また，孤立に関する研究では「0 人（孤立）」と「1 人（孤立予備軍）」と「2 人以上」の間には，単なる量ではなく質的な違いがあるとされてきた（石田 2011；金澤 2014）．そこで平均の比較だけではなく，クロス表による記述も用いて検討を進める．

さらに本稿では，SSPW2020 データが新たな項目により親族／非親族を区別できる利点を活かして，それらの変数が親族ネットワークと非親族ネットワークのどちらと関連しているのかも明らかにすることを試みる．なお，サポートネットワークの形成に関する信頼の効果に関しては，次の節で検討をおこなう．

3-2 性別とサポートネットワーク

表 7 は，性別と各サポートネットワーク人数（5 カテゴリー）のクロス表と平均の比較である．クロス表には 4 人以上をまとめた変数を用いた．表 7 の結果によれば，サポートネットワークの平均人数でみると，女性の方が多いが大きな違いはない．だがクロス表をみると，「0 人」の割合について男性の方が 8%ポイント以上大きいことが分かる．この結果は，「男性の方が孤立しやすい」という従来の研究の知見と一致するものだった．

表 7 性別とサポートネットワーク人数のクロス表（相対度数）と平均人数

	サポートネットワーク人数					N	平均(人)
	0人	1人	2人	3人	4人以上		
男性	0.238	0.142	0.203	0.155	0.263	1,511	2.903
女性	0.153	0.145	0.229	0.180	0.295	1,487	3.017
合計	0.195	0.143	0.215	0.167	0.279	2,998	2.960
gamma = 0.118							

さらに詳しくみてみよう．表 8 は，親族ネットワーク人数と非親族ネットワーク人数を分けたクロス表である．親族ネットワークでは男性の「0 人」が 9%ポイント以上多いという明確な違いがあるが，非親族ネットワークについては男女に大きな違いは見られないことが分かる．つまり，従来から「孤立」と定義されてきたサポートネットワーク「0 人」が男性に多いのは，主に「親族」ネットワークについて「0 人」が多いからであることが，この結果から明確に明らかになった．

表 8 性別とサポートネットワーク人数のクロス表（親族・非親族）と平均人数

親族ネットワーク人数								非親族ネットワーク人数							
	0人	1人	2人	3人	4人以上	N	平均		0人	1人	2人	3人	4人以上	N	平均
男性	0.412	0.245	0.181	0.094	0.068	1,511	1.250	男性	0.473	0.157	0.152	0.087	0.130	1,511	1.654
女性	0.309	0.268	0.223	0.111	0.089	1,487	1.500	女性	0.440	0.186	0.173	0.091	0.110	1,487	1.518
合計	0.361	0.256	0.202	0.102	0.079	2,998	1.374	合計	0.457	0.171	0.162	0.089	0.120	2,998	1.586
gamma = 0.155								gamma = 0.020							

3-3 年齢とネットワーク

先行研究では高年齢で「孤立」のリスクが高まるという結果が報告されている（石田 2011）。これについても検討する。

表 9 は、SSPW2020 における年齢（5 カテゴリー）とサポートネットワーク人数の関連を示している。この表からは、高年齢層に「0 人」の孤立者が多いという関連は見出されない。平均人数をみても、年齢層とのはっきりした関連はみられなかった。

表 10 によると、親族ネットワークが「0 人」の孤立した 60 代は少ない。平均人数を見ても 20～30 代に比べ 40～50 代でやや少ないが、60 代では最も多かった。非親族ネットワークについては、20 代で最も平均人数が多いが高年齢で減少する傾向はとくにない。

表 9 年齢とサポートネットワークのクロス表，平均人数

サポートネットワーク人数							平均(人)
年齢	0人	1人	2人	3人	4人以上	N	
20代	0.186	0.110	0.176	0.172	0.355	290	3.190
30代	0.177	0.143	0.234	0.165	0.280	683	2.858
40代	0.220	0.152	0.229	0.160	0.239	887	2.815
50代	0.219	0.143	0.203	0.159	0.276	778	3.000
60代	0.128	0.147	0.206	0.200	0.319	360	3.239
合計	0.195	0.143	0.215	0.167	0.279	2,998	2.960
gamma = - 0.0038							

表 10 年齢とサポートネットワーク（親族・非親族）のクロス表，平均人数

親族ネットワーク人数								非親族ネットワーク人数							
	0人	1人	2人	3人	4人以上	N	平均		0人	1人	2人	3人	4人以上	N	平均
20代	0.348	0.200	0.245	0.121	0.086	290	1.452	20代	0.431	0.155	0.128	0.138	0.148	290	1.738
30代	0.332	0.252	0.236	0.097	0.083	683	1.429	30代	0.461	0.168	0.171	0.088	0.111	683	1.429
40代	0.390	0.272	0.196	0.078	0.064	887	1.224	40代	0.471	0.184	0.150	0.088	0.107	887	1.591
50代	0.400	0.261	0.158	0.104	0.077	778	1.312	50代	0.449	0.170	0.167	0.089	0.126	778	1.688
60代	0.269	0.261	0.211	0.156	0.103	360	1.706	60代	0.450	0.161	0.194	0.058	0.136	360	1.533
合計	0.361	0.256	0.202	0.102	0.079	2,998	1.374	合計	0.457	0.171	0.162	0.089	0.120	2,998	1.586
gamma = - 0.0022								gamma = - 0.0036							

以上より、SSPW2020 データでは高年齢層に「孤立」が多いという傾向は見出せなかった。これについては、SSPW2020 がウェブ調査であるためである可能性があるだろう。ウェブ調査のサンプルは PC や携帯電話などに慣れた人びとに限られる。通常のランダムサンプリング調査では高年齢層ほど IT 機器を使えない傾向があるが、むしろ SSPW2020 の高齢層には親族が SNS を使用して連絡をとってくるといった可能性があるだろう。

3-4 婚姻状態とサポートネットワーク

次に、婚姻状態がサポートネットワークの有無や人数にどのように関連するかを確かめる。従来の研究では、「未婚」や「離死別」で孤立のリスクを高まることが見出されている（石田 2011）。SSPW2020 データでも婚姻状態とサポートネットワーク人数の関連は確認できるだろうか。

表 11 婚姻状態とサポートネットワーク人数のクロス表，平均人数

婚姻状態	サポートネットワーク人数					N	平均(人)
	0人	1人	2人	3人	4人以上		
配偶者あり	0.156	0.135	0.221	0.187	0.301	1,740	3.183
未婚	0.263	0.150	0.203	0.140	0.244	1,028	2.608
離死別	0.196	0.174	0.226	0.139	0.265	230	2.843
合計	0.195	0.143	0.215	0.167	0.279	2,998	2.960

gamma = -0.146

ここでは婚姻状態の指標として「配偶者あり」「未婚」「離死別」3 カテゴリーからなる変数を用いる。表 11 によれば、サポートネットワークの平均人数は「配偶者あり」が明らかに多い。また「配偶者あり」は「0 人」のケースの割合がもっとも低く、「3 人」「4 人以上」の割合が高い。反対に「未婚」は「0 人」のケースの割合がもっとも高かった。「離死別」の「0 人」は未婚よりは少ないが、「1 人」とする割合が比較的高かった。

サポートネットワークを親族と非親族に分けてより詳しくみてみよう。表 12 によれば、親族ネットワークでは「未婚」と「離死別」の「0 人」がかなり多く、反対に「配偶者あり」は「0 人」が少ない。結婚によって支援を頼める親族が増える一方、離死別によってその関係が失われるのだと考えられる。なお「離死別」は「未婚」より「1 人」のケースが少なく、「2 人」とするケースが多かった。他方、非親族ネットワーク人数では、平均人数についても人数ごとの分布についても、婚姻状態による違いは小さい。平均人数では未婚と配偶者ありはほぼ変わらず、離死別でも減らないことが分かった。

表 12 婚姻状態とサポートネットワーク（親族・非親族）のクロス表，平均人数

親族ネットワーク人数								非親族ネットワーク人数							
	0人	1人	2人	3人	4人以上	N	平均		0人	1人	2人	3人	4人以上	N	平均
配偶者あり	0.270	0.295	0.220	0.116	0.101	1,740	1.603	配偶者あり	0.456	0.178	0.159	0.086	0.122	1,740	1.580
未婚	0.485	0.211	0.172	0.089	0.042	1,028	1.023	未婚	0.465	0.154	0.168	0.096	0.117	1,028	1.585
離死別	0.496	0.165	0.200	0.061	0.078	230	1.200	離死別	0.422	0.200	0.165	0.087	0.126	230	1.643
合計	0.361	0.256	0.202	0.102	0.079	2,998	1.374	合計	0.457	0.171	0.162	0.089	0.120	2,998	1.586
gamma = - 0.272								gamma = 0.010							

gamma = -0.272

gamma = 0.010

以上の結果から、婚姻状態によってサポートネットワーク人数に差が出るという先行研究の結果が確かめられた。さらに親族と非親族を分けた分析により、婚姻状態による差の大部分は、「親族ネットワーク」によることも明らかになった。なお図表は省略するが、男

女別に分析した場合、この婚姻状態と親族ネットワークとの関連は、基本的に男性にも女性にも生じることが分かった。

3-5 本人収入とサポートネットワーク

次いで、経済的資源の有無とサポートネットワークの有無の関連を調べる。経済的な貧困や社会的排除を問題とする文脈において、私たちはしばしば、資源の欠乏状態という危機において他者からの支援が機能することを期待する。だが先行研究では、社会経済的資源をもともと多く持つ人がサポートネットワークも多く持つ傾向があることが示されてきた（菅野 2001; 内藤 2014b, 2018b）。以下では、SSPW2020 でも社会経済的な資源とサポートネットワークとの正の関連があるか否かを確かめる。

ここでは紙幅の都合から、平均の比較のみで分析を進める。図1のパネルAには、ネットワーク全体、親族、非親族別に、本人収入（4分位群）とサポートネットワーク人数の関連を示している。まず全体のネットワークをみると、明らかに本人収入が多いとサポートネットワーク人数が多いという関連が見いだせる。ただし、親族と非親族のネットワークを区別してみると、明確な関連が見いだせるのは「非親族ネットワーク」についてであることが分かる。「親族ネットワーク」については550万円以上のカテゴリーを除いて1.3人強で推移しており、明確な関連は見いだされない。

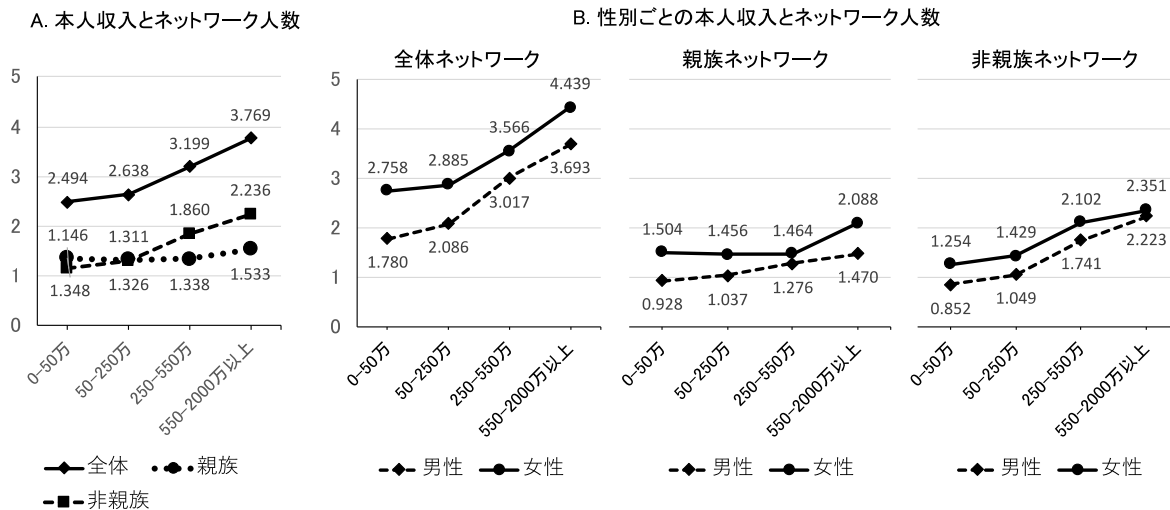


図1 本人収入とサポートネットワーク人数の関連（平均の比較）

さらに男女別に分けて検討してみよう。パネルBは、全体、親族、非親族ネットワークに分けて、男女別に、本人収入とネットワーク人数の関連を示している。まず、非親族ネットワークでは男女ともに、収入とサポートネットワーク人数の明確な正の関連がみとれる。他方、親族ネットワークでみると、女性（実線）は単調な関連ではなく、男性（破線）については単調な正の関連がみられるが、かなり弱いものであることが分かる。

以上より、SSPW2020 においても、本人収入が高いほどサポートネットワーク人数が多く、貧困リスクに晒される低収入層ほどサポートネットワーク人数でも弱い立場にある傾向が明らかになった。またさらに、本人収入が強く関連するのは主に非親族ネットワークであり、親族ネットワーク人数との関連は弱いことが明らかになった。

3-6 他人収入とサポートネットワーク

このように、本人収入が低いほどサポートネットワークが少ない傾向がある。しかし、暮らし向きの豊かさを決める消費の単位として「世帯」が重要である以上（直井 1990; 内藤 2014a）、世帯を同じくする他人の収入（他人収入）とサポートネットワークの関連についても、確認しておくことにしたい。

図 2 は、他人収入（4 カテゴリー）とサポートネットワーク人数の関連を示している。他人収入は、世帯収入から本人収入を引いた変数であり、四分位値でカテゴリーに分けてある。図 2 のパネル A の「全体」をみると、他人収入とサポートネットワーク人数との関連は単調な正の関連ではなく、関連があったとしてもかなり弱いことが分かる。また、「非親族ネットワーク」については、はっきりと一旦下がる関係が見出される。

パネル B は、全体、親族、非親族のネットワークごとに、性別で分けて、他人収入とネットワーク人数の関連を示している。これによれば、親族ネットワークについては正の関連のようにも見えるがかなり弱い。また、非親族ネットワークについては、男女とも単調な関連にはなっていないことが分かった。

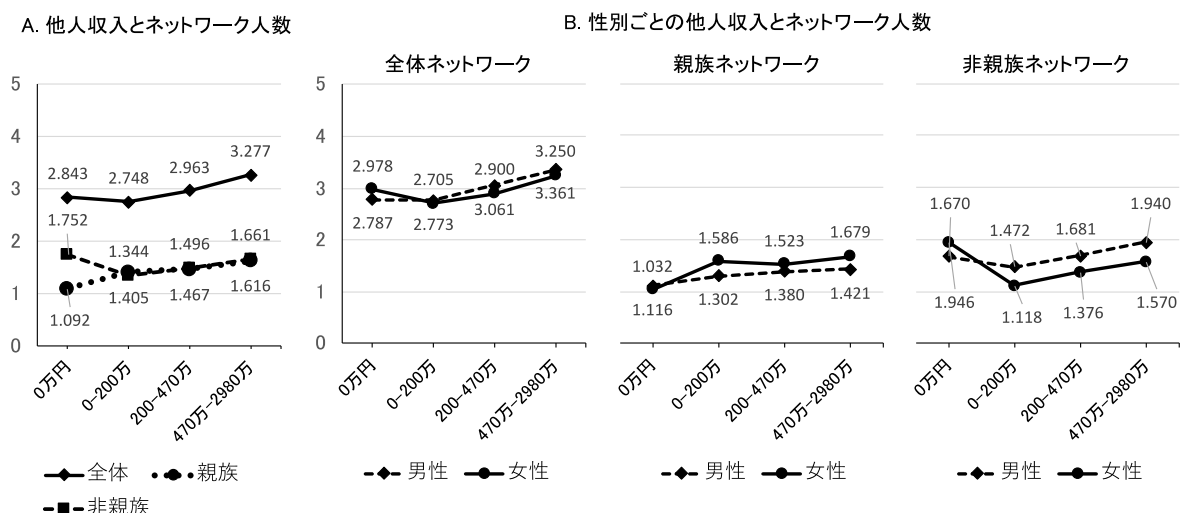


図 2 他人収入とサポートネットワーク人数の関連（平均の比較）

以上から、本人収入とサポートネットワークには明確な正の関連があるのに対して、他人収入はあまり関連がないか、あるいはあったとしても弱いものであった。これについては、ひとまず以下のような理由が考えられる。まず他人収入と親族ネットワークの正にみ

えるが弱い関連は、他人収入自体の効果というよりは同居家族人数や婚姻による親族サポートの増加を反映した擬似的関係である可能性がある。他方、非親族ネットワークの非単調で複雑な関連は、「他人収入 0 万円」のケースの多くは自ら働いて本人収入を得ているのに対し、とくに女性の場合、他人収入が高いカテゴリーでは非正規や無職になることで本人収入が減ったり、職場から切り離されることによって非親族ネットワークが減る可能性が考えられる。しかしながら、これらの可能性の検証は別の機会が必要である。

3-7 仕事とサポートネットワーク

いま述べたように、人びとの就く仕事の有無や種類は、収入の有無のみならず、サポートを期待できる人間関係の有無にもつながりうる。ここでは、従業上の地位（就業形態）とサポートネットワーク人数との関連について確認する。

図 3 は、サポートネットワーク全体、親族ネットワーク、非親族ネットワークに分けて、従業上の地位（就業形態）ごとにネットワーク人数の平均値を示している。ここからは、①「経営」はネットワーク人数が多いこと、②「非正規」と「無職」は少ない傾向があることがみてとれる。さらに親族と非親族を分けると、③親族ネットワークは「経営」以外に大きな差はないこと、④非親族ネットワークは従業上の地位（就業形態）による違いが大きく、「非正規」ととりわけ「無職」で人数が少なくなることが分かった。

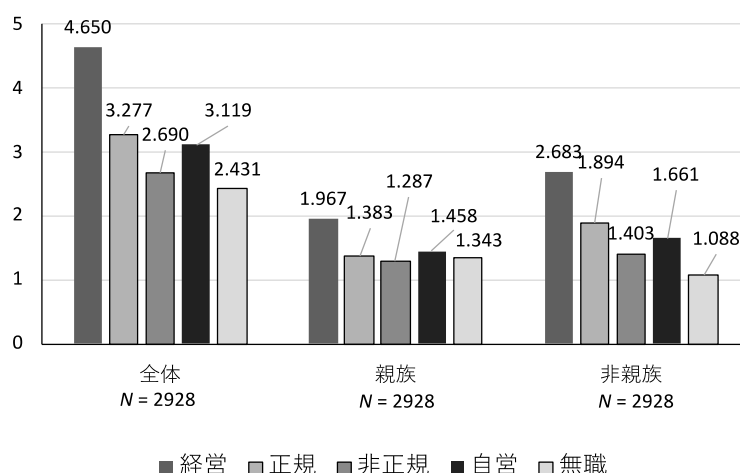
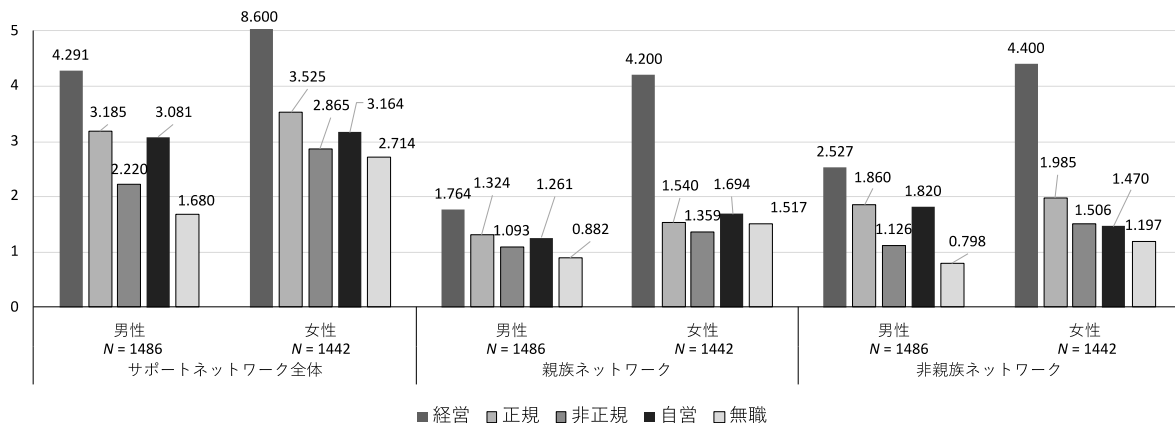


図 3 従業上の地位（就業形態）とサポートネットワーク人数の関連（平均の比較）

だが、現代の日本社会では、いまなお性別による働き方の違いが大きい。そこで男女の性別で分けて集計したのが図 4 である。



注：女性の「経営」は5ケースのみであるため，留意する必要がある。

図4 性別ごとの従業上の地位（就業形態）とネットワーク人数の関連（平均の比較）

図4では，一見して女性の「経営」が飛び抜けて高い平均人数を示しているが，これはケース数が5しかないため分析から除外する．それ以外の大きな特徴として，①親族ネットワークについては従業上の地位（就業形態）による違いが大きいことが，非親族ネットワークの男性において従業上の地位（就業形態）による違いが顕著であること，②男性の「非正規」雇用と，とくに「無職」で低い数値になっていることが分かった．

ここでは，従業上の地位（就業形態）とサポートネットワーク人数の関連について検討した．仕事に就くことは本人収入を高めるが，より直接に職場での人間関係を通じて頼れる他者を増やすと考えられる．そして実際，無職であったり，働いていても非正規だと，その他の働き方に比べて非親族のネットワーク人数が少なくなることが確認された．

本節では，「孤立」に関する先行研究で指摘されてきたものをはじめとして，人びとのサポートネットワーク人数と関連する社会経済的要因を確認してきた．SSPW2020において新たに設定した「親族／非親族」を区別する設問によって，より詳しい関連を調べることができた．そこで次節では，サポートネットワークと「信頼」との関連について検討する．

4. 信頼とサポートネットワークの形成

信頼とネットワークは，ともに社会の秩序やパフォーマンスを改善する「ソーシャル・キャピタル」とされ，相互に関連があるものとされてきた．それらの間には，良好な人間関係のネットワークの形成が，人びとへの一般的信頼の形成をもたらすといった研究がなされている（金澤 2016）．その一方，比較的初期から，一般的信頼が多様な他者との社会関係の形成をもたらす側面が指摘されてきたものの（山岸 1998），調査データを用いた経験的研究はあまりなされていない．

そこで本稿では，従来あまり探究されてこなかった「信頼がネットワークを形成する」という側面から，SSPW2020のデータを用いて予備的な分析をおこなうことにしたい．も

もちろん、一時点の調査データから変数間の関連が見出されたとしても、それがどのような因果関係にあるのか確定することはできない。しかし、本研究で導入された一般的信頼と特定化信頼の項目、および、親族ネットワークと非親族ネットワークの区別を用いて、想定される関連の有無を調べることで、今後の研究の課題設定に役立てることができる。

4-1 信頼によるネットワーク形成のメカニズムに関する仮説

従来、信頼が社会関係を形成する働きについては、「一般的信頼が不確実性が高い他者への協力的行動を促す」という形で検証されてきた (Ishiguro and Okamoto 2013)。素直に考えれば、実際にそうした協力的行動がおこなわれるなら、その後のサポートネットワークに組み込まれていく人数が増加するなどの影響があることが予想できる。だがさらに考えてみれば、そうした正の関連は必ずしも自明ではない。他者一般に対する「一般的信頼」ではなく、よく知った他者への信頼である「特定化信頼」との関係や、「親族」「非親族」の違いも考えると、より複雑な仮説が要求される。

従来おもに研究されてきた「一般的信頼」は、見知らぬ人も含む他者一般が自らに対して協力的だろうという予期である。そのことから、協力にコストがかかる社会的ジレンマ的な状況にあって、相手が見知らぬ他者であっても自分に対して協力的だろうと予期し、自らの協力が裏切られることはないだろうと予期して、相互の協力が実現するという筋書きが考えられている⁴。こうした「一般的信頼」の働きは、とくに「不確実性が高い他者との相互行為」において顕著になると考えられることから、例えば Ishiguro and Okamoto (2013) では、不確実性の高い他者を「非親族」で操作化し、ネームジェネレータで挙げられた非親族への支援提供に一般的信頼が関連するかを検証している。しかし、この Ishiguro and Okamoto (2013) のデータは「既存のパーソナルネットワークの相手」との協力に関するものなので、第一に「よく知った相手への特定化信頼」が関わる可能性があり、第二に「新たな社会関係の形成」というネットワークの拡大の有無については検討できていない。本稿では、「一般的信頼」と「特定化信頼」、「親族ネットワーク人数」と「非親族ネットワーク人数」という変数が利用可能であるため、これらを用いた仮説を検討したい。

まず「一般的信頼」について。上述のように、一般的信頼は「未知の他者」との協力を可能にしていくと考えられるため、積極的に新たな他者とのネットワークを形成していく効果が考えられる(仮説 1)。他方、一般的信頼が未知も含む他者一般への信頼であるならば、あえて「よく知る他者」のサポートを増やそうとしない、という可能性も考えられる。他者一般が協力的だと強く信じるなら、特定の知り合いのサポートを確保しなくても、支援が得られると考えるかも知れないからだ。つまり、一般的信頼が高いほど、よく知る他者であるサポートネットワーク人数が抑制されるかも知れない(仮説 2)。

次に「特定化信頼」について。特定化信頼は、よく知った人ほど協力を期待できるという予期を含む。そして、サポートネットワーク人数に挙げられるのは既知の人びとである。

そこからまず、特定化信頼が高い人はサポートネットワークを積極的に形成していく可能性が考えられる（仮説 3）。他方、特定化信頼はよく知った人ほど協力を期待できるという予期であるから、むしろ特定の一部の人びととの繋がりを強化し、あえて範囲を拡げない方向へ働くという可能性が考えられる。あるいは、頼れる既知の他者として認知する閾が高まる可能性もある。いずれにしてもこの場合、特定化信頼はむしろサポートネットワーク人数を抑制する方向へ働くかも知れない（仮説 4）。

以上を、ネットワーク形成に対する一般的信頼と特定化信頼の効果の基本的仮説だとする。さらに、これらの交互作用効果も考えられる。第一に、他者一般への一般的信頼が低い方が、よく知る相手への特定化信頼の効果が明確になる可能性がある。同様に、よく知る相手を重視せず特定化信頼が低い方が一般的信頼の効果が明確になる可能性がある。これらは、負の交互作用になる（仮説 5）。第二に、他者一般への信頼と既知の相手ほど強く信頼することは必ずしも矛盾しないから、他者一般について信頼し、なおかつよく知った相手ほど信頼できると考えるなら、幅広い未知の相手を積極的によく知るサポートネットワークへと作り上げていくかも知れない。これは正の交互作用となる（仮説 6）。

さらにもう一つ、ここでは信頼と収入の交互作用についても検討する。すでに述べたように、一般的信頼には人びとの相互協力関係を可能にし、新たな社会関係を形成させる働きが予想されていた（山岸 1998）。一般的信頼のこの側面を検討した Ishiguro and Okamoto（2013: 7）は、人びとに数人の知人を挙げてもらい（ネームジェネレータ）、その知人と援助を交換する確率が、一般的信頼によって高められることを見出している（主効果）。またさらに、「非親族」を不確実性が高い他者の指標として操作化したうえで、知人が非親族でありなおかつ自分が高収入であるとき、一般的信頼の効果が増加する交互作用があるとしている。

本稿でもすでに、本人収入がサポートネットワーク人数と正の関連を持つことを見てきた。このことは、さまざまな社会活動に参加したり、人と交際するための経済的資源が、サポートネットワークの人数に影響していることを示唆している。ここでさらに Ishiguro and Okamoto（2013）の結果をふまえるならば、本人収入とサポートネットワークとの正の関連にも、一般的信頼との交互作用があるという仮説が考えられる（仮説 7）。もし Ishiguro and Okamoto（2013）のいうように、一般的信頼が高いことと多くの経済的資源をもつことが相まって、他人との相互協力を促す交互作用効果があるなら、その結果として良好な相手とのサポートネットワーク形成が促されると予想することができるだろう。以上の検討を、一連の仮説にまとめることができる。

仮説 1. 一般的信頼にはネットワーク人数との正の関連がある

仮説 2. 一般的信頼にはネットワーク人数との負の関連がある

仮説 3. 特定化信頼にはネットワーク人数との正の関連がある

仮説 4. 特定化信頼にはネットワーク人数との負の関連がある

仮説 5. 一般的信頼と特定化信頼には、負の交互作用がある

仮説 6. 一般的信頼と特定化信頼には、正の交互作用がある

仮説 7. 非親族ネットワーク人数に対する一般的信頼と本人収入の関連には正の交互作用がある。

また、先行研究に倣って「他者の不確実さ」が「非親族」に顕著だと考えるなら、仮説 1 で関連を持つのは「非親族ネットワーク人数」、仮説 3 で関連を持つのは「親族ネットワーク人数」になるという予測もできるかもしれない（補助仮説）。以下では、SSPW2020 データを用いてこれらの仮説を簡単に検討してみたい。

4-2 信頼とサポートネットワークの関連

まず、一般的信頼、特定化信頼 1、特定化信頼 2 の各項目とサポートネットワーク人数の関連を確認しよう。図 5 は、信頼の各項目と、各種のサポートネットワーク人数との関連を示している。「そう思う」が高信頼、「そう思わない」が低信頼を表す。ここから以下のことが分かる。

第一に、一般的信頼、特定化信頼 1、特定化信頼 2 はすべて、サポートネットワーク人数との明確な正の関連がある。第二に、一般的信頼の方が特定化信頼よりも少し強く関連しているように見える。第三に、二つの特定化信頼は非常によく似た関連を示している。第四に、「親族／非親族」で分けると、親族ネットワークの平均人数は一定の水準で頭打ちになり、それ以上の人数は非親族ネットワークによる部分が大きくなる。以上の結果は、仮説 1、仮説 3 を支持し、仮説 2、4 は支持しないものであった。一般的信頼は非親族ネットワークと、特定化信頼は親族ネットワークとより強く関連するという補助的な仮説については、あまり明確な違いがあるとはいえない結果だった⁵。

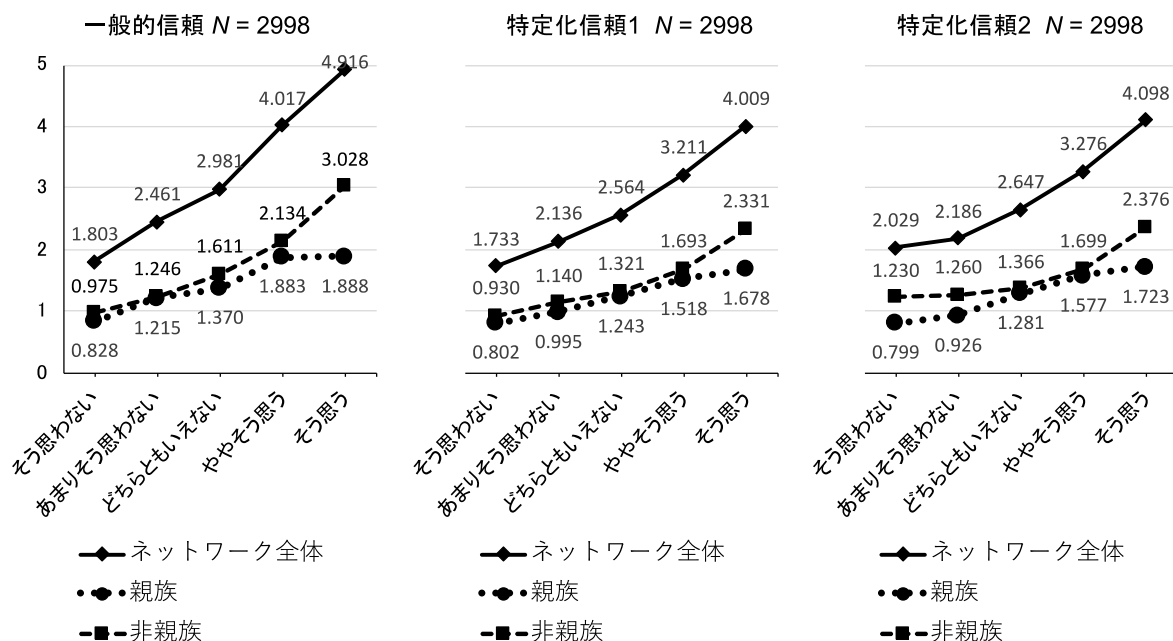


図 5 信頼とサポートネットワーク人数

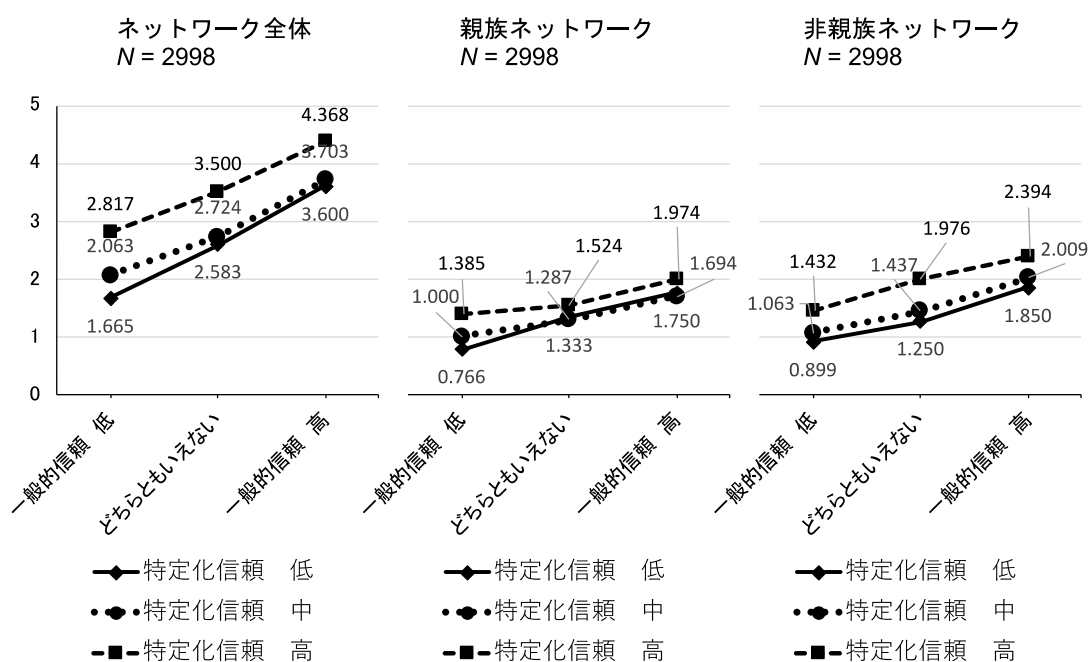


図 6 一般的信頼とサポートネットワーク人数の関連（特定化信頼の水準別）

次に、交互作用に関する仮説 5，仮説 6 についても検討してみよう．図 6 は，特定化信頼の水準ごとに，一般的信頼とサポートネットワーク人数の関連をみたものである．特定化信頼は，特定化信頼 1 と特定化信頼 2 を合計した変数（最小 0，最大 8）について，0～3 を「低」（447 ケース），4～5 を「中」（1298 ケース），6～9 を「高」（1253 ケース）の三つの水準にカテゴリー化した．一般的信頼は 3 カテゴリーにまとめたものを用いた．

ここから以下のことが分かる．①ネットワーク全体，親族，非親族いずれについても，特定化信頼の水準にかかわらず一般的信頼はネットワーク人数と正の関連がある．②特定化信頼の主効果については，「低」と「中」は平均人数にあまり違いが無いが，「高」で多くなる．③交互作用の有無について．特定化信頼の水準が違ってても，一般的信頼とネットワーク人数の関連の仕方に明確な変化は見られない．つづきに見れば，ネットワーク全体における「特定化信頼 低」のグループでやや関連が強いようにも見える．ただし，はっきりした違いではなかった．

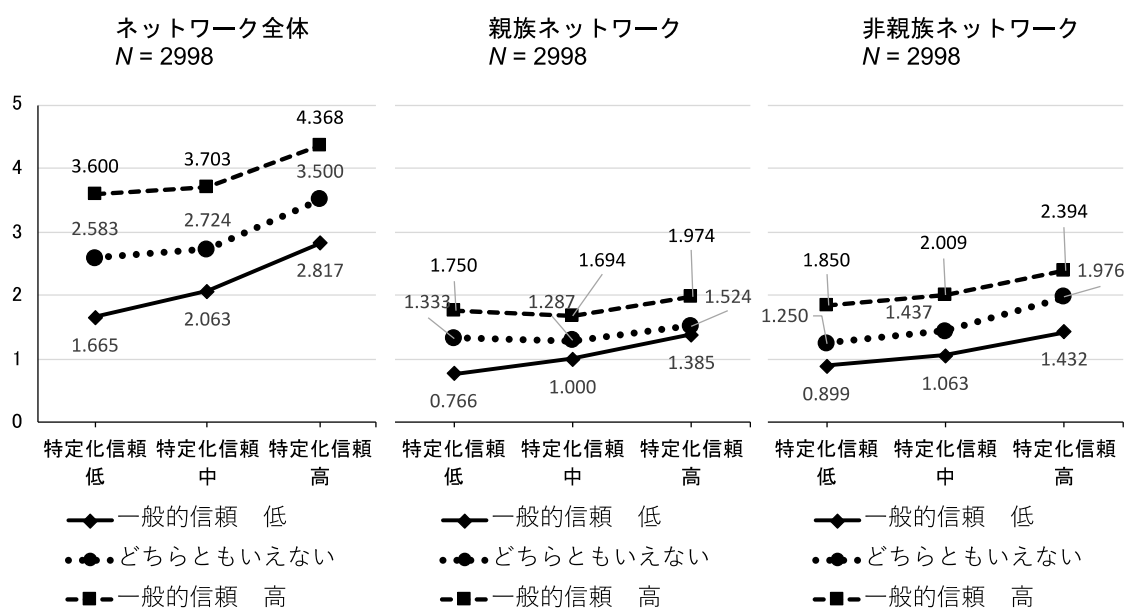


図 7 特定化信頼とサポートネットワーク人数の関連（一般的信頼の水準別）

図 7 は，同じ集計値を用いて，一般的信頼の水準ごとに，特定化信頼とネットワーク人数の関連をみたものである．ここからは以下のことが分かる．①ネットワーク全体，親族，非親族いずれについても，一般的信頼の水準にかかわらず特定化信頼はネットワーク人数と正の関連がある．②一般的信頼の主効果については，特定化信頼とは異なり，低から高へ高くなるにつれて平均人数が多くなっていた．③交互作用の有無について．一般的信頼の水準が違ってても，特定化信頼とネットワーク人数の関連の仕方に大きな違いはみられなかった．詳しくみると，全体と親族ネットワークにおいて，「一般的信頼 低」のグループでは「特定化信頼 低」から「中」に 0.24 人程度の差がある一方，一般的信頼が「中」と「高」のグループでは，特定化信頼の「低」と「中」との間に差が無い．しかし，ここでも明確な交互作用はみられなかった．以上より，交互作用に関する仮説 5，仮説 6 については，支持されたとはいえない結果となった．

最後に，非親族サポートネットワーク人数に対する一般的信頼と本人収入の正の関連には交互作用効果があるという仮説 7 について検討しよう．図 8 は，ネットワーク全体，親

族ネットワーク、非親族ネットワークそれぞれについて、一般的信頼の水準別に、本人収入とサポートネットワーク人数の関連を示したものである。まずネットワーク全体についてみると、一般的信頼が高いほど平均人数が多くなる一般的信頼の主効果と、高収入ほど平均人数が多くなる本人収入の主効果が確認できる。また、一般的信頼が「低」と「どちらともいえない」のグループでは本人収入にともなうネットワーク人数の増加の仕方が違わない一方、「高」のグループでは（単調ではないものの）収入にともなうネットワーク人数の増加の仕方が大きくなっているように見える。これは交互作用を示唆する。

次いで、親族ネットワーク、非親族ネットワークを分けて検討する。親族ネットワークについては、一般的信頼の水準にかかわらず本人収入とネットワーク人数に明確な関連はない。非親族ネットワークでは、一般的信頼が「低」や「どちらともいえない」よりも、「高」のグループで収入とネットワーク人数の正の関連が、単調ではないが顕著になっているようにみえる。これはひとまず、非親族ネットワーク人数に対する収入と一般的信頼の正の交互作用に関する仮説 7 を支持すると考えることができる。

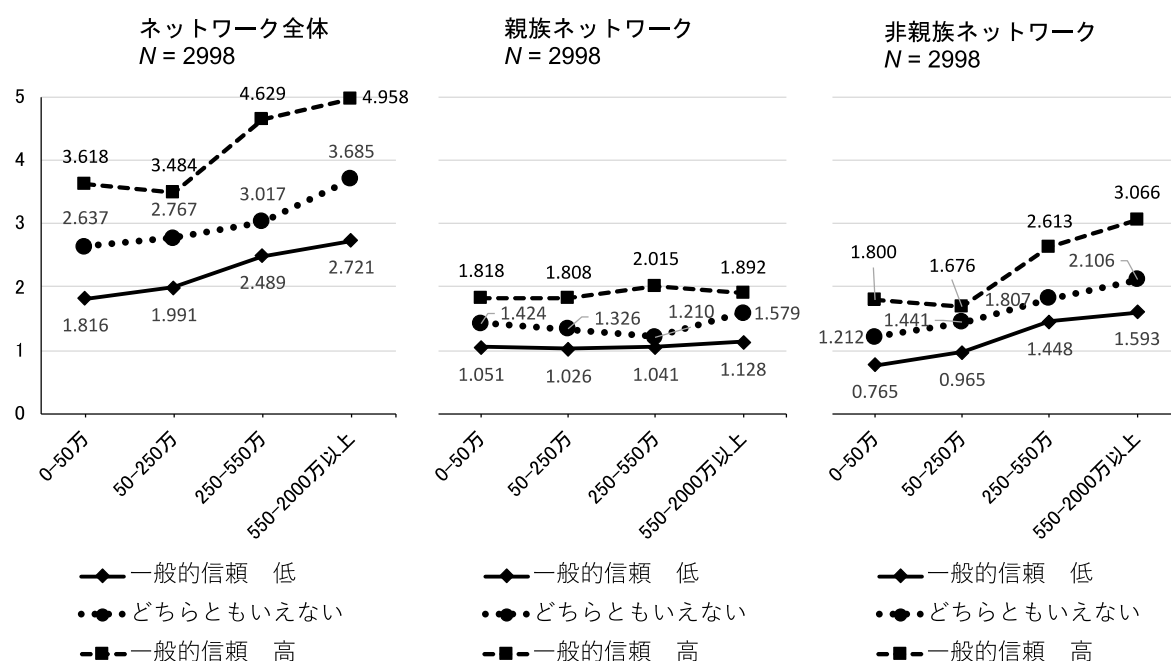


図 8 本人収入とサポートネットワーク人数の関連（一般的信頼の水準別）

以上、一般的信頼と特定化信頼という 2 種類の信頼を設定し、親族ネットワークと非親族ネットワークを区別できる SSPW2020 の特性を活かして、「信頼によるネットワーク形成」という観点からいくつかの仮説を検証した。その結果、一般的信頼、特定化信頼ともに、サポートネットワーク人数（親族、非親族）と正の関連があることが分かった（仮説 1, 3）。また、非親族ネットワークに対する本人収入と一般的信頼の正の交互作用については、ひとまず支持される結果となった（仮説 7）。

SSPW2020 の特徴である親族・非親族ネットワークを分けた分析によって、新しく明らかになったこともある。まず、一定程度以上のネットワーク人数の増加には非親族ネットワークが肝要であることが分かった。また、一般的信頼と特定化信頼の両者を用いることで、一般的信頼の方がやや強い関連にみえることが分かった。一方、少なくとも今回の結果からは、信頼の種類と親族／非親族の違いとの結びつきはみられなかった。

4-3 OLS による関連の確認（性別、年齢、仕事、収入、家族構成、信頼の水準）

本節の最後に OLS で推定した偏回帰係数を示す。被説明変数は、サポートネットワーク人数、親族、非親族ネットワーク人数である。説明変数として、ここまで検討した性別、年齢、婚姻状態、仕事、収入、一般的信頼、特定化信頼、信頼の交互作用項、そして一般的信頼と本人収入の交互作用項を投入した。そのほか統制変数として、健康状態(主観的)、同居人数を投入した。性別は女性ダミー、年齢は 20 代を参照カテゴリーとするダミー変数である。健康は最低 0、最高 4 の一点刻みとした。婚姻状態は「配偶者あり」を参照カテゴリーとするダミー変数。同居人数は本人を含む世帯人数である。従業上の地位（就業形態）は「正規雇用」を参照カテゴリーとするダミー変数。収入は本人収入と他人収入に分けている。一般的信頼と特定化信頼（合計）は標準化した変数を用いた。なお、SSPW2020 は無作為抽出標本調査ではないが、参考として検定した場合の p 値も示している。

表 11 は、OLS によって推定した偏回帰係数である。この結果から、ここまでおこなってきたサポートネットワーク人数の規定要因の分析結果について確認しよう。性別では、女性の方が男性よりもサポートネットワーク人数が多く孤立しにくい。なお、この差は主に「親族ネットワーク」における男女差による。年齢について、先行研究では高齢になると孤立化リスクが高まると報告されていたが、SSPW2020 データでは、60 代でも大きくネットワーク人数が少なくなることはなかった。これはウェブ調査という調査の特性による可能性があるだろう。「健康」は非常に多くの変数と関連を持つことが分かっているため、統制変数として投入したが、ネットワーク人数とも正の関連があった。婚姻状態は、「未婚」だと親族ネットワーク人数が少ない一方、非親族ネットワークとは関連しない。これは婚姻による親族の増加によると考えられる。OLS による推定では、「離死別」はほとんど関連しなかった。「同居人数」は親族ネットワークで正の関連を示した。

従業上の地位（就業形態）について、正規雇用と比較して、非正規雇用と無職はサポートネットワーク人数が少ない。「無職」はとくに少なく、これらの効果はおもに非親族ネットワークに関するものであり、仕事を通じた人脈の形成によると考えられる。また、正規雇用に比べ「経営」だと親族ネットワークの平均人数が多くなることが分かった。

先に見たように、収入が関連するのは非親族ネットワークであり、親族ネットワークとは強い関連がない。またネットワーク人数と明確な正の関連を持つのは「本人収入」であり、「他人収入」には明確な関連がなかった。ここでは従業上の地位（就業形態）の効果を

統制しているため、本人収入の効果は就業によるものではなく、経済的なネットワーク形成機会の増加によると考えられる。

表 11 OLS による偏回帰係数

	ネットワーク人数 (全体)			親族ネットワーク			非親族ネットワーク		
	係数	SE	標準化係数	係数	SE	標準化係数	係数	SE	標準化係数
女性 (ref. 男性)	0.409 **	0.156	0.057	0.218 **	0.07	0.068	0.19	0.126	0.033
30代 (ref. 20代)	-0.268	0.245	-0.031	-0.06	0.11	-0.016	-0.208	0.199	-0.031
40代	-0.382	0.243	-0.049	-0.337 **	0.109	-0.095	-0.045	0.197	-0.007
50代	-0.323	0.255	-0.04	-0.314 **	0.115	-0.085	-0.01	0.207	-0.001
60代	-0.074	0.297	-0.007	0.035	0.134	0.007	-0.109	0.241	-0.012
健康 (最小0, 最大4)	0.307 **	0.064	0.09	0.103 **	0.029	0.067	0.204 **	0.052	0.075
未婚 (ref. 配偶者あり)	-0.194	0.161	-0.026	-0.384 **	0.073	-0.113	0.191	0.131	0.032
離死別	0.079	0.256	0.006	-0.147	0.115	-0.024	0.226	0.207	0.021
同居人数	0.016	0.054	0.006	0.07 **	0.024	0.059	-0.054	0.044	-0.026
経営 (ref. 正規雇用)	0.895 +	0.464	0.035	0.429 *	0.208	0.038	0.467	0.375	0.023
非正規雇用	-0.375 *	0.19	-0.044	-0.111	0.086	-0.029	-0.264 +	0.154	-0.039
自営	0.066	0.234	0.006	0.101	0.105	0.019	-0.035	0.189	-0.004
無職	-0.562 **	0.207	-0.065	-0.108	0.093	-0.028	-0.455 **	0.167	-0.066
本人収入 (百万円)	0.084 **	0.025	0.081	0.012	0.011	0.025	0.073 **	0.02	0.088
他人収入 (百万円)	0.03	0.022	0.028	0.018 +	0.01	0.037	0.012	0.018	0.015
一般的信頼 (標準化)	0.345 **	0.093	0.096	0.184 **	0.042	0.114	0.161 *	0.075	0.057
特定化信頼合計 (標準化)	0.404 **	0.077	0.112	0.149 **	0.035	0.092	0.255 **	0.063	0.089
一般的信頼×特定化信頼 (交互作用項)	0.106 +	0.058	0.036	0.016	0.026	0.012	0.09 +	0.047	0.038
一般的信頼×本人収入 (交互作用項)	0.053 **	0.019	0.066	0.006	0.009	0.016	0.047 **	0.016	0.074
定数	2.129 **	0.372	.	1.102 **	0.167	.	1.027 **	0.301	.
N	2,928			2,928			2,928		
調整済みR ²	0.088			0.093			0.058		

参考: + $p < 0.1$, * $p < 0.05$, ** $p < 0.01$

本稿で注目した「信頼」は、「一般的信頼」「特定化信頼」ともに、「親族ネットワーク」とも「非親族ネットワーク」とも、正の関連をもっている。なお、一般的信頼と特定化信頼の交互作用について、4-2 節では確認されなかったが、OLS による推定ではネットワーク全体と非親族ネットワークで、正の交互作用が示唆されている。これは「一般的信頼が大きい（小さい）と、特定化信頼の関連が強い（弱い）」か「特定化信頼が大きい（小さい）と、一般的信頼の関連が強い（弱い）」ことを意味するが、強いものではない。表や詳細は省略するが、サポートネットワーク人数 10 人（142 ケース）を超えるケースを外れ値として除外すると係数が小さくなるため、極端に多くの人数を挙げたケースを考慮した場合のみの結果である可能性もある。今後の調査で確認していく必要があるだろう。

最後に、一般的信頼と本人収入には正の交互作用が見出された。これはとくに非親族ネットワークにおいて、一般的信頼（本人収入）が高いと本人収入（一般的信頼）の効果が強くなることを意味している。これは、非親族である他者との援助の交換が、高収入で高信頼のときに高まるという Ishiguro and Okamoto (2013) の結果と整合的であった。

5. まとめと展望

5-1 本稿のまとめ

本稿の作業と知見をまとめよう。本稿では、「サポートネットワークと孤立」をめぐる研究、そして「ネットワーク形成と信頼の関連」をめぐる研究を念頭に、新たな調査項目に関する基礎的分析をおこなうことを目的としている。最新のウェブ調査である SSPW2020 では、新たにサポートネットワーク人数における「親族／非親族」を区別する項目と、一般的信頼の他に特定化信頼の項目を設定した。そこで本稿では SSPW2020 をさらなるランダムサンプリング調査へ向けた予備的調査と位置づけ（歸山 2014）、第一に、サポートネットワーク人数、親族ネットワーク人数と非親族ネットワーク人数および、一般的信頼、特定化信頼 1、特定化信頼 2 の項目について、基本的な分布を確認し、既存の無作為抽出標本調査との比較をおこなった。

第二に、「孤立」の規定要因に関する先行研究で見出されてきた要因を中心に、サポートネットワーク人数を規定する社会経済的諸要因について、SSPW2020 データを用いて確認した。高年齢だと孤立リスクが高まるという結果は確認されなかったが、その他については、男性や未婚や低収入や無職でサポートネットワーク人数が少ないという先行研究と整合的な結果が見出された。またさらに、新たに可能になった「親族」と「非親族」の区別によって、性別の正の効果、未婚の負の効果、同居人数の正の効果、仕事における「経営」の正の効果が「親族」に関するものであること、本人収入の正の効果や仕事における「非正規」「無職」の負の効果が、「非親族」に対するものであることが明らかになった。

第三に、本稿では「信頼によるサポートネットワークの形成」に注目した。SSPW2020 では、「一般的信頼」のほか、特定のよく知る人に対する「特定化信頼」の項目を新たに設定した。それらを用いた分析により、一般的信頼と特定化信頼はそれぞれサポートネットワーク人数と正の関連を持つこと、また一般的信頼も特定化信頼も、親族とも非親族とも関連することが分かった。一般的信頼と特定化信頼の交互作用はみられなかったが、先行研究をもとにした分析により、非親族ネットワークとの一般的信頼と本人収入の正の関連には、さらに正の交互作用効果が見出された。

これらの結果は、先行研究の知見を 2020 年のウェブ調査で再確認するとともに、親族／非親族ネットワークの区別や、一般的信頼と異なる特定化信頼の効果といった、新たな分析視角の有効性を明らかにする成果である。今回見出された新たな知見については、今後ほかの社会調査、とくに無作為抽出標本調査を通じてさらに検討される必要がある。その際、今回の SSPW2020 を予備調査として有効に活かすことができる（歸山 2014）。

5-2 課題と展望

本稿の分析にはいくつもの課題が残っている。まず、SSPW2020 では無職（主婦・主夫）のケースの学歴が調査されなかったため、今回は教育との関連を扱わなかった。

次に、今回「信頼が行為等に与える影響」については、直接扱うことが出来なかった。「主観的自由」を扱った別稿でも述べたように、人びとが自由に選択しうる行為の機会集合は、資源の客観的な有無だけでなく主観的な認識や信念によって規定され、人びとの行為にも影響すると考えられる (Hedström 2005; Coleman 1990; Sen 1990; Sugden 1998)。これは他者に対する「信頼」についてもいいうることであり、上述した一般的信頼と本人収入の正の交互作用もそのことを示唆している。本稿の分析結果に現れた信頼とネットワーク人数の正の関連は、信頼がさまざまな他者との協力的行為の交換を可能にし、ネットワーク形成を促すことを示唆している。このメカニズムについては、さまざまな社会活動参加や消費行為などに関する変数を用いて、検証を試みる必要があるだろう。また、上述した「主観的自由」と他者への「信頼」が関連する可能性も検討課題として残されている。

なお本稿では、信頼とサポートネットワークの関連、また本人収入との交互作用効果について、「信頼が行為を促しネットワークを形成する」という想定で分析をおこなってきた。だが、サポートネットワークが信頼を高めるという効果も無理なく考えることができるから、これらの因果関係については、今回の分析から明らかとはいえない。厳密には何らかの実験やパネル調査データなどを用いて検証される必要があるだろう。本稿で新たに用いた、サポートネットワークの種類に関する項目や、一般的信頼・特定化信頼の各項目は、そうした新たな分析の枠組みにおいてさらに有効に用いることができるだろう。

最後に、本稿では人びとの「孤立」という社会的排除に関わる問題設定をうけ、サポートネットワーク人数を被説明変数とする規定要因の分析をおこなってきた。だが、その「孤立」ないし社会的排除が問題とされるのは、社会的排除が人びとを「自由で平等な市民からなる社会」という近代社会の規範的前提を覆しているからであり (Rawls 2001)、サポートネットワークを通じた人びとの援助や情報が資源となって人びとにさまざまな選択肢を与え (Lin 2001=2008)、自由な行為者となることを可能にすると考えられるからである (内藤 2017, 2018a)。それゆえ別稿で扱った「主観的自由」などを用いて、サポートネットワークや信頼のような主観的・主体的要因が、どのような条件の下で、人びとの自由を拡大する資源として有効になるのか、といった分析と接続していくことも重要になるだろう。これは、自由を規定する「資源」として何が有効かという社会階層研究の理論的基礎を解明する作業であり、自由の客観的／主観的な定義をめぐる議論にもかかわる、社会科学基礎理論における重要な課題となる。

付記

SSP2015 データの使用にあたっては SSP プロジェクトの許可を得た。本研究は JSPS 科研費特別推進研究事業 (課題番号 JP25000001) に伴う成果の一つであり、本データ (SSM2015 データ) 使用にあたっては 2015 年 SSM 調査データ 管理委員会の許可を得た。本稿は JSPS 科研費 JP20K02072, JP26780276, JP17K18587 の助成を受けた研究成果の一部

である。

注

- ¹ サポートネットワーク人数と呼ぶのは、これが「頼りにしている」相手の人数を問うものであり、そこには何らかの支援を受けられるという予期が含意されているからである。
- ² 「暮らしの安全調査」については、内藤（2014b, 2018b）を参照。
- ³ なお、2015 年と 2005 年の SSM 調査同士ではこれほど大きな分布の違いはなく、分布の形もほぼ一致していた（金 2018）。
- ⁴ ただし、高信頼者ほど他者からの協力を予期し、他人にただ乗りして裏切りやすくなるといった理論的可能性については、ここでは検討しない。
- ⁵ ただし、一般的信頼の平均ネットワーク人数が、上から二つのカテゴリーでほぼ完全に一定であるのに対し、特定化信頼については若干の違い（0.15 人程度の増加）があるようにもみえるため、いずれより詳細な検討をすべきだろう。

文献

- Coleman, J. S., 1990, *Foundations of Social Theory*, Cambridge: The Belknap Press of Harvard University Press.
- Hedström, P., 2005, *Dissecting the Social: On the Principles of Analytical Sociology*, Cambridge University Press.
- 石田光規 2011 『孤立の社会学——無縁社会の処方箋』勁草書房。
- Ishiguro, I. and Okamoto, Y., 2013, “Two ways to overcome social uncertainty in social support networks: A test of the emancipation theory of trust by comparing kin/nonkin relationships,” *Japanese Psychological Research*, 55(1):1-11.
- 歸山亜紀, 2014, 「予備調査としてのモニター型インターネット調査の可能性の検討——確率標本・個別面接法調査データとの比較分析」金沢大学博士学位論文。
- 金澤悠介, 2014, 「社会関係資本から見た社会的孤立の構造」辻竜平・佐藤嘉倫編『ソーシャルキャピタルと格差社会——幸福の計量社会学』東京大学出版会, 137-152.
- 金澤悠介, 2016, 「信頼生成メカニズムの解明」東北大学博士学位論文。
- 菅野剛, 2001, 「社会階層とソーシャル・サポートの関連についての分析——多母集団解析簡便法の適用」石原邦雄・大久保孝治編『現代家族におけるサポート関係と高齢者介護』文部科学省研究費基盤研究（A）10301010 報告書, 1-20.
- 金政芸, 2018, 「階層移動と一般的信頼」石田淳編『2015 年 SSM 調査報告書 8 意識 I』2015 年 SSM 調査研究会, 187-204.
- Lin, N., 2001, *Social Capital: A Theory of Social Structure and Action*, Cambridge University Press. (2008, 筒井淳也・石田光規・桜井政成・三輪哲・土岐智賀子訳『ソーシャル・キャピタル——社会構造と行為の理論』ミネルヴァ書房.)
- 内藤準, 2014a, 「階層アイデンティティの個人化に関する計量社会学的研究——1955 年か

- ら 2010 年の男性を対象として」『人文学報』 65(3): 390-408.
- 内藤準, 2014b, 「八王子市における暮らしの安全とサポートネットワーク——2013 年『暮らしの安全と安心に関する市民意識調査』報告」『人文学報』 482 (社会学 49) : 31-58.
- 内藤準, 2017, 「サポートネットワークの有効性に対する社会階層の効果——ネットワークと自由の分析」『理論と方法』 32(1): 64-79.
- 内藤準, 2018a, 「人びとのつながりと自由——地域に埋め込まれたサポート関係がもたらす『資源』と『しがらみ』」数土直紀編, 『格差社会のなかの自己イメージ』勁草書房, 65-89.
- 内藤準, 2018b, 「八王子市におけるサポートネットワークと暮らしの安心の基礎的分析——2017 年「第 2 回暮らしの安全と安心に関する市民意識調査」より」『アジア太平洋研究』 43: 251-270.
- 直井道子, 1990, 「階層意識——女性の地位借用モデルは有効か」岡本英雄・直井道子編『現代日本の階層構造 4 女性と社会階層』東京大学出版会, 147-64.
- Rawls, J., 2001, *Justice as Fairness: A Restatement*, Erin Kelly ed., Cambridge: The Belknap Press of Harvard University Press.
- Sen, A., 1985, *Commodities and Capabilities*, Amsterdam: Elsevier. (1988, 鈴木興太郎訳, 『福祉の経済学——財と潜在能力』岩波書店.)
- Sen, A., 1990, “Welfare, Freedom, and Social Choice: A Reply,” *Recherches Economiques de Louvain*, 54: 469-72.
- Sen, A., 1999, *Development as Freedom*, Oxford: Oxford University Press.
- Sugden, R., 1998, “The Metric of Opportunity,” *Economics and Philosophy*, 14: 307-37.
- 山岸俊男, 1998, 『信頼の構造——こころと社会の進化ゲーム』東京大学出版会.

選択の自由と資源分配・ネットワーク

—SSPW2020 データにおける主観的自由の基礎的分析—

内藤 準
(成蹊大学)

1. 本稿の課題

1-1 現代社会における自由の重要性

日本を含む現代社会において、「自由」は最も基本的な規範的価値の一つとなっている。私たちの社会は「自由で平等な人びと」からなる（べき）ものだと考えられており（Rawls 2001）、自由は「責任」と概念的に結びついて、社会を安定的に秩序づける制度としても機能している（内藤 2005）。社会学における社会階層研究では、ある社会が「機会の平等な社会」といえるか否かが問われるが、機会の平等な社会は、人びとの得る結果が彼/女らの責任であるといえる社会であることを含意する（Kymlicka 1990=2001; Swift 2006=2014; 内藤 2014）。私たちが過酷な状況に追い込まれたとき、その状況を避ける自由がまったくなかったなら、その責任を負わされるのは理不尽である。だからこそ資源分配を扱う社会科学は、人びとの選択の機会を規定し、彼/女らの自由の程度を規定する「社会的資源」の不平等とその仕組みに注意を向けてきたのである。

あるモノや地位が、人びとに機会や選択肢を与える「資源」となるか否かは、その社会の制度に依存する。例えば、さまざまなモノやサービスが市場を通じて取引される社会では、「貨幣」が非常に広範に使用可能な資源になる。他方、仮にあるモノや地位を「有する」としても、それを使う「権利」（Coleman 1990）がないならば、それが人びとの「実質的自由」を拡大することはない（Sen 1985=1988, 1999）。それではこの社会において、実際にどのようなモノや地位が、人びとに「自由」を与える資源となっているのだろうか。それを明らかにする方法の一つとして、人びとが自らの状況を「自由」だと報告しうるのは、どのようなモノをもち、どのような立場にあるときなのか調べることが考えられる。その意味で、本稿で扱う「主観的自由（perceived freedom, subjective freedom）」の規定要因や帰結は、社会階層研究の基礎的な研究対象をなすものである（内藤 2012）。

SSPW2020 調査ではこの主観的自由を調べるための調査項目が 3 つ導入されている。本稿の目的は、主観的自由の調査項目の特性について SSPW2020 データを用いて確認したうえで、分析における有用性を確かめることである。SSPW2020 はランダムサンプリングによらないウェブ調査であるため、これをランダムサンプリング調査の予備調査と位置づけ（歸山 2014）、求められる性能を有しているか予備的な検討をおこなうこと、また主観的自由に関する従来の研究で見出されてきた知見がウェブ調査データでも見出せるか確認す

ることが、本稿の課題となる。

以下、本節の残りの部分では、SSPW2020 調査に導入された主観的自由関連項目について説明する。第2節では、主観的自由の各項目の分布およびそれらを合成した尺度について検討する。第3節では、従来の研究で見出されてきた、人びとの資源（経済的資源やネットワーク）と主観的自由との関連を確認し、さらに、主観的自由が行為選択の幅を拡げるか否かについて検討する。第4節では、本稿のまとめと展望を示す。

1-2 主観的自由の項目

第1回 SSP 調査（以下、SSP2015）では「主観的自由」の項目が採用されたが（内藤 2017, 2018; 米田 2019）、もともとこの項目は、個人の自由を総合的に捉えることを企図した一連の質問項目から提案されたものでもあった。以下ではこれらの項目についてごく手短かに説明をおこなう。各項目についてのより詳しい理論的説明は Naito (2007) を、また主観的自由と「統制感 perceived control」（Rotter 1966; Skinner 1996）などとの概念的異同については Naito (2007) と内藤 (2012) を参照されたい。

個人の「自由」を捉えるとき、いくつかの側面が重要になる。ここでは「生き方の自由」について考えよう。ある人が自由に生き方を決められるというためには、第一に、(a)その人が自らの考えで生き方を選ぶことができる必要がある。そしてそのためには、(b)彼/女の決定に対して他者からの強制的介入がないことが求められる。この(a)の条件を「生き方の自己決定」ということにしよう¹。(b)の条件を「消極的自由」（Berlin [1969]2002）という。さらに第二に、ある人が生き方を選び取る自由の程度は、その人がもっている資源や情報によって左右される。もし他人からの干渉が全くなくても、自由に用いる資源や手段、機会についての情報などがなければ、その人の自由の実質的な程度は小さいといえるだろう。このように、(c)ある人の実質的自由には（Sen 1999）、消極的な自由だけでなく、選択肢を与えるそのための選択肢を与える資源、手段、選択肢に関する情報の保障が必要になるだろう。本稿ではこの(c)の条件を「自由の実質化条件」と呼ぶことにする。ある人がさまざまな事柄、ここでは自分の生き方を自由に決められる程度については、これらの側面から総合的に判断される。

SSPW2020 では、上記の(a)～(c)に対応する「主観的自由」を捉える3つの質問項目(Q31_1～Q31_3)が設定された。これは「Q31 以下の文章は、あなた自身にあてはまりますか。それとも、あてはまりませんか。それぞれあうものをお答えください（お答えはそれぞれ1つ）」というものであり、Q31_1「私の生き方は、おもに自分の考えで自由に決められる」、Q31_2「私のまわりの人たちは、私の考えを尊重してくれている」、Q31_3「私の生き方を自分で決めるための手段や情報は、十分に手に入れることができている」の各項目について「よくあてはまる、ややあてはまる、どちらともいえない、あまりあてはまらない、まったくあてはまらない」から回答する。Q31_1が(a)生き方の自己決定、Q31_2が(b)消極的

自由，Q31_3 が(c)自由の実質化条件，に対応する²。

ところで本稿では，人びとの自由に対して，その人自身のおこなう報告を通してアプローチするという意味で「主観的自由」と呼んでいる．だがこの名称をそのまま読めば，人びと自身の主観とは独立な「客観的自由」があるという考えをもたらす．そしてもしそうであるならば，曖昧な主観的認識や自己報告を扱うのではなく，より直接にその「客観的な自由」を扱う方が良いと考えられるかもしれない．この考え方は単純で分かりやすいものだが，自由というテーマを扱う際にはうまくいかない．というのも，そもそも自由という概念自体，このような単純な「主観／客観」という区別ができないものだからである（Sugden 1998）．例えば，私たちには物理的・客観的におこないえない事柄は無数にあるが，そのどれが重要な意味での「不自由」だといえるかは，私たちの選好や（Sen 1990），私たちが意味的に作り上げている制度や枠組みに依存する（盛山 1995）．すでに上述したように，あるモノや地位がある人に実際に利用可能な選択肢を与える「資源」といえるか否かも，単に客観的に付与されているだけでは分らない³．

もちろん社会階層研究では，できる限り客観的な社会的資源の指標を用いることが望ましい．だが，その前にまず，実際に何が人びとに選択肢を与える資源として作用しているかを調べる必要があるのである．本稿も含め「主観的自由の規定要因」を探る試みは，この社会において，人びとが自由に選べる選択肢を与える資源は何なのかを明らかにするという意味で，社会階層研究の基礎に位置する作業だといえる．

以上を踏まえたうえで，次の節では，SSPW2020 データにおける主観的自由の項目の基本的な分布等について，先行する調査との比較をおこないながら確認する．

2. SSPW2020 における主観的自由

2-1 主観的自由の分布

最初に，本稿で使用する主観的自由の各項目の分布を確認する．使用する質問項目は，Q31_1, Q31_2, Q31_3 の三つの項目である．ここでは比較のため SSP プロジェクトによる「SSP2015」の間 19 および，筆者が東京都八王子市でおこなった「暮らしの安全調査 2017」の間 6(b)～(d)の度数分布も示す．

表 1 および表 2 は，SSPW2020 および SSP2015，暮らしの安全調査 2017 の主観的自由関連項目の分布を示すものである．ここからは以下のことが読み取れる．①SSPW2020 調査において「生き方の自己決定」を示す Q31_1 は，最頻値が「ややあてはまる」であり，「よくあてはまる」とあわせて 58.7%が肯定的な回答をしていた．②「消極的自由」および「自由の実質化条件」を示す Q31_2 と Q31_3 は，「どちらともいえない」が最頻値で 40%以上を占める一方，「よくあてはまる」の割合が Q31_1 より小さく，肯定的な回答は約 42～45%程度であった．③SSPW2020 の Q31_1 の分布を直接比較可能な SSP2015 問 19 と比較すると，それらはよく似た形となっていた．

表 1 主観的自由の各項目の度数分布と基本統計量（SSPW2020, SSP2015）

SSPW2020 以下の文章は、あなた自身にあてはまりますか。それとも、あてはまりませんか。それぞれあうものをお答えください				SSP2015 問19 あなたにとってつぎのような気持ちや考え、生き方はどの程度あてはまりますか。
	Q31_1	Q31_2	Q31_3	
	私の生き方は、おもに自分の考えで、自由に決められる	私のまわりの人たちは、私の考えを尊重してくれている	生き方を自分で決めるための手段や情報は、十分に手に入れることができる	私の生き方は、おもに自分の考えで自由に決められる
4 よくあてはまる	0.197	0.093	0.095	0.183
3 ややあてはまる	0.390	0.347	0.315	0.423
2 どちらともいえない	0.286	0.403	0.421	0.251
1 あまりあてはまらない	0.086	0.095	0.111	0.128
0 まったくあてはまらない	0.040	0.062	0.058	0.015
N	2,998	2,998	2,998	3,568
平均（最大4, 最小0）	2.617	2.313	2.277	2.631
標準偏差	1.023	0.982	0.981	0.973

他方、「消極的自由」と「自由の実質化条件」については SSP2015 に含まれていないため、全国調査ではないが「暮らしの安全調査 2017」と比較する。全体として「暮らしの安全調査 2017」では肯定的な回答の割合がかなり高くなっているが、項目間でみると最も肯定的な回答の割合について「生き方の自己決定」項目の方が「消極的自由」と「自由の実質化条件」よりも高くなるという特徴で共通していることが分かった⁴。

表 2 主観的自由の度数分布と基本統計量（暮らしの安全調査 2017）

暮らしの安全調査2017 以下の(a)～(g)の文章について、そう思いますか、そうは思いませんか。あてはまる番号に○をつけてください。			
	(b) 私の生き方は、おもに自分の考えで自由に決められる	(c) 私の周りの人たちは、私の生き方に関して、私の考えを尊重してくれている	(d) 生き方を自分で決めるための手段や情報は、十分に手に入れることができる
4 そう思う	0.307	0.220	0.209
3 ややそう思う	0.434	0.454	0.448
2 どちらともいえない	0.167	0.260	0.241
1 あまりそう思わない	0.070	0.044	0.083
0 そう思わない	0.022	0.021	0.020
N	1,605	1,603	1,599
平均（最大4, 最小0）	2.933	2.808	2.743
標準偏差	0.975	0.901	0.946

以上、全国調査である SSP2015 および地方自治体を対象とした暮らしの安全調査 2017 との比較においても、SSPW2020 の主観的自由項目の分布は、ひとまず不自然なものではないと考えられる。

2-2 主観的自由の項目間の関連と尺度

次いで、主観的自由の各項目間の相互の相関と、尺度としての使用について検討する。表 3 には、主観的自由の各項目間の相関と信頼性係数が示されている。

表 3 主観的自由項目の相関係数と信頼性係数

SSPW2020	生き方の自己決定	消極的自由	実質的自由の条件	暮らしの安全2017	生き方の自己決定	消極的自由	実質的自由の条件
生き方の自己決定	1.000			生き方の自己決定	1.000		
消極的自由	0.577	1.000		消極的自由	0.465	1.000	
実質的自由の条件	0.605	0.643	1.000	実質的自由の条件	0.469	0.538	1.000
Cronbach's $\alpha = 0.823$				Cronbach's $\alpha = 0.741$			

SSPW2020 と暮らしの安全調査 2017 を比較すると、主観的自由の項目間には全体として強い相関関係があり、項目間の相関係数は SSPW2020 の方が若干大きいものの、重大な違いはみられなかった。クロンバックの α の値は十分に大きく、これは Naito (2007) の 2005 年のデータによる Overall Perceived Freedom Scale よりも大きな値であった。

そこで本稿の主観的自由の分析では、これらを合成した変数を用いて概括的な把握をおこない、必要に応じて各項目の違いに注目した分析結果を示すことにする。各項目について最大 4、最小 0 とコードしたうえで、単純に加算した尺度を作成し、「生き方の自由尺度」と呼ぶことにする。表 4 に基本統計量を示す。

表 4 生き方の自由尺度の基本統計量

生き方の自由尺度	N	平均	標準偏差	最小	最大
SSPW2020	2998	7.207	2.566	0	12
暮らしの安全2017	1597	8.489	2.288	0	12

3. 主観的自由と社会階層

3-1 自由を規定する諸要因

この節では、先行研究でも報告されてきた「社会的資源による自由の規定」について確認する作業をおこなう。これまでに主観的自由を用いた先行研究では、本人収入、教育、健康という個人的資源や (Naito 2007; 内藤 2012)、サポートネットワークの人数という社会関係的な資源をもつことが (内藤 2017)、被調査者が自ら「生き方を自由に選べる」といえる状況をもたらしていると報告されてきた。その他、子どもを持つことの負の効果や (内藤 2012, 2017; 米田 2019)、とくに若年女性において非正規雇用であることの負の効果が報告されている (米田 2019)。

そこで本稿では、SSPW2020 データの主観的自由項目をもちいて、これらの要因との関連がみられるかを確認する (ただし、今回家族と仕事は詳しく扱うことはできなかった)。本稿で検討している主観的自由のうち「消極的自由」や「自由の実質化条件」は、これまでの調査ではあまり用いられてこなかった。これらの主観的自由の項目も用いて分析をお

こなうことにより、「生き方の自己決定」に関するこれまでの知見を最新のウェブ調査データで確認するだけでなく、生き方の自由のより幅広い要素についての研究を次の無作為標本調査へとつなげていく意義をもつだろう。以下では、基本的に「生き方の自由尺度」の結果を示しつつ、そこに含まれる「生き方の自己決定」「消極的自由」「自由の実質化条件」の各項目については、「生き方の自由尺度」の結果と大きく異なる場合などにとくに言及することにした⁵。

3-2 健康と自由

本節では健康と主観的自由の関連を確認する。図1は健康のカテゴリーごとに「生き方の自由」の平均値を示している。全体、男性、女性、25-44歳、45-64歳のいずれにおいても、健康状態が良いと答える人ほど、平均して高い生き方の自由を報告しているという明確な関連があった。この正の関連は「生き方の自己決定」「消極的自由」「自由の実質化条件」の項目をそれぞれ個別に分析しても同様にみられた。

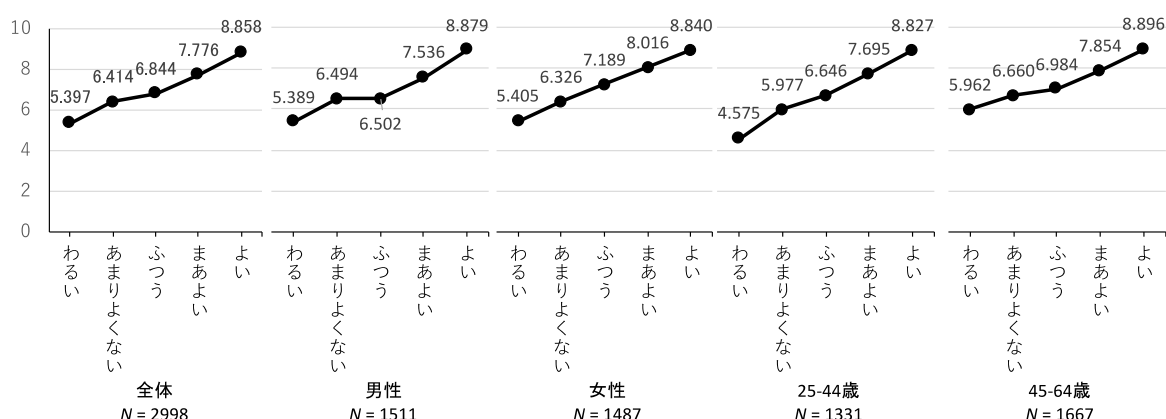


図1 健康と主観的自由の関連（生き方の自由尺度の平均値）

3-3 学歴と自由

次に、学歴と主観的自由の関連を確認する。ここでは最終学歴の変数として、中学校から専門学校まで、高校から専門学校まで、短大・高専、4年制大学以上、という4つのカテゴリーに分けた変数を用いる。ただしSSPW2020データでは、①高校に通っていないケースは55ケース（2.4%）と非常に少ない、②4年制大学以上が1167ケース（51.4%）と半数以上を占める、③調査段階で有職のケース（2269ケース）しか最終学歴が調査されなかったこと、の3点に注意しておきたい。とくに③のため、女性に多い現在無職（主婦・主夫）のケースについて、教育と主観的自由との関連は分析できないという限界がある。

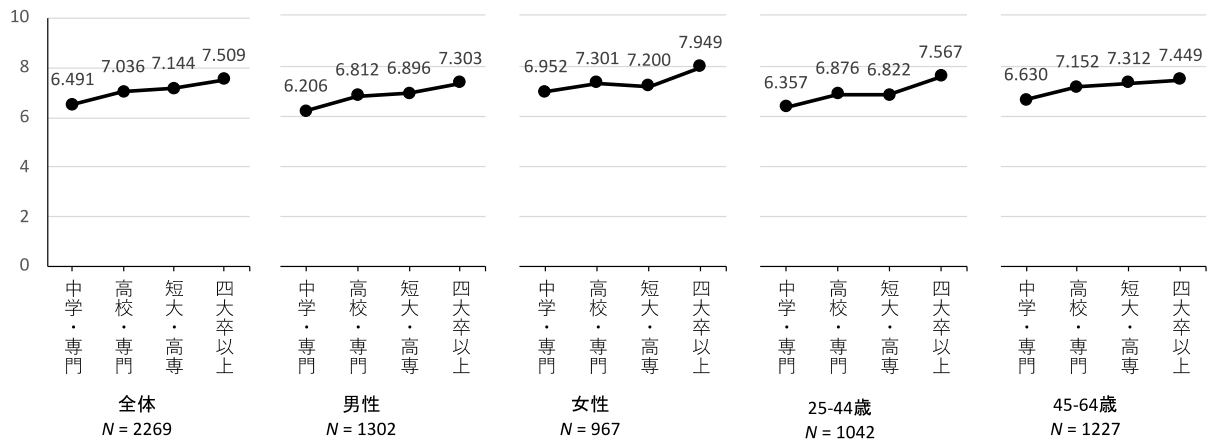


図 2 学歴と主観的自由の関連（生き方の自由尺度の平均値）

図 2 は、最終学歴のカテゴリごとに生き方の自由尺度の平均値を示したものである。緩やかではあるが「四大卒以上」が最も高くなっていることが分かる。ただし、「高校・専門」と「短大・高専」の間の上下関係はそれほど明確ではない。全体・男性サンプル・45 歳～64 歳ではほぼ差がなく、女性と 25 歳～44 歳ではむしろ「短大・高専」の方が低くなっている。詳細は割愛するが、この分布の特徴は「生き方の自己決定」や「自由の実質化条件」を個別に見ても同様だった。また全般的に関連が弱く、とくに「生き方の自己決定」についてはかなり弱い関連しか見られなかった。

以上のように、SSPW2020 における学歴と主観的自由との関連は、四大卒／非四大卒の間にある程度明確な違いが見られるが、全般的には弱いものだった。ただし、無職（主婦・主夫）のケースが含まれれば状況は異なる可能性がある。また、SSPW2020 の最終学歴の分布はかなり大きく高学歴（4 年制大学卒以上）に偏っており⁶、学歴の効果の有無についてはより別の調査でさらに確認する必要があるだろう。

3-4 収入と自由

次いで、収入と主観的自由の関連を確認する。貨幣は現代の日本社会においてもっとも重要な資源の一つであり、ゆたかな収入をもつことは、市場を通じてさまざまな生き方の選択を可能にすると考えられる。先行研究でも、収入が多いほど回答者の主観的自由が高い、すなわち自分で自分の生き方を選んでいると回答できる状況におかれやすいことが報告されてきた。また主観的自由を用いた先行研究ではさらに、個人収入と世帯収入のもつ意味の違いも明らかにされてきた。代表的な主観的福祉の一つである生活満足度などは、世帯収入を強く反映する。これは生活水準を規定するのが世帯の経済的豊かさであるためだと考えられる（直井 1990）。他方、主観的自由に関しては、同一世帯のメンバーであっても他人の収入は主観的自由を高めない（Naito 2007; 内藤 2012, 2017）。これは、たとえ同じ世帯員でも他人の収入は自由に使えない、という自由の個人主義的な特性に対応する

と考えられる．そこで本稿では，SSPW2020 でこうした関係が見出されるか確認しておく．

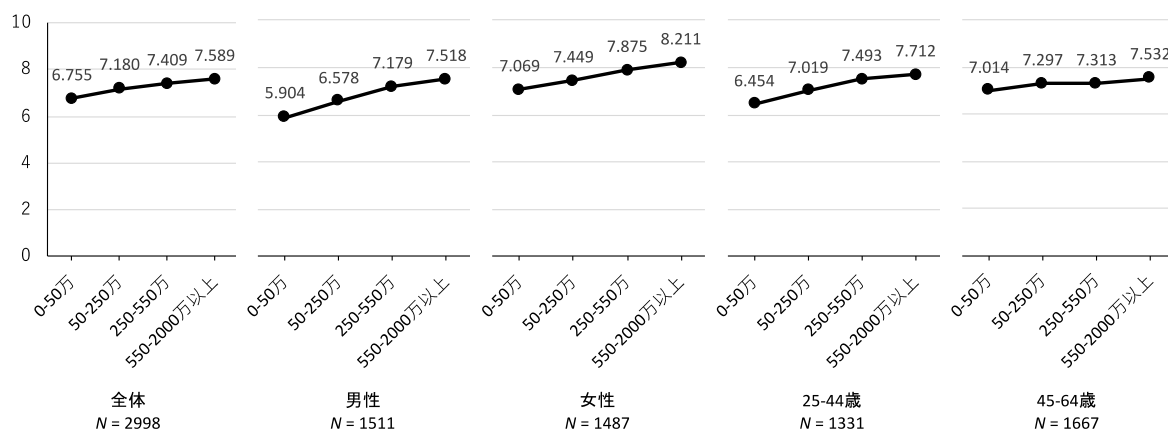


図3 本人収入と主観的自由の関連（生き方の自由尺度の平均値）

図3は，本人収入（四分位群）ごとに，生き方の自由尺度の平均値を示したものである．これによると，とくに45歳以上のサンプルでは関連が弱いものの，基本的には本人収入が高いほど，高い主観的自由を報告するという関連があることが分かる．それでは，世帯を同じくする他人の収入（他人収入）についてはどうだろうか．

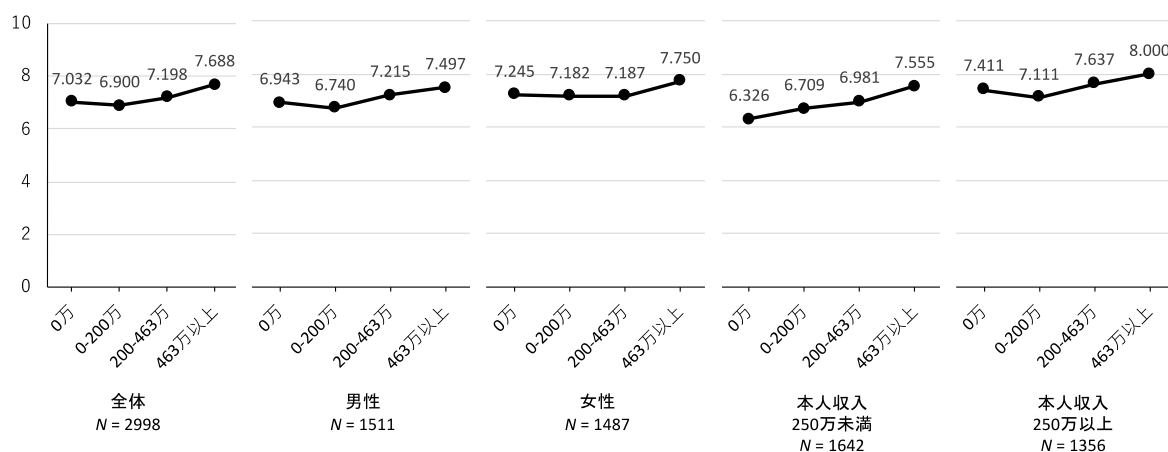


図4 他人収入と主観的自由の関連（生き方の自由尺度の平均値）

図4には，他人収入（四分位群）ごとに，生き方の自由尺度の平均値を示している⁷．他人収入でも第4四分位群が最も高い主観的自由の平均値を示しているが，本人収入250万円未満のサンプルを除いて単調な関連ではなく，本人収入ほど明確な正の関連はないことが分かる．

本人収入と他人収入との違いは，SSP2015や内藤（2012）で主観的自由として使用された「生き方の自己決定」の項目に限るとより明瞭になる．図5は，生き方の自己決定の項目の平均値を，男女別に本人収入・他人収入の四分位群で比較したものである．本人収入についてはかなり弱いが基本的には正の関連が見られる．他方，他人収入についてはそう

した関連がないことが分かる。

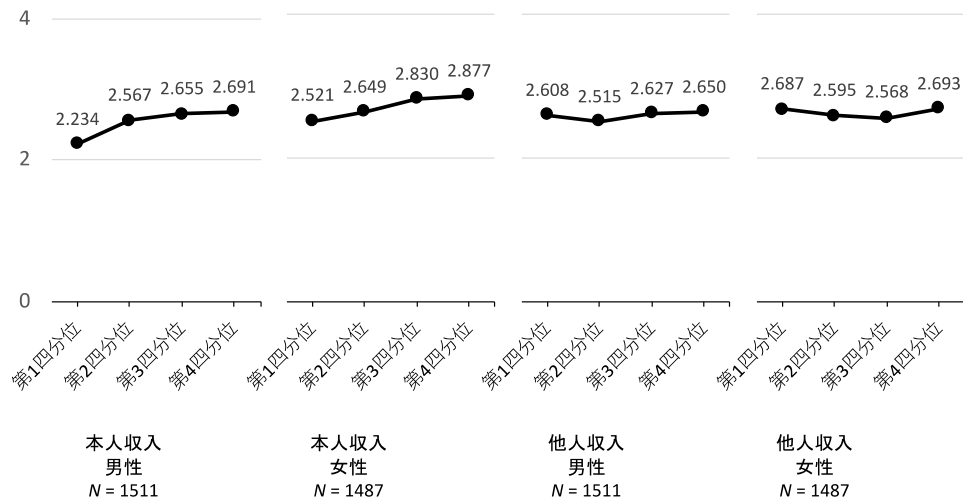


図5 本人収入・他人収入（四分位群）と「生き方の自己決定」の関連（平均値）

以上から、収入と主観的自由については、高い本人収入がある人は高い主観的自由を報告できる状況に置かれやすいが、他人収入は「生き方を自由に決められる」状況をもたらさないという先行研究の知見と整合的な結果が得られた。ただし詳細は省略するが、「消極的自由」と「自由の実質化条件」の項目については、他人収入との正の関連がみられた。この点でこの他の二つの項目は「生き方の自己決定」と異なっており、今後の調査でさらに検討する必要があると考えられる。

3-5 ネットワークと自由

人びとがもつサポートネットワークと主観的自由との関連を検討する。従来から、ネットワークは人びとに情報や選択肢を与える資源として機能すると考えられてきた（Lin 2001=2008）。そこで内藤（2017）は主観的自由を用いてその検証を試み、人びとがもつサポートネットワークが実際に、人びとが報告する主観的自由を高めていることを確認している。また内藤（2017）ではさらに、そうしたネットワークの効果が、人びとの収入と交互作用を持っており、低収入層ではネットワークと主観的自由の関連が弱まるという興味深い報告をおこなっている。これらの主観的自由とネットワークを組み合わせた分析の知見は新しいものであり、別の調査でも見出されるか確認する必要がある。そこでここではSSPW2020の「ネットワーク人数」および「親族ネットワーク人数」、「非親族ネットワーク人数」の項目を用いて、サポートネットワークの有無や大きさと、人びとの生き方の自由との関連を確認する⁸。

図6は、サポートネットワーク人数と主観的自由の関連を示している。サポートネットワーク人数は四分位群でカテゴライズしている。本人収入をコントロールするため、本人収入の四分位群ごとの平均値も示した。また図7には、親族と非親族で違いがないか検討

するため、親族ネットワーク人数および非親族ネットワーク人数と主観的自由との関連を示した。

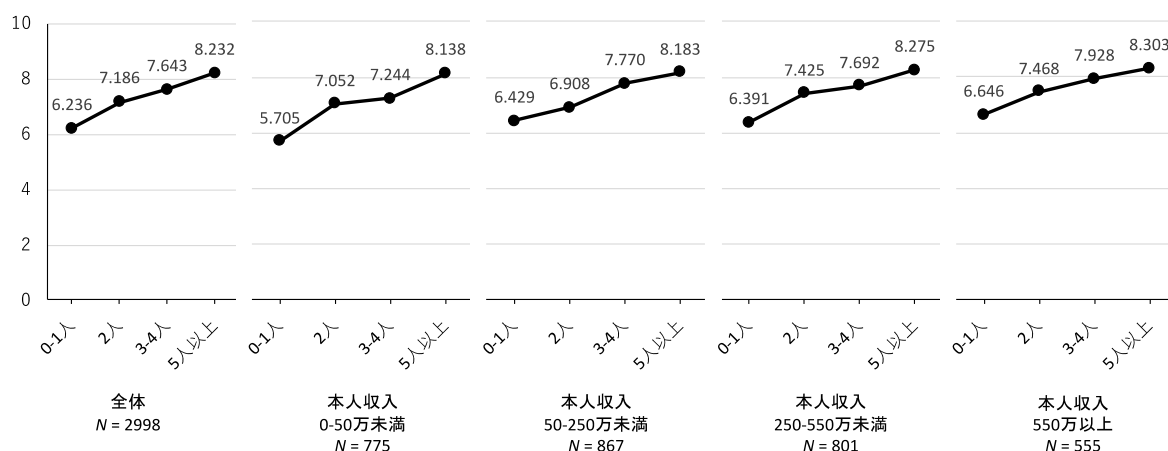


図 6 サポートネットワークと主観的自由の関連（生き方の自由尺度の平均値）

まず図 6 より、全体としてサポートネットワーク人数が多い人ほど、高い主観的自由を報告する明確な関連がみられる。このことは SSP2015 でみられたネットワークの効果が確かなものであることを示している。サポートネットワークが人びとに利用可能な選択肢を与えたり、あるいは選択のリスクを緩和するバッファとして、人びとが自由に生き方を選べると報告できるような状況をもたらすのだと理解できる。

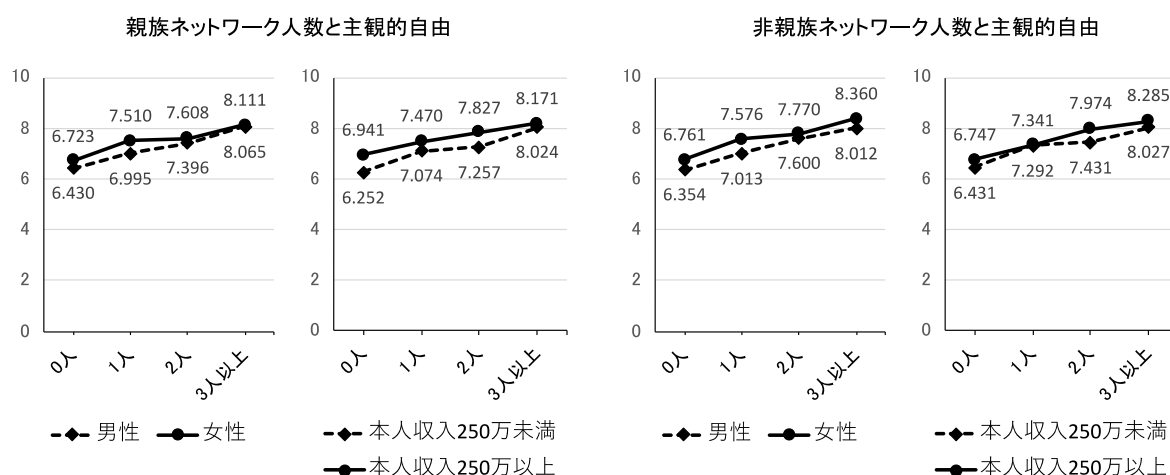


図 7 親族・非親族ネットワークと主観的自由の関連（生き方の自由尺度の平均値）

他方、内藤（2017）が報告した収入とネットワークの交互作用については、今回は確認されなかった。図 6 によれば本人収入の多寡にかかわらずネットワーク人数には主観的自由との明確な関連があり、低収入層でその関連が弱まっている様子はみられない。むしろ

若干ではあるが最低収入層で関連が強いようにもみえる。図7では親族・非親族ネットワークを分けてみることができる。低収入層の方が曲線全体が低くみえるのは収入の主効果である一方、やはり「低収入層の方がネットワーク人数と主観的自由の関連が弱い」という交互作用はみられなかった。

以上、SSP2015で報告されていたサポートネットワークと主観的自由の関連については、主効果は頑健なものとして観察されたものの、収入との交互作用については今回のデータからは確認されなかった。だがこれらは依然新たな知見であるため、今回の結果をふまえ、今後さまざまな調査で検証していく必要がある。

3-6 OLSによる関連の確認（健康、収入、ネットワーク、家族構成）

本節の最後にOLSで推定した回帰係数を示す。被説明変数には、生き方の自由尺度および3つの項目を設定した。説明変数として、ここまでに検討した変数のほか、子どもありダミー、同居人数を投入した。参考として p 値も示してある。

表5の標準化係数をみると「健康」「収入」「ネットワーク人数」の正の関連が確認できる。また内藤（2017）が指摘していたように、同居人数や子どもありダミーが主観的自由と負の関連があることも確認された。また、とくに「自己決定」の項目では、「本人収入」と比較して「他人収入」は弱い関連しかもたないこともみてとれる。他方、今回のデータでは、他の変数を統制すると「教育年数」にはかなり弱い関連しか認められなかった。

表5 OLSによる偏回帰係数

変数	生き方の自由尺度			自己決定			消極的自由			実質化条件			
	係数	SE	標準化 係数	係数	SE	標準化 係数	係数	SE	標準化 係数	係数	SE	標準化 係数	
年齢	0.011 *	0.005	0.045	0.008 **	0.002	0.081	-0.001	0.002	-0.006	0.004	+	0.002	0.040
女性ダミー	0.479 **	0.114	0.094	0.097 *	0.047	0.047	0.243 **	0.044	0.125	0.139	**	0.044	0.072
健康（最小0, 最大4）	0.723 **	0.049	0.291	0.235 **	0.020	0.236	0.242 **	0.019	0.256	0.246	**	0.019	0.262
教育年数	0.031	0.024	0.027	0.006	0.010	0.013	0.010	0.009	0.023	0.015	+	0.009	0.035
本人収入（百万円）	0.076 **	0.017	0.104	0.017 *	0.007	0.058	0.029 **	0.006	0.105	0.030	**	0.006	0.108
他人収入（百万円）	0.062 **	0.017	0.078	0.009	0.007	0.030	0.026 **	0.007	0.088	0.026	**	0.007	0.087
子どもありダミー	-0.142	0.122	-0.028	-0.107 *	0.051	-0.053	-0.002	0.047	-0.001	-0.032		0.047	-0.017
同居人数	-0.161 **	0.044	-0.087	-0.080 **	0.019	-0.107	-0.029 +	0.017	-0.041	-0.052	**	0.017	-0.074
ネットワーク人数 親族	0.168 **	0.031	0.109	0.040 **	0.013	0.065	0.073 **	0.012	0.125	0.054	**	0.012	0.093
ネットワーク人数 非親族	0.113 **	0.016	0.137	0.032 **	0.007	0.098	0.042 **	0.006	0.133	0.039	**	0.006	0.124
定数	4.080 **	0.447	.	1.681 **	0.187	.	1.268 **	0.171	.	1.132	**	0.173	.
N	2,269			2,269			2,269			2,269			
Adjusted R-squared	0.177			0.102			0.166			0.147			

参考：+ $p < 0.1$, * $p < 0.05$, ** $p < 0.01$

4. 主観的自由と行為

4-1 主観的自由は行動の幅に現れるか

ここまでの節では、人びとの健康や教育、収入、サポートネットワーク、家族構成などが、彼/女らの生き方の自由、その選択の幅を拡げる「資源」となるか否かを、生き方の選択の自由に関する人びとの自己報告である主観的自由との関連を調べることで検討してきた。この節ではさらに、主観的自由と行為者による行為選択の幅広さについて検討する。

第1節で述べたように、行為者の自由の程度を定義する際には、彼/女らがもつ主観的な選好や行為選択肢集合が重要な意味をなすと考えられている（Sen 1990; Sugden 1998）。たとえ何らかのモノや機会をもっていたとしても、それを実際に用いることが「選択肢」として現れなければ、行為者はそれを自由に選ぶことはできない。これを Coleman（1990）は行為の「権利」という概念を用いて論じていた。また合理的選択理論の拡張といえる Hedström（2005）の DBO 理論でも行為者の行為を規定する欲求や信念の重要性として論じられている。

それでは実際に、生き方に関する主観的自由は、人びとの行為やその幅に関連するだろうか。SSP2015 データを用いてその可能性を検討したものに小林・大林（2016）がある。本稿ではさらに、社会活動や公共的な行為、消費行為などに関する行為者の行為選択と主観的自由との関連を検討する。

4-2 主観的自由と行為選択の幅

ここでは、SSPW2020 の Q29_1～Q29_7 を用いる。Q29 はさまざまな活動の頻度について尋ねる項目であり、(1)国政選挙や自治体選挙の際の投票、(2)国会や地方議会の議員とのつきあい、(3)市民運動への参加、(4)ボランティア・NPO 活動、(5)募金や寄付、(6)サプリメント・健康食品の利用、(7)プレミアム（ワンランク上の）商品の購入、のそれぞれについて「いつもしている、よくしている、ときどきしている、めったにしない、したことがない」の5段階で回答を求めている。この7項目を「公共的な単独行為」（1，5）、「対人関係行為」（2，3，4）、「消費行為」（6，7）の3つのグループに分けた⁹。そのうえで、各項目について「いつもしている～ときどきしている」を1、「めったにしない～したことがない」を0とコードしたダミー変数を作成し、グループごとに合計した変数を作成した。これらの変数は「公共的な単独行為」「対人関係行為」「消費行為」について「している」個数を表す。

表6 生き方の自由尺度（3 カテゴリー）と行為の幅のクロス表（相対度数）

公共的な単独行為					対人関係行為					消費行為					
	0個	1個	2個	<i>N</i>		0個	1個	2個	3個	<i>N</i>		0個	1個	2個	<i>N</i>
0～6	0.396	0.389	0.215	1200	0～6	0.873	0.054	0.028	0.046	1200	0～6	0.631	0.255	0.114	1200
7～8	0.255	0.454	0.291	780	7～8	0.845	0.096	0.024	0.035	780	7～8	0.526	0.324	0.150	780
9～12	0.217	0.430	0.353	1018	9～12	0.800	0.115	0.037	0.048	1018	9～12	0.413	0.344	0.244	1018
Total	0.299	0.420	0.282	2998	Total	0.841	0.086	0.030	0.044	2998	Total	0.529	0.303	0.167	2998
gamma = 0.245					gamma = 0.170					gamma = 0.281					

表6は、生き方の自由尺度（3 カテゴリー）と、それぞれの行為変数のクロス表である。ここからは、主観的自由の値の高い人びとほど、おこなっている行為の幅が広い（個数が多い）傾向があることが分かる。だがすでにみたように、主観的自由には「収入」などの社会経済的資源との正の関連がある。それゆえ、例えば主観的自由と消費行為との関連は、

収入を共通の原因とする擬似的関連だと考えられるかもしれない。

そこで収入変数をコントロールして分析したのが、表 7 である。これをみると、上段の低収入層でも下段の高収入層でも、主観的自由が高いと行為の幅が広くなるという関連が消えることなく確認することができる¹⁰。なお、これらの関連は収入層を 4 分位値で分けるなどしても同様に確認された。

表 7 本人収入別、生き方の自由尺度（3 カテゴリー）と行為の幅のクロス表（相対度数）

低収入層（本人収入250万未満）

公共的な単独行為					対人関係行為					消費行為					
	0個	1個	2個	N		0個	1個	2個	3個	N		0個	1個	2個	N
0～6	0.430	0.375	0.195	718	0～6	0.903	0.047	0.024	0.026	718	0～6	0.618	0.294	0.088	718
7～8	0.264	0.436	0.300	397	7～8	0.872	0.073	0.020	0.035	397	7～8	0.519	0.355	0.126	397
9～12	0.258	0.419	0.323	527	9～12	0.829	0.110	0.027	0.034	527	9～12	0.408	0.389	0.203	527
Total	0.335	0.404	0.261	1,642	Total	0.871	0.074	0.024	0.031	1642	Total	0.527	0.339	0.134	1642
gamma = 0.241					gamma = 0.211					gamma = 0.281					

高収入層（本人収入250万以上）

公共的な単独行為					対人関係行為					消費行為					
	0個	1個	2個	N		0個	1個	2個	3個	N		0個	1個	2個	N
0～6	0.344	0.411	0.245	482	0～6	0.828	0.064	0.033	0.075	482	0～6	0.649	0.197	0.154	482
7～8	0.245	0.473	0.282	383	7～8	0.817	0.120	0.029	0.034	383	7～8	0.533	0.292	0.175	383
9～12	0.173	0.442	0.385	491	9～12	0.768	0.120	0.049	0.063	491	9～12	0.418	0.295	0.287	491
Total	0.254	0.440	0.306	1356	Total	0.803	0.100	0.038	0.059	1356	Total	0.532	0.260	0.208	1356
gamma = 0.239					gamma = 0.111					gamma = 0.281					

以上の結果からは、高い主観的自由を報告する人びとは、実際にさまざまな行為を幅広くおこなっている傾向があることが分かる。さらに、この傾向が収入変数をコントロールしても現れたことは、人びとの主観的な報告に現れる自由が、彼/女らのもつ客観的な資源の量には還元できないことを示唆する。これは、人びとの行為選択の自由の程度を捉えるためには、客観的・物理的な指標のみでなく、主観的な枠組みや選好が重要であるという立場に親和的であり（Sen 1999; Sugden 1998）、主観的自由の項目を用いて自由と機会、そして資源を分析する研究枠組みの重要性を裏付ける結果となっている。

5. まとめと展望

5-1 本稿のまとめ

本稿の作業と知見をまとめよう。本稿ではまず、SSPW2020 で設定した主観的自由の変数および総合的尺度について検討した。自由に関する概念的な整理をおこなった上で、それらを「主観的自由」として調べる意義を述べた。そして、(a)生き方の自己決定、(b)消極的自由、(c)自由の実質化条件に対応する各質問項目の分布や、それらを用いた合成変数の作成について検討した。

第二に、SSPW2020 をさらなるランダムサンプリング調査へ向けた予備的調査と位置づけ、主観的自由の分析上の有用性について概観してきた。第一に、先行研究が明らかにし

てきた主観的自由を規定する社会経済的要因について、2020 年のウェブ調査データでも関連が現れるか確認した。その結果、健康、教育、収入について今回も正の関連が見出された。教育については弱い関連しか見られなかったが、これについては SSPW2020 が高学歴に偏ったサンプルであることなどに留意する必要があるだろう。また先行研究で見出されてきた自由の個人主義的な特性、すなわち、本人収入は主観的自由を高めるが、同世帯の他人収入では主観的自由を高める資源にならない、という興味深い特性は、とくに「生き方の自己決定」の項目に関して今回のデータでも確認された。

第二に、SSP2015 において見出された主観的自由と社会的ネットワークとの正の関連は、今回のデータでも確認された。人びとが周囲の人との間にとりもつ支援的な結びつきのネットワークは、それを用いて何かをおこなうという選択肢を与えたり、あるいは失敗の痛手を緩和するバッファーとなってリスクある選択肢も選びやすくするといった仕方で、人びとの「自由」の幅を拡げるのだと考えることができるだろう。

最後に、主観的自由が、人びとがおこなう行為の幅と明確に結びついていることを明らかにした。消費行為や対人関係の形成、寄付といった公共的行為のしやすさが、収入などの資源によって左右されるのは容易に理解できる。だが今回の結果は、収入をコントロールした上でも主観的自由と行為の幅が関連していることを示している。これは、行為選択肢集合に関する人びとの信念や欲求が、収入などの資源の客観的な量に還元されない仕方で、人びとの行為の幅を拡げていることを示唆するものである。この新たな知見は、「人びとの選択の自由にとっては客観的な資源のみならず、選択肢や状況に関する主観的な信念や選好が重要である」という立場と適合的であり、さらに今後分析を工夫していくことが求められる重要なものである。

5-2 残る課題と展望

今回の分析では、複雑な多変量解析の結果を示すことは避け、よりシンプルかつ明確に変数間の関連を捉えることができる分析手法を用いてきた。今後可能であれば、大規模な無作為抽出標本調査データを用いた多変量解析などにより、日本における主観的自由の分布や規定要因、さらに主観的自由の効果に関する推定をおこなうことが課題となる。

またこれに付随して、本稿に残された課題としていくつか挙げるができる。第一に、ジェンダー間の不平等について。内藤（2012）は、2005 年の全国無作為調査データを用いて、男性の方が女性より「生き方の自己決定」の値が高く、それは本人収入などの個人的資源の不平等によるものだというところを見出した。詳細は省略するが、この男女間の不平等は SSPW2020 データで「生き方の自己決定」の項目には見出されず、また「生き方の自由尺度」の平均値に関しては、むしろ女性の方が男性よりも高い結果となっている。今回のデータは全国が無作為抽出調査ではないため、これがウェブ調査の特性によるのか、時代の変化によるものか、即断することはできない。主観的自由の継続的な調査によって、

ジェンダーをはじめ変化の可能性を追うことが必要である。

第二に、SSPW2020 データでは現職無職のケースで最終学歴が調査されなかったこともあり、米田（2019）が報告した非正規雇用の負の効果などの確認をおこなうことができなかった。職業と生き方の自由との関連については、今後さらに明らかにする必要がある。

最後に、主観的自由を用いた新たな探究課題として、サポートネットワークのような社会関係が資源となるのはどのような条件の下であるか、そして主観的信念や選好と人びとの行為選択の自由との関わりの探究を挙げることができる。前者は、資源の格差を「自由」の格差として捉えなおし、自由を規定する「資源」の探究という社会階層研究の理論的基礎に立ち返る作業でもある。後者は、自由の客観的／主観的な定義をめぐる議論にもかかわる社会科学の基礎理論に関わる重要な課題となる。

その他にも、主観的自由は、今回扱われなかったさまざまな変数、集団参加や、意識・主観的福祉などとの広範な関連をもっていることが分かっている。それらを一つ一つ明らかにしていくことは、本稿に残された課題である。

付記

SSP2015 データの使用にあたっては SSP プロジェクトの許可を得た。本稿は JSPS 科研費 JP20K02072, JP26780276, JP17K18587 の助成を受けた研究成果の一部である。

注

¹ Naito（2007）では、その人自身の考えで決めるという意味で *autonomy* という言葉を用いていたが、「自律性」の概念は、Berlin による積極的自由への批判など多様な捉えられ方をするため、ここでは自己決定という言葉を用いた。

² Naito（2007）では、さらに(d)「広義の政治的自由」に対応する項目も加えた Overall Perceived Freedom Scale が用いられた。

³ 主観的価値と自由の測定との理論的關係については内藤（2017: 67）も参照されたい。

⁴ 暮らしの安全調査 2017 で全体として肯定的回答が多くなっている理由としては、調査地である自治体の特性、選択肢や質問のワーディングの違い、調査表全体の中での位置の違いなどが考えられるだろう。

⁵ SSPW2020 は母集団からの無作為抽出標本調査ではないため、変数間の関連についての分析では統計的検定の結果は示していないが、正の関連がみられたと報告したものについては少なくとも 5%水準で有意になる検定統計量が得られた。

⁶ SSP2015 では短大・高専以下が 70. 6%を占めたが、SSPW2020 では 48.4%であった。

⁷ 他人収入は、世帯収入から本人収入を引いて作成した変数である。

⁸ サポートネットワーク人数の調査項目については、本報告書に掲載の別稿でより詳しく検討しているので参照されたい。ここで「(サポート) ネットワーク人数」と呼ぶのは、調査項目 Q26「あなたが日頃から何かと頼りにし、親しくしている方は何人くらいでしょうか」への回答人数である。SSPW2020 ではさらに Q27「先程あげていただいた人のうち、家族や親族にあたる方は何人くらいでしょうか」という質問項目が利用可能であり、これを「親族ネットワーク人数」と呼ぶ。「非親族ネットワーク人数」は Q26 の回答から Q27 の回答を引いた人数である。

⁹ 7項目を用いた因子分析の結果、3つの因子が抽出された。それぞれの因子への負荷量

が多い項目をグループ化した。

¹⁰ ただし「対人関係行為」はもともと「0 個」の割合がかなり高く、とくに高収入層で主観的自由と行為の個数との関連がかなり弱くなっている。

文献

Berlin, I., [1969] 2002. “Four Essays on Liberty.” pp. 3–279. In: *Liberty*, edited by Henry Hardy. Oxford: Oxford University Press.

Coleman, J. S., 1990, *Foundations of Social Theory*, Cambridge: The Belknap Press of Harvard University Press.

Hedström, P., 2005, *Dissecting the Social: On the Principles of Analytical Sociology*, Cambridge University Press.

歸山亜紀, 2014, 「予備調査としてのモニター型インターネット調査の可能性の検討——確率標本・個別面接法調査データとの比較分析」金沢大学博士学位論文。

小林盾・大林真也, 2016, 「分析社会学の応用：文化活動はオムニボア（雑食）かユニボア（偏食）か」『理論と方法』31(2):304-17.

Kymlicka, W., 1990, *Contemporary Political Philosophy: An Introduction*, Oxford: Clarendon Press. (2002, 岡崎晴輝他訳『現代政治理論』日本経済評論社.)

Lin, N., 2001, *Social Capital: A Theory of Social Structure and Action*, Cambridge University Press. (2008, 筒井淳也・石田光規・桜井政成・三輪哲・土岐智賀子訳『ソーシャル・キャピタル——社会構造と行為の理論』ミネルヴァ書房.)

Naito, J., 2007, “Perceived Freedom and Its Sociological Effects: An Inquiry into the Relationship between Liberalism and Inequality,” *International Journal of Japanese Sociology*, 16: 80-99.

内藤準, 2005, 「自由と責任の制度——パレート派リベラルの不可能性と契約自由解の可能性」『理論と方法』20(2): 211-26.

内藤準, 2012, 「自由の規定要因とジェンダー不平等——階層測定単位に関する論争から」武川正吾・白波瀬佐和子編『格差社会の福祉と意識』東京大学出版会, 143-68.

内藤準, 2014, 「社会階層研究における機会の平等と完全移動——概念の分析に基づく方法的検討」『社会学評論』65(3): 390-408.

内藤準, 2017, 「サポートネットワークの有効性に対する社会階層の効果——ネットワークと自由の分析」『理論と方法』32(1): 64-79.

内藤準, 2018, 「人びとのつながりと自由——地域に埋め込まれたサポート関係がもたらす『資源』と『しがらみ』」数土直紀編, 『格差社会のなかの自己イメージ』勁草書房, 65-89.

直井道子, 1990, 「階層意識——女性の地位借用モデルは有効か」岡本英雄・直井道子編『現代日本の階層構造 4 女性と社会階層』東京大学出版会, 147-64.

- Rawls, J., 2001, *Justice as Fairness: A Restatement*, Erin Kelly ed., Cambridge: The Belknap Press of Harvard University Press.
- Rotter, J. B., 1966, “Generalized Expectancies for Internal Versus External Control of Reinforcement,” *Psychological Monographs: General and Applied*, 80(1): 1-28.
- 盛山和夫, 1995, 『制度論の構図』 創文社.
- Sen, A., 1985, *Commodities and Capabilities*, Amsterdam: Elsevier. (1988, 鈴木興太郎訳, 『福祉の経済学——財と潜在能力』 岩波書店.)
- Sen, A., 1990, “Welfare, Freedom, and Social Choice: A Reply,” *Recherches Economiques de Louvain*, 54: 469-72.
- Sen, A., 1999, *Development as Freedom*, Oxford: Oxford University Press.
- Skinner, E. A. 1996, “A Guide to Constructs of Control,” *Journal of Personality and Social Psychology*, 71(3): 549-70.
- Sugden, R., 1998, “The Metric of Opportunity,” *Economics and Philosophy*, 14: 307-37.
- Swift, A., 2006, *Political Philosophy: A Beginners’ Guide for Students and Politicians*, Cambridge: Polity. (2011, 有賀誠・武藤功訳『政治哲学への招待——自由や平等のいったい何が問題なのか?』 風行社.)
- 米田幸弘, 2019, 「若者にとって自由な働き方とは何か——非正規雇用, ワーク・ライフ・バランス, 仕事の自己決定性」 吉川徹・狭間諒多朗編『分断社会と若者の今』 大阪大学出版会, 199-235.

3. 基礎集計表

SSPW2020 1st 基礎集計表

[N%001]

F1	あなたの性別をお答えください。(お答えは1つ)	N	%
1	男性	1511	50.4
2	女性	1487	49.6
	全体	2998	100.0

[N%002]

F2	あなたの年齢をお答えください。(お答えは半角数字で)	全体	統計量母数	合計	平均	標準偏差	最小値	最大値	中央値
		2998	2998	136564	45.55	10.819	25	64	46

[N%003]

年代カテ	年代別	N	%
1	20代	290	9.7
2	30代	683	22.8
3	40代	887	29.6
4	50代	778	26.0
5	60代	360	12.0
	全体	2998	100.0

[N%004]

性年代カテ	性年代別	N	%
1	男性:20代	146	4.9
2	男性:30代	349	11.6
3	男性:40代	448	14.9
4	男性:50代	391	13.0
5	男性:60代	177	5.9
6	女性:20代	144	4.8
7	女性:30代	334	11.1
8	女性:40代	439	14.6
9	女性:50代	387	12.9
10	女性:60代	183	6.1
	全体	2998	100.0

[N%005]

F3	あなたのお住まいの地域をお答えください。(お答えは1つ)	N	%
1	北海道	122	4.1
2	青森県	28	0.9
3	岩手県	28	0.9
4	宮城県	56	1.9
5	秋田県	22	0.7
6	山形県	24	0.8
7	福島県	42	1.4
8	茨城県	66	2.2
9	栃木県	47	1.6
10	群馬県	46	1.5
11	埼玉県	177	5.9
12	千葉県	149	5.0
13	東京都	363	12.1
14	神奈川県	230	7.7
15	新潟県	51	1.7
16	富山県	24	0.8
17	石川県	26	0.9
18	福井県	17	0.6
19	山梨県	20	0.7
20	長野県	46	1.5
21	岐阜県	46	1.5
22	静岡県	84	2.8
23	愛知県	185	6.2
24	三重県	42	1.4
25	滋賀県	34	1.1
26	京都府	61	2.0
27	大阪府	212	7.1
28	兵庫県	129	4.3
29	奈良県	29	1.0
30	和歌山県	21	0.7
31	鳥取県	14	0.5
32	島根県	16	0.5
33	岡山県	42	1.4
34	広島県	65	2.2
35	山口県	28	0.9
36	徳島県	16	0.5
37	香川県	21	0.7
38	愛媛県	28	0.9
39	高知県	16	0.5
40	福岡県	120	4.0
41	佐賀県	17	0.6
42	長崎県	28	0.9
43	熊本県	39	1.3
44	大分県	26	0.9
45	宮崎県	24	0.8
46	鹿児島県	37	1.2
47	沖縄県	34	1.1
48	海外	0	—
	全体	2998	100.0

[N%006]

地域カテ	地域別	N	%
	1 北海道	122	4.1
	2 青森県	28	0.9
	3 岩手県	28	0.9
	4 宮城県	56	1.9
	5 秋田県	22	0.7
	6 山形県	24	0.8
	7 福島県	42	1.4
	8 茨城県	66	2.2
	9 栃木県	47	1.6
	10 群馬県	46	1.5
	11 埼玉県	177	5.9
	12 千葉県	149	5.0
	13 東京都	363	12.1
	14 神奈川県	230	7.7
	15 新潟県	51	1.7
	16 富山県	24	0.8
	17 石川県	26	0.9
	18 福井県	17	0.6
	19 山梨県	20	0.7
	20 長野県	46	1.5
	21 岐阜県	46	1.5
	22 静岡県	84	2.8
	23 愛知県	185	6.2
	24 三重県	42	1.4
	25 滋賀県	34	1.1
	26 京都府	61	2.0
	27 大阪府	212	7.1
	28 兵庫県	129	4.3
	29 奈良県	29	1.0
	30 和歌山県	21	0.7
	31 鳥取県	14	0.5
	32 島根県	16	0.5
	33 岡山県	42	1.4
	34 広島県	65	2.2
	35 山口県	28	0.9
	36 徳島県	16	0.5
	37 香川県	21	0.7
	38 愛媛県	28	0.9
	39 高知県	16	0.5
	40 福岡県	120	4.0
	41 佐賀県	17	0.6
	42 長崎県	28	0.9
	43 熊本県	39	1.3
	44 大分県	26	0.9
	45 宮崎県	24	0.8
	46 鹿児島県	37	1.2
	47 沖縄県	34	1.1
	全体	2998	100.0

[N%007]

S1	本アンケートは最大で37問のボリュームの多いアンケートになります。ご了承の上ご協力頂けますか。(お答えは1つ)	N	%
	1 協力できる	2998	100.0
	2 協力できない	0	-
	全体	2998	100.0

※F4(現在お住まいの市区町村名をお答え下さい)の集計結果は省略

F5t1	あなたの生年月日をお答えください。(お答えは半角数字で。)例)2020年3月	N	%
	1 1956	86	2.9
	2 1957	73	2.4
	3 1958	85	2.8
	4 1959	92	3.1
	5 1960	75	2.5
	6 1961	72	2.4
	7 1962	99	3.3
	8 1963	71	2.4
	9 1964	91	3.0
	10 1965	94	3.1
	11 1966	72	2.4
	12 1967	69	2.3
	13 1968	68	2.3
	14 1969	72	2.4
	15 1970	112	3.7
	16 1971	118	3.9
	17 1972	109	3.6
	18 1973	91	3.0
	19 1974	93	3.1
	20 1975	101	3.4
	21 1976	82	2.7
	22 1977	68	2.3
	23 1978	63	2.1
	24 1979	52	1.7
	25 1980	102	3.4
	26 1981	69	2.3
	27 1982	72	2.4
	28 1983	79	2.6
	29 1984	64	2.1
	30 1985	62	2.1
	31 1986	64	2.1
	32 1987	54	1.8
	33 1988	61	2.0
	34 1989	58	1.9
	35 1990	72	2.4
	36 1991	74	2.5
	37 1992	63	2.1
	38 1993	39	1.3
	39 1994	51	1.7
	40 1995	6	0.2
	全体	2998	100.0

F5t2	あなたの生年月日をお答えください。(お答えは半角数字で。)例)2020年3月	N	%
1	1	271	9.0
2	2	211	7.0
3	3	236	7.9
4	4	215	7.2
5	5	264	8.8
6	6	245	8.2
7	7	259	8.6
8	8	284	9.5
9	9	269	9.0
10	10	242	8.1
11	11	238	7.9
12	12	264	8.8
	全体	2998	100.0

[N%008]

Q1	あなたの現在のお仕事について伺います。 あなたがなさっているお仕事は、大きく分けてこの中のどれにあたりますか。(お答えは1つ)※複数のお仕事をお持ちの場合には、主なお仕事ひとつについてお答えください。	N	%
1	経営者、役員	60	2.0
2	常時雇用されている一般従業者	1251	41.7
3	臨時雇用・パート・アルバイト	434	14.5
4	派遣社員	88	2.9
5	契約社員、嘱託	120	4.0
6	自営業主、自由業者	231	7.7
7	家族従業者	64	2.1
8	内職	30	1.0
9	無職、仕事を探している	140	4.7
10	無職、仕事を探していない	495	16.5
11	学生	15	0.5
12	その他	70	2.3
	全体	2998	100.0

※Q2(あなたの勤め先は、どのような事業を営んでいますか。派遣社員の方は、派遣先企業についてお答えください)の集計結果は省略

[N%009]

Q3	あなたの勤め先の事業内容は、次の分類のうち、どれにあたりますか。(お答えは1つ)※派遣社員の方は、派遣先企業についてお答えください。	N	%
1	情報通信業	122	5.4
2	運輸業、郵便業(郵便局以外)	98	4.4
3	郵便局	16	0.7
4	卸売業、小売業	267	11.9
5	金融業、保険業	93	4.1
6	不動産業、物品賃貸業	64	2.8
7	学術研究、専門・技術サービス業	65	2.9
8	教育、学習支援業	130	5.8
9	医療、福祉	92	4.1
10	宿泊業、飲食サービス業	92	4.1
11	生活関連サービス業、娯楽業	69	3.1
12	その他のサービス業	255	11.3
13	製造業	385	17.1
14	電気・ガス・熱供給・水道業	27	1.2
15	建設業	112	5.0
16	農業、林業、漁業	24	1.1
17	鉱業、採石業、砂利採取業	2	0.1
18	公務	125	5.6
19	その他	111	4.9
	全体	2248	100.0

Q4t1	あなたは、いつからそのお勤め先で働いておられますか。(お答えは半角数字で)※派遣社員の方は、派遣先企業についてお答えください。	N	%
1	1970	1	0.0
2	1972	1	0.0
3	1974	1	0.0
4	1975	2	0.1
5	1976	1	0.0
6	1978	6	0.3
7	1979	3	0.1
8	1980	11	0.5
9	1981	11	0.5
10	1982	10	0.4
11	1983	15	0.7
12	1984	17	0.8
13	1985	18	0.8
14	1986	15	0.7
15	1987	15	0.7
16	1988	18	0.8
17	1989	31	1.4
18	1990	41	1.8
19	1991	20	0.9
20	1992	17	0.8
21	1993	24	1.1
22	1994	23	1.0
23	1995	41	1.8
24	1996	36	1.6
25	1997	30	1.3
26	1998	37	1.6
27	1999	26	1.2
28	2000	69	3.1
29	2001	30	1.3
30	2002	30	1.3
31	2003	39	1.7
32	2004	39	1.7
33	2005	64	2.8
34	2006	51	2.3
35	2007	51	2.3
36	2008	61	2.7
37	2009	71	3.2
38	2010	105	4.7
39	2011	71	3.2
40	2012	79	3.5
41	2013	79	3.5
42	2014	97	4.3
43	2015	125	5.6
44	2016	98	4.4
45	2017	158	7.0
46	2018	176	7.8
47	2019	225	10.0
48	2020	59	2.6
	全体	2248	100.0

Q4t2	あなたは、いつからそのお勤め先で働いておられますか。(お答えは半角数字で)※派遣社員の方は、派遣先企業についてお答えください。	N	%
1	1	126	5.6
2	2	107	4.8
3	3	166	7.4
4	4	904	40.2
5	5	148	6.6
6	6	128	5.7
7	7	126	5.6
8	8	100	4.4
9	9	99	4.4
10	10	131	5.8
11	11	104	4.6
12	12	109	4.8
	全体	2248	100.0

[N%010]

Q5	現在の従業員(働いている人)は、会社全体で何人ぐらいですか。(お答えは1つ)※派遣社員の方は、派遣先企業についてお答えください。※家族従業員、パート・アルバイトなども含みます。	N	%
1	1人	167	7.4
2	2～4人	176	7.8
3	5～9人	119	5.3
4	10～29人	262	11.7
5	30～99人	344	15.3
6	100～299人	310	13.8
7	300～499人	141	6.3
8	500～999人	159	7.1
9	1,000人以上	483	21.5
10	官公庁である	87	3.9
	全体	2248	100.0

※Q6(あなたは職場でどのような仕事をしていますか。具体的な仕事の内容を教えてください)の集計結果は省略

[N%011]

Q7	そのお仕事は次の分類のうち、どれにあたりますか。(お答えは1つ)	N	%
1	管理職 (企業・官公庁における課長職以上、会社役員、議員、経営者など)	261	11.5
2	専門職・技術職 (医師、看護師、弁護士、教師、技術者、デザイナーなど専門的知識・技術を要するもの)	428	18.8
3	事務職 (企業・官公庁における一般事務、経理、内勤の営業など)	531	23.3
4	販売職 (小売・卸売店主、店員、不動産売買、保険外交、外勤のセールスなど)	216	9.5
5	サービス職 (理・美容師、料理人、ウエイレス・ウエーター、ホームヘルパーなど)	238	10.4
6	生産現場職・技能職 (製品製造・組立、自動車整備、建設作業員、大工、電気工事、農水産物加工など)	220	9.7
7	運輸・保安職 (トラック・タクシー運転手、船員、郵便配達、通信士、警察官、消防官、自衛官、警備員など)	82	3.6
8	その他	302	13.3
	全体	2278	100.0

[N%012]

Q8	そのお仕事では、自分でモノを作ったり扱ったりすることが多いですか、それとも人と接したりコミュニケーションをとることが多いですか。(お答えは1つ)	N	%
1	おもに自分でモノを作ったり扱ったりしている	511	22.4
2	モノを扱うことと、人とのコミュニケーションが半々ぐらい	474	20.8
3	どちらかといえば、人と接したりコミュニケーションをとることが多い	575	25.2
4	おもに人と接したりコミュニケーションをとっている	718	31.5
	全体	2278	100.0

[N%013]

Q9	あなたは、何かの役職についていますか。(お答えは1つ)	N	%
1	役職なし	1603	71.3
2	監督、職長、班長、組長	75	3.3
3	係長、係長相当職	168	7.5
4	課長、課長相当職	167	7.4
5	部長、部長相当職	78	3.5
6	社長、重役、役員、理事	98	4.4
7	その他	59	2.6
	全体	2248	100.0

Q10t1	そのお仕事をふだん1日何時間、週何日していますか。または月何日していますか。	全体	統計量母数	合計	平均値	標準偏差	最小値	最大値	中央値
		2278	2278	17593	7.72	2.40	1	24	8

Q10t2	そのお仕事をふだん1日何時間、週何日していますか。または月何日していますか。	全体	統計量母数	合計	平均値	標準偏差	最小値	最大値	中央値
		2208	2208	10853	4.92	0.95	1	7	5

Q10t3	そのお仕事をふだん1日何時間、週何日していますか。または月何日していますか。	全体	統計量母数	合計	平均値	標準偏差	最小値	最大値	中央値
		1149	1149	23201	20.19	4.84	1	31	20

※Q11(隔週勤務など特殊なケースは具体的に記入してください)の集計結果は省略

[N%014]

Q12	あなたが最後に行かれた(または現在行か れている)学校は以下のどれにあたりま すか。中退も卒業と同じ扱いでお答えくだ さい。(お答えは1つ)	N	%
1	中学校	36	1.6
2	中学校卒業後、専門学校(専修学校)	19	0.8
3	高等学校	551	24.2
4	高等学校卒業後、専門学校	232	10.2
5	短期大学・高等専門学校	263	11.5
6	大学	1051	46.1
7	大学院修士課程	97	4.3
8	大学院博士課程	17	0.7
9	その他	6	0.3
10	どれにあたるか判断できない	6	0.3
	全体	2278	100.0

※Q13.1(差し支えなければ、具体的な学校名を教えてください)の集計結果は省略

[N%015]

Q13.2	小学校からの通算通学年数をお答えくだ さい。(お答えは1つ)	N	%
1	9年	93	4.1
2	10年	21	0.9
3	11年	28	1.2
4	12年	482	21.2
5	13年	75	3.3
6	14年	323	14.2
7	15年	110	4.8
8	16年	821	36.0
9	17年	76	3.3
10	18年	116	5.1
11	19年	27	1.2
12	20年以上	106	4.7
	全体	2278	100.0

[N%016]

Q14	あなたのご家族について伺います。あなた は現在、結婚されていますか。(お答えは1 つ)	N	%
1	結婚している(事実婚を含む)	1740	58.0
2	未婚(結婚していない)	1028	34.3
3	離別	210	7.0
4	死別	20	0.7
	全体	2998	100.0

[N%017]

Q15	現在の配偶者と結婚したとき、あなたは何 歳でしたか。(お答えは半角数字で)	全体	統計量母 数	合計	平均	標準偏差	最小値	最大値	中央値
		1740	1740	52804	30.35	7.828	18	64	28

[N%018]

Q16	同居されているご家族は、あなたご自身を 含めて何人いらっしゃいますか。(お答えは 1つ)※ペットは除きます。	N	%
1	自分自身のみ	556	18.5
2	2人	800	26.7
3	3人	813	27.1
4	4人	568	18.9
5	5人	180	6.0
6	6人	49	1.6
7	7人	18	0.6
8	8人	7	0.2
9	9人	1	0.0
10	10人以上	3	0.1
11	わからない	3	0.1
	全体	2998	100.0

[N%019]

Q17	以下の中から、同居されているご家族をす べて選んでください。(お答えはいくつでも)	N	%
1	配偶者	1690	69.2
2	子ども	1178	48.2
3	子どもの配偶者	13	0.5
4	あなたの兄弟姉妹	207	8.5
5	あなたの父親	474	19.4
6	あなたの母親	700	28.7
7	配偶者の父親	33	1.4
8	配偶者の母親	63	2.6
9	祖父母(義祖父母も含む)	40	1.6
10	あなたの孫	15	0.6
11	その他	34	1.4
	全体	2442	100.0

[N%020]

Q18	お子さんについておたずねします。あなた にお子さんはいらっしゃいますか。(お答え は1つ)※現在、離れて暮らしているお子さ んも含めてお答えください。	N	%
1	いる	1521	50.7
2	いない	1477	49.3
	全体	2998	100.0

[N%021]

Q19	お子さんが何人いるかをお答えください。 (お答えは半角数字で)	全体	統計量母 数	合計	平均	標準偏差	最小値	最大値	中央値
		1521	1521	2843	1.87	0.778	1	6	2

[N%022]

Q20	あなたの、1番上のお子様と1番下のお子様は、それぞれ何年生まれですか。(お答えはそれぞれ1つ)	N	%
1	1956年	0	-
2	1957年	0	-
3	1958年	0	-
4	1959年	0	-
5	1960年	0	-
6	1961年	1	0.1
7	1962年	0	-
8	1963年	0	-
9	1964年	0	-
10	1965年	0	-
11	1966年	0	-
12	1967年	0	-
13	1968年	1	0.1
14	1969年	2	0.1
15	1970年	0	-
16	1971年	0	-
17	1972年	0	-
18	1973年	0	-
19	1974年	0	-
20	1975年	2	0.1
21	1976年	1	0.1
22	1977年	6	0.4
23	1978年	4	0.3
24	1979年	4	0.3
25	1980年	4	0.3
26	1981年	10	0.7
27	1982年	22	1.4
28	1983年	28	1.8
29	1984年	25	1.6
30	1985年	28	1.8
31	1986年	40	2.6
32	1987年	47	3.1
33	1988年	42	2.8
34	1989年	46	3.0
35	1990年	46	3.0
36	1991年	41	2.7
37	1992年	34	2.2
38	1993年	38	2.5
39	1994年	48	3.2
40	1995年	37	2.4
41	1996年	40	2.6
42	1997年	43	2.8
43	1998年	39	2.6
44	1999年	48	3.2
45	2000年	52	3.4
46	2001年	35	2.3
47	2002年	44	2.9
48	2003年	40	2.6
49	2004年	42	2.8
50	2005年	46	3.0
51	2006年	39	2.6
52	2007年	36	2.4
53	2008年	41	2.7
54	2009年	39	2.6
55	2010年	37	2.4
56	2011年	49	3.2
57	2012年	42	2.8
58	2013年	35	2.3
59	2014年	34	2.2
60	2015年	42	2.8
61	2016年	33	2.2
62	2017年	37	2.4
63	2018年	30	2.0
64	2019年	35	2.3
65	2020年	6	0.4
	全体	1521	100.0

[N%023]

Q20_2	あなたの、1番上のお子様と1番下のお子様は、それぞれ何年生まれですか。(お答えはそれぞれ1つ)	N	%
1	1956年	0	-
2	1957年	0	-
3	1958年	0	-
4	1959年	1	0.1
5	1960年	0	-
6	1961年	0	-
7	1962年	0	-
8	1963年	1	0.1
9	1964年	0	-
10	1965年	1	0.1
11	1966年	0	-
12	1967年	0	-
13	1968年	1	0.1
14	1969年	0	-
15	1970年	1	0.1
16	1971年	0	-
17	1972年	0	-
18	1973年	0	-
19	1974年	0	-
20	1975年	0	-
21	1976年	0	-
22	1977年	1	0.1
23	1978年	2	0.2
24	1979年	2	0.2
25	1980年	0	-
26	1981年	2	0.2
27	1982年	3	0.3
28	1983年	9	0.9
29	1984年	10	1.0
30	1985年	11	1.1
31	1986年	16	1.6
32	1987年	18	1.8
33	1988年	14	1.4
34	1989年	34	3.4
35	1990年	34	3.4
36	1991年	27	2.7
37	1992年	30	3.0
38	1993年	30	3.0
39	1994年	31	3.1
40	1995年	30	3.0
41	1996年	30	3.0
42	1997年	27	2.7
43	1998年	28	2.8

44	1999年	32	3.2
45	2000年	30	3.0
46	2001年	27	2.7
47	2002年	34	3.4
48	2003年	28	2.8
49	2004年	25	2.5
50	2005年	24	2.4
51	2006年	32	3.2
52	2007年	24	2.4
53	2008年	24	2.4
54	2009年	28	2.8
55	2010年	23	2.3
56	2011年	26	2.6
57	2012年	29	2.9
58	2013年	37	3.7
59	2014年	31	3.1
60	2015年	29	2.9
61	2016年	32	3.2
62	2017年	26	2.6
63	2018年	32	3.2
64	2019年	31	3.1
65	2020年	11	1.1
	全体	1009	100.0

[N%024]

Q21	あなたは以下のような事柄について、どの程度満足していますか。(お答えはそれぞれ1つ)	全体	1	2	3	4	5
			満足している	どちらかといえば満足している	どちらともいえない	どちらかといえば不満である	不満である
Q21S1	生活全般	2998 100.0	366 12.2	1091 36.4	756 25.2	440 14.7	345 11.5
Q21S2	自分の学歴	2998 100.0	429 14.3	902 30.1	1020 34.0	391 13.0	256 8.5
Q21S3	日本社会	2998 100.0	118 3.9	485 16.2	1122 37.4	760 25.4	513 17.1
Q21S4	自分が住んでいる地域	2998 100.0	275 9.2	1088 36.3	1075 35.9	356 11.9	204 6.8

※Q22.1(あなたにとって以下のことは、一言でいうと何ですか。【地位とは】)の集計結果は省略

※Q22.2(あなたにとって以下のことは、一言でいうと何ですか。【幸せとは】)の集計結果は省略

[N%025]

Q23	仮に現在の日本の社会全体を、以下の5つの層に分けるとすれば、あなた自身はこのどれに入ると思いますか。(お答えは1つ)	N	%
1	上	33	1.1
2	中の上	699	23.3
3	中の下	1230	41.0
4	下の上	684	22.8
5	下の下	352	11.7
	全体	2998	100.0

[N%026]

Q24	あなたは、現在のご自分の健康状態をどう思いますか。(お答えは1つ)	N	%
1	よい	360	12.0
2	まあよい	891	29.7
3	ふつう	1085	36.2
4	あまりよくない	483	16.1
5	わるい	179	6.0
	全体	2998	100.0

[N%027]

Q25	あなたの心身の具合についてお伺いします。過去30日の間にどれくらいの頻度で次のことがありましたか。(お答えはそれぞれ1つ)	全体	1	2	3	4	5
			全くない	少しだけ	ときどき	たいてい	いつも
Q25S1	神経過敏に感じましたか	2998 100.0	1129 37.7	882 29.4	648 21.6	182 6.1	157 5.2
Q25S2	絶望的だと感じましたか	2998 100.0	1445 48.2	682 22.7	549 18.3	166 5.5	156 5.2
Q25S3	そわそわ、落ち着かなく感じましたか	2998 100.0	1237 41.3	803 26.8	659 22.0	184 6.1	115 3.8
Q25S4	気分が沈み込んで、何が起こっても気が晴れないように感じましたか	2998 100.0	1181 39.4	762 25.4	655 21.8	214 7.1	186 6.2
Q25S5	何をするのも骨折りだと感じましたか	2998 100.0	1227 40.9	785 26.2	603 20.1	214 7.1	169 5.6
Q25S6	自分は価値のない人間だと感じましたか	2998 100.0	1410 47.0	641 21.4	528 17.6	211 7.0	208 6.9

[N%028]

Q26	あなたが日頃から何かと頼りにし、親しくしている方は何人くらいでしょうか。(お答えは半角数字で)							
		全体	統計量母数	合計	平均	標準偏差	最小値	最大値
		2998	2998	8874	2.96	3.558	0	50

[N%029]

Q27	先程あげていただいた人のうち、家族や親族にあたる方は何人くらいでしょうか。(お答えは半角数字で)							
		全体	統計量母数	合計	平均	標準偏差	最小値	最大値
		2998	2998	4118	1.37	1.613	0	30

[N%030]					
Q28	以下にあげる組織や団体の活動について、どの程度参加していますか。(お答えはそれぞれ1つ)	全体	1	2	3
			頻繁に参加している	たまに参加している	参加していない
Q28S1	教会・宗教組織	2998 100.0	57 1.9	110 3.7	2831 94.4
Q28S2	スポーツ・娯楽グループ	2998 100.0	158 5.3	350 11.7	2490 83.1
Q28S3	芸術・教養グループ	2998 100.0	53 1.8	145 4.8	2800 93.4
Q28S4	労働組合・同業者組合	2998 100.0	32 1.1	127 4.2	2839 94.7
Q28S5	政党	2998 100.0	14 0.5	53 1.8	2931 97.8
Q28S6	環境保護団体	2998 100.0	16 0.5	43 1.4	2939 98.0
Q28S7	人権・慈善団体	2998 100.0	13 0.4	39 1.3	2946 98.3
Q28S8	自治組織・相互援助グループ	2998 100.0	56 1.9	130 4.3	2812 93.8
Q28S9	消費者団体	2998 100.0	13 0.4	31 1.0	2954 98.5
Q28S10	ボランティア団体	2998 100.0	53 1.8	151 5.0	2794 93.2

[N%031]							
Q29	あなたは以下にあげるようなことをどの程度していますか。あてはまるものをお答えください。(お答えはそれぞれ1つ)	全体	1	2	3	4	5
			いつもしている	よくしている	ときどきしている	めったにしない	したことがない
Q29S1	国政選挙や自治体選挙の際の投票	2998 100.0	1091 36.4	444 14.8	429 14.3	349 11.6	685 22.8
Q29S2	国会や地方議会の議員とのつきあい	2998 100.0	40 1.3	60 2.0	169 5.6	345 11.5	2384 79.5
Q29S3	市民運動への参加	2998 100.0	23 0.8	43 1.4	156 5.2	310 10.3	2466 82.3
Q29S4	ボランティア・NPO活動	2998 100.0	47 1.6	56 1.9	236 7.9	470 15.7	2189 73.0
Q29S5	募金や寄付	2998 100.0	63 2.1	108 3.6	812 27.1	790 26.4	1225 40.9
Q29S6	サプリメント・健康食品の利用	2998 100.0	434 14.5	266 8.9	535 17.8	413 13.8	1350 45.0
Q29S7	プレミアム(ワンランク上の)商品の購入	2998 100.0	43 1.4	118 3.9	517 17.2	854 28.5	1466 48.9

[N%032]							
Q30	あなたは以下のような意見についてどう思いますか、それともそうは思いませんか。あてはまるものをお答えください。(お答えはそれぞれ1つ)	全体	1	2	3	4	5
			そう思う	ややそう思う	どちらともいえない	あまりそう思わない	そう思わない
Q30S1	たいいていのひとは信頼できる	2998 100.0	107 3.6	632 21.1	1097 36.6	675 22.5	487 16.2
Q30S2	何をするにしても知らない人より知った人の方が信頼できる	2998 100.0	459 15.3	1192 39.8	946 31.6	214 7.1	187 6.2
Q30S3	一般につきあいの短い人より長く付き合い合っている人の方が必要ときに助けてくれる	2998 100.0	386 12.9	971 32.4	1206 40.2	231 7.7	204 6.8
Q30S4	まごまごしている人と他人に追い越されそうな不安を感じる	2998 100.0	163 5.4	501 16.7	1088 36.3	724 24.1	522 17.4
Q30S5	うかうかしている自分と自分がこれまで獲得したものを失ってしまいそうな不安を感じる	2998 100.0	192 6.4	477 15.9	1082 36.1	710 23.7	537 17.9

[N%033]							
Q31	以下の文章は、あなた自身にあてはまりますか。それとも、あてはまりませんか。それぞれあうものをお答えください。(お答えはそれぞれ1つ)	全体	1	2	3	4	5
			よくあてはまる	ややあてはまる	どちらともいえない	あまりあてはまらない	まったくあてはまらない
Q31S1	私の生き方は、おもに自分の考えて?自由に決められる	2998 100.0	591 19.7	1169 39.0	858 28.6	259 8.6	121 4.0
Q31S2	私のまわりの人たちは、私の考えを尊重してくれている	2998 100.0	278 9.3	1040 34.7	1209 40.3	284 9.5	187 6.2
Q31S3	生き方を自分で決めるための手段や情報は、十分に手に入れることができています	2998 100.0	284 9.5	945 31.5	1262 42.1	332 11.1	175 5.8

[N%034]							
Q32	あなたは以下のような意見についてどう思いますか、それともそうは思いませんか。あてはまるものをお答えください。(お答えはそれぞれ1つ)	全体	1	2	3	4	5
			そう思う	ややそう思う	どちらともいえない	あまりそう思わない	そう思わない
Q32S1	今後の日本社会は、よい方向に向かっていく	2998 100.0	79 2.6	307 10.2	1160 38.7	871 29.1	581 19.4
Q32S2	あらゆるものには長所と短所がある	2998 100.0	1134 37.8	1050 35.0	638 21.3	98 3.3	78 2.6
Q32S3	世の中にはすべてを手に入れる人間もいれば、何も手に入れない人間もいる	2998 100.0	673 22.4	985 32.9	997 33.3	230 7.7	113 3.8
Q32S4	全体としてみれば、世の中はバランスが取れている	2998 100.0	171 5.7	586 19.5	1251 41.7	633 21.1	357 11.9
Q32S5	悪いことばかり続いた人も、次には何か良いことが起こるものだ	2998 100.0	341 11.4	846 28.2	1234 41.2	360 12.0	217 7.2

[N%035]			
Q33	一般的にいつて、いまの世の中は公平だと思いますか。あなたのお気持ちは、次のうち、どれに近いですか。(お答えは1つ)	N	%
	1 公平だ	66	2.2
	2 だいたい公平だ	729	24.3
	3 あまり公平でない	1404	46.8
	4 公平でない	799	26.7
	全体	2998	100.0

[N%036]													
Q34	現在、あなたはどの程度幸せですか。「とても幸せ」を10点、「とても不幸」を0点とすると、何点くらいになると感じますか。(お答えは1つ)	全体	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
			0点	1点	2点	3点	4点	5点	6点	7点	8点	9点	10点
Q34S1	選択肢A	2998 100.0	97 3.2	77 2.6	139 4.6	242 8.1	256 8.5	579 19.3	427 14.2	553 18.4	394 13.1	143 4.8	91 3.0

[N%037]			
Q35	以下の中から、あなたが現在持っているものをすべてお答えください。(お答えはいくつでも)	N	%
1	乗用車	1903	63.5
2	犬・猫などのペット	667	22.2
3	子ども部屋	803	26.8
4	ピアノ	427	14.2
5	バリアフリー施設	162	5.4
6	食器洗い機	748	24.9
7	文学全集・図鑑	201	6.7
8	美術品・骨董品	145	4.8
9	田畑(家庭菜園は除く)	118	3.9
10	金庫	190	6.3
11	あてはまるものはない	696	23.2
	全体	2998	100.0

[N%038]			
Q36	過去1年間のあなた個人の収入は、税込みでいくらくらいでしたか。年金、株式配当や臨時収入、副収入などもすべて含めてお答えください。(お答えは1つ)	N	%
1	なし	421	14.0
2	25万円未満	237	7.9
3	25～50万円未満	117	3.9
4	50～75万円未満	108	3.6
5	75～100万円未満	193	6.4
6	100～125万円未満	128	4.3
7	125～150万円未満	89	3.0
8	150～200万円未満	175	5.8
9	200～250万円未満	174	5.8
10	250～300万円未満	159	5.3
11	300～350万円未満	155	5.2
12	350～400万円未満	136	4.5
13	400～450万円未満	149	5.0
14	500万円位(450～550万円未満)	202	6.7
15	600万円位(550～650万円未満)	157	5.2
16	700万円位(650～750万円未満)	98	3.3
17	800万円位(750～850万円未満)	105	3.5
18	900万円位(850～950万円未満)	62	2.1
19	1,000万円位(950～1,050万円未満)	45	1.5
20	1,100万円位(1,050～1,150万円未満)	20	0.7
21	1,200万円位(1,150～1,250万円未満)	13	0.4
22	1,300万円位(1,250～1,350万円未満)	12	0.4
23	1,400万円位(1,350～1,450万円未満)	5	0.2
24	1,500万円位(1,450～1,550万円未満)	9	0.3
25	1,600万円位(1,550～1,650万円未満)	3	0.1
26	1,700万円位(1,650～1,750万円未満)	3	0.1
27	1,800万円位(1,750～1,850万円未満)	3	0.1
28	1,900万円位(1,850～1,950万円未満)	2	0.1
29	2,000万円位(1,950～2,050万円未満)	10	0.3
30	2,050万円以上(約)	8	0.3
	全体	2998	100.0

[N%039]			
Q37	では、過去1年間のあなたのお宅(あなたを含めて、生計をともにしている家族全体で)の収入は、税込みでいくらくらいでしたか。年金、株式配当や臨時収入、副収入などもすべて含めてお答えください。(お答えは1つ)	N	%
1	なし	96	3.2
2	25万円未満	40	1.3
3	25～50万円未満	27	0.9
4	50～75万円未満	15	0.5
5	75～100万円未満	56	1.9
6	100～125万円未満	45	1.5
7	125～150万円未満	45	1.5
8	150～200万円未満	107	3.6
9	200～250万円未満	155	5.2
10	250～300万円未満	139	4.6
11	300～350万円未満	160	5.3
12	350～400万円未満	197	6.6
13	400～450万円未満	192	6.4
14	500万円位(450～550万円未満)	328	10.9
15	600万円位(550～650万円未満)	309	10.3
16	700万円位(650～750万円未満)	223	7.4
17	800万円位(750～850万円未満)	231	7.7
18	900万円位(850～950万円未満)	171	5.7
19	1,000万円位(950～1,050万円未満)	128	4.3
20	1,100万円位(1,050～1,150万円未満)	69	2.3
21	1,200万円位(1,150～1,250万円未満)	55	1.8
22	1,300万円位(1,250～1,350万円未満)	43	1.4
23	1,400万円位(1,350～1,450万円未満)	31	1.0
24	1,500万円位(1,450～1,550万円未満)	56	1.9
25	1,600万円位(1,550～1,650万円未満)	9	0.3
26	1,700万円位(1,650～1,750万円未満)	9	0.3
27	1,800万円位(1,750～1,850万円未満)	9	0.3
28	1,900万円位(1,850～1,950万円未満)	5	0.2
29	2,000万円位(1,950～2,050万円未満)	26	0.9
30	2,050万円以上(約)	22	0.7
	全体	2998	100.0

[N%040]			
回答端末	回答端末	N	%
1	PC	1531	51.1
2	スマートフォン・タブレット	1467	48.9
	全体	2998	100.0

4. 調査票

くらしと社会についてのインターネット調査（SSP-W2020調査）

■プロジェクトID

■調査対象者

性別： 男女
年齢： 25歳～64歳
地域： 全国（47都道府県）
その他：

■納品サンプル数

2998s
※内訳
性別×年代×地域別 470割付。

■備考

【回答形式】 SA=シングルアンサー（単一回答）表示記号：「○（ラジオボタン）」/MA=マルチアンサー（複数回答）表示記号：「□（チェックボックス）」
FA=フリーアンサー（自由回答）/NUM=数値入力/MT=マトリクス

設問番号	回答形式	設問文	備考/データ処理
■スクリーニング			

全員回答

※F1～F3は基本設問（設問数には含まれません）

F1

SA

あなたの性別をお答えください。
(お答えは1つ)

○1

男性

○2

女性

F2

NUM

あなたの年齢をお答えください。
(お答えは半角数字で)

歳

※半角数字のみ 24歳以下65歳以上は調査終了

F3

SA

あなたのお住まいの地域をお答えください。
(お答えは1つ)

▼ブルタウン

1北海道

2青森県

3岩手県

4宮城県

5秋田県

6山形県

7福島県

8茨城県

9栃木県

10群馬県

11埼玉県

12千葉県

13東京都

14神奈川県

15新潟県

16富山県

17石川県

18福井県

19山梨県

20長野県

21岐阜県

22静岡県

23愛知県

24三重県

25滋賀県

26京都府

27大阪府

28兵庫県

29奈良県

30和歌山県

31鳥取県

32島根県

33岡山県

34広島県

35山口県

36徳島県

37香川県

38愛媛県

39高知県

40福岡県

41佐賀県

42長崎県

43熊本県

44大分県

45宮崎県

46鹿児島県

47沖縄県

48海外

→調査終了

全員回答

改ページ

S1

SA

本アンケートは最大で36問のボリュームの多いアンケートになります。
ご了承の上ご協力頂けますか。
(お答えは1つ)

○1

協力できる

○2

協力できない

→調査終了

全員回答

改ページ

F4

FA

現在お住まいの市区町村名をお答え下さい。
(お答えは具体的に)
例)
【東京23区の場合】例) 東京都千代田区 → 千代田区 と記入
【政令指定都市の場合】例) 北海道札幌市中央区 → 札幌市中央区 と記入
【通常の市部の場合】例) 長野県松本市 → 松本市 と記入
【郡部の場合】例) 奈良県吉野郡十津川村 → 吉野郡十津川村 と記入

必須

全員回答

改ページ

F5

NUM

あなたの生年月日をお答えください。
(お答えは半角数字で)
例) 2020年3月

F5t1

年

※半角数字のみ 1956以上1995以下の入力制御

F5t2

月

※半角数字のみ 1以上12以下の入力制御

■本調査

全員回答

Q1 SA あなたの現在のお仕事について伺います。
あなたがなさっているお仕事は、大きく分けてこの中のどれにあたりますか。
(お答えは1つ)
※複数のお仕事をお持ちの場合には、主なお仕事ひとつについてお答えください。

[改ページ](#)

☐ 1	経営者、役員
☐ 2	常時雇用されている一般従業者
☐ 3	臨時雇用・パート・アルバイト
☐ 4	派遣社員
☐ 5	契約社員、嘱託
☐ 6	自営業主、自由業者
☐ 7	家族従業者
☐ 8	内職
☐ 9	無職：仕事を探している
☐ 10	無職：仕事を探していない
☐ 11	学生
☐ 12	その他

Q1=○1~7の方

Q2 FA あなたの勤め先は、どのような事業を営んでいますか。派遣社員の方は、派遣先企業についてお答えください。
(お答えは具体的に)
例) 野菜の販売、自動車の製造、薬品の卸売、衣服の小売、旅館経営 など

[改ページ](#)

必須

Q1=○1~7の方

Q3 SA あなたの勤め先の事業内容は、次の分類のうち、どれにあたりますか。
(お答えは1つ)
※派遣社員の方は、派遣先企業についてお答えください。

[改ページ](#)

☐ 1	情報通信業
☐ 2	運輸業、郵便業（郵便局以外）
☐ 3	郵便局
☐ 4	卸売業、小売業
☐ 5	金融業、保険業
☐ 6	不動産業、物品賃貸業
☐ 7	学術研究、専門・技術サービス業
☐ 8	教育、学習支援業
☐ 9	医療、福祉
☐ 10	宿泊業、飲食サービス業
☐ 11	生活関連サービス業、娯楽業
☐ 12	その他のサービス業
☐ 13	製造業
☐ 14	電気・ガス・熱供給・水道業
☐ 15	建設業
☐ 16	農業、林業、漁業
☐ 17	鉱業、採石業、砂利採取業
☐ 18	公務
☐ 19	その他（ ）

Q1=○1~7の方

Q4 NUM あなたは、いつからそのお勤め先で働いておられますか。
(お答えは半角数字で)
※派遣社員の方は、派遣先企業についてお答えください。

[改ページ](#)

年 ※半角数字のみ ※F5 t1で入力された数値以下は入力不可

月 ※半角数字のみ ※1以上12以下の入力制御

Q1=○1~7の方

Q5 SA 現在の従業員（働いている人）は、会社全体で何人ぐらいですか。
(お答えは1つ)
※派遣社員の方は、派遣先企業についてお答えください。
※家族従業者、パート・アルバイトなども含みます。

[改ページ](#)

☐ 1	1人
☐ 2	2~4人
☐ 3	5~9人
☐ 4	10~29人
☐ 5	30~99人
☐ 6	100~299人
☐ 7	300~499人
☐ 8	500~999人
☐ 9	1000人以上
☐ 10	官公庁である

Q1=○1～8の方

Q6 FA あなたは職場でどのような仕事をしていますか。具体的な仕事の内容を教えてください。
以下の例のように仕事をする対象（人・モノ・データ）、使っている道具などを含めて、50字以内でできるだけ詳しく記入してください。
（お答えは具体的に）
例）
・銀行などのネットワーク構築に関わるプログラミングをしている
・電気機械器具の製造・組立をしている
・中学校の教員で数学を教えている
・給与や福利厚生に関する事務をしている
・会計帳簿の記入・整理をしている
・高齢者の住まいを訪ねて身の回りの世話・介護をしている
・コンピュータを使って、データの入力作業をしている
・コンビニの店員として、商品を販売している
・プラスチック製品（おもちゃ）の製造をしている
・スーパーでレジ係をしている
・銀行で窓口の仕事をしている

[改ページ](#)

必須

Q1=○1～8の方

Q7 SA そのお仕事は次の分類のうち、どれにあたりますか。
（お答えは1つ）

[改ページ](#)

○1	管理職（企業・官公庁における課長職以上、会社役員、議員、経営者など）
○2	専門職・技術職（医師、看護師、弁護士、教師、技術者、デザイナーなど専門的知識・技術を要するもの）
○3	事務職（企業・官公庁における一般事務、経理、内勤の営業など）
○4	販売職（小売・卸売店主、店員、不動産売買、保険外交、外勤のセールスなど）
○5	サービス職（理・美容師、料理人、ウエイテレス・ウェイター、ホームヘルパーなど）
○6	生産現場職・技能職（製品製造・組立、自動車整備、建設作業員、大工、電気工事、農水産物加工など）
○7	運輸・保安職（トラック・タクシー運転手、船員、郵便配達、通信士、警察官、消防官、自衛官、警備員など）
○8	その他

Q1=○1～8の方

Q8 SA そのお仕事では、自分でモノを作ったり扱ったりすることが多いですか、それとも人と接したりコミュニケーションをとることが多いですか。
（お答えは1つ）

[改ページ](#)

○1	おもに自分でモノを作ったり扱ったりしている
○2	モノを扱うことと、人とのコミュニケーションが半々ぐらい
○3	どちらかといえば、人と接したりコミュニケーションをとることが多い
○4	おもに人と接したりコミュニケーションをとっている

Q1=○1～7の方

Q9 SA あなたは、何かの役職についていますか。
（お答えは1つ）

[改ページ](#)

○1	役職なし
○2	監督、職長、班長、組長
○3	係長、係長相当職
○4	課長、課長相当職
○5	部長、部長相当職
○6	社長、重役、役員、理事
○7	その他（ ）

Q1=○1～8の方

Q10 NUM そのお仕事はふだん1日何時間、週何日していますか。または月何日していますか。
（お答えは半角数字で）
※残業の時間も含めてください。

[改ページ](#)

1日		時間	※半角数字のみ	※1以上24以下の入力制御
週		日	※半角数字のみ	※1以上7以下の入力制御
または月		日	※半角数字のみ	※1以上31以下の入力制御

Q11 FA 隔週勤務など特殊なケースは具体的に記入してください。
（お答えは具体的に）

任意

Q1=○1～8の方

Q12 SA あなたが最後に行かれた（または現在行かれている）学校は以下のどれにあたりますか。
中退も卒業と同じ扱いでお答えください。
（お答えは1つ）

[改ページ](#)

○1	中学校
○2	中学校卒業後、専門学校（専修学校）
○3	高等学校
○4	高等学校卒業後、専門学校
○5	短期大学・高等専門学校
○6	大学
○7	大学院修士課程
○8	大学院博士課程
○9	その他（ ）
○10	どれにあたるか判断できない

Q13 FA 差し支えなければ、具体的な学校名を教えてください。
（お答えは具体的に）
※回答できる範囲でお答えください。

Q13t1

任意

Q13t2 SA 小学校からの通算通学年数をお答えください。
（お答えは1つ）

	▼ブルダウン
1	9年
2	10年
3	11年
4	12年
5	13年
6	14年
7	15年
8	16年

	▼ブルダウン
9	17年
10	18年
11	19年
12	20年以上

全員回答

[改ページ](#)

Q14

SA

あなたのご家族について伺います。
あなたは現在、結婚されていますか。
(お答えは1つ)

☐ 1	結婚している（事実婚を含む）
☐ 2	未婚（結婚したことがない）
☐ 3	離別
☐ 4	死別

Q14=☐1の方

[改ページ](#)

Q15

NUM

現在の配偶者と結婚したとき、あなたは何歳でしたか。
(お答えは半角数字で)

満歳

※半角数字のみ

※F2で入力された数字より大きい数字は入力不可

全員回答

[改ページ](#)

Q16

SA

同居されているご家族は、あなたご自身を含めて何人いらっしゃいますか。
(お答えは1つ)
※ペットは除きます。

☐ 1	自分自身のみ
☐ 2	2人
☐ 3	3人
☐ 4	4人
☐ 5	5人
☐ 6	6人
☐ 7	7人
☐ 8	8人
☐ 9	9人
☐ 10	10人以上
☐ 11	わからない

Q16=☐2~11に表示

[改ページ](#)

Q17

MA

以下の中から、同居されているご家族をすべて選んでください。
(お答えはいくつでも)

☐ 1	配偶者
☐ 2	子ども
☐ 3	子どもの配偶者
☐ 4	あなたの兄弟姉妹
☐ 5	あなたの父親
☐ 6	あなたの母親
☐ 7	配偶者の父親
☐ 8	配偶者の母親
☐ 9	祖父母（義祖父母も含む）
☐ 10	あなたの孫
☐ 11	その他（ ）

全員回答

[改ページ](#)

Q18

SA

お子さんについておたずねします。
あなたにお子さんはいらっしゃいますか。
(お答えは1つ)
※現在、離れて暮らしているお子さんも含めてお答えください。

☐ 1	いる
☐ 2	いない

※Q17=☐3には非表示

Q18=☐1の方

[改ページ](#)

Q19

NUM

お子さんが何人いるかをお答えください。
(お答えは半角数字で)

人

※半角数字のみ

1以上の入力

Q18=○1の方

Q20 SAMT

あなたの、1番上のお子様と1番下のお子様は、それぞれ何年生まれですか。
(お答えはそれぞれ1つ)

[改ページ](#)

【1番上のお子様】 ※F5t1の数値より低い西暦は選択不可

	▼ブルダウン
1	1956年
2	1957年
3	1958年
4	1959年
5	1960年
6	1961年
7	1962年
8	1963年
9	1964年
10	1965年
11	1966年
12	1967年
13	1968年
14	1969年
15	1970年
16	1971年

	▼ブルダウン
17	1972年
18	1973年
19	1974年
20	1975年
21	1976年
22	1977年
23	1978年
24	1979年
25	1980年
26	1981年
27	1982年
28	1983年
29	1984年
30	1985年
31	1986年
32	1987年

	▼ブルダウン
33	1988年
34	1989年
35	1990年
36	1991年
37	1992年
38	1993年
39	1994年
40	1995年
41	1996年
42	1997年
43	1998年
44	1999年
45	2000年
46	2001年
47	2002年
48	2003年

	▼ブルダウン
49	2004年
50	2005年
51	2006年
52	2007年
53	2008年
54	2009年
55	2010年
56	2011年
57	2012年
58	2013年
59	2014年
60	2015年
61	2016年
62	2017年
63	2018年
64	2019年
65	2020年

【1番下のお子様】 ←Q19で2以上の回答がある方に表示

	▼ブルダウン
1	1956年
2	1957年
3	1958年
4	1959年
5	1960年
6	1961年
7	1962年
8	1963年
9	1964年
10	1965年
11	1966年
12	1967年
13	1968年
14	1969年
15	1970年
16	1971年

	▼ブルダウン
17	1972年
18	1973年
19	1974年
20	1975年
21	1976年
22	1977年
23	1978年
24	1979年
25	1980年
26	1981年
27	1982年
28	1983年
29	1984年
30	1985年
31	1986年
32	1987年

	▼ブルダウン
33	1988年
34	1989年
35	1990年
36	1991年
37	1992年
38	1993年
39	1994年
40	1995年
41	1996年
42	1997年
43	1998年
44	1999年
45	2000年
46	2001年
47	2002年
48	2003年

	▼ブルダウン
49	2004年
50	2005年
51	2006年
52	2007年
53	2008年
54	2009年
55	2010年
56	2011年
57	2012年
58	2013年
59	2014年
60	2015年
61	2016年
62	2017年
63	2018年
64	2019年
65	2020年

全員回答

Q21 SAMT

あなたは以下のような事柄について、どの程度満足していますか。
(お答えはそれぞれ1つ)

[改ページ](#)

		回答方向	満足している	ば ども満足しかていえる	な どもちかともいえる	ば ども満ちてかといえる	不満である
Q21_1	生活全般		○1	○2	○3	○4	○5
Q21_2	自分の学歴		○1	○2	○3	○4	○5
Q21_3	日本社会		○1	○2	○3	○4	○5
Q21_4	自分が住んでいる地域		○1	○2	○3	○4	○5

全員回答

Q22 FA

あなたにとって以下のことは、一言でいうと何ですか。正解はありませんので、イメージしたことをそれぞれについてご自由にお書きください。
(お答えは具体的に)

[改ページ](#)

【地位とは】		必須
【幸せとは】		必須

全員回答

Q23 SA

仮に現在の日本の社会全体を、以下の5つの層に分けるとすれば、あなた自身はこのどれに入りますか。
(お答えは1つ)

[改ページ](#)

○1	上
○2	中の上
○3	中の下
○4	下の上
○5	下の下

全員回答

Q24 SA

あなたは、現在のご自分の健康状態をどう思いますか。
(お答えは1つ)

[改ページ](#)

○1	よい
○2	まあよい
○3	ふつう
○4	あまりよくない
○5	わるい

全員回答

Q25 SAMT あなたの心身の具合についてお伺いします。過去30日の間にどれくらいの頻度で次のことがありましたか。
(お答えはそれぞれ1つ)

[改ページ](#)

回答方向		全 く な い	少 し だ け	と き ど き	た い て い	い つ も
Q25_1	神経過敏に感じましたか	○1	○2	○3	○4	○5
Q25_2	絶望的だと感じましたか	○1	○2	○3	○4	○5
Q25_3	そわそわ、落ち着かなく感じましたか	○1	○2	○3	○4	○5
Q25_4	気分が沈み込んで、何が起こっても気が晴れないように感じましたか	○1	○2	○3	○4	○5
Q25_5	何をするのも得折りだと感じましたか	○1	○2	○3	○4	○5
Q25_6	自分は価値のない人間だと感じましたか	○1	○2	○3	○4	○5

全員回答

Q26 NUM あなたが日頃から何かに頼りにし、親しくしている方は何人くらいでしょうか。
(お答えは半角数字で)

[改ページ](#)

人 ※半角数字のみ

全員回答

Q27 NUM 先程あげていただいた人のうち、家族や親族にあたる方は何人くらいでしょうか。
(お答えは半角数字で)

[改ページ](#)

人 ※半角数字のみ ※Q26より多い数値入力の場合エラー

全員回答

Q28 SAMT 以下にあげる組織や団体の活動について、どの程度参加していますか。
(お答えはそれぞれ1つ)

[改ページ](#)

回答方向		参 加 し て い ない	参 加 し て い る	参 加 し て い る
Q28_1	教会・宗教組織	○1	○2	○3
Q28_2	スポーツ・娯楽グループ	○1	○2	○3
Q28_3	芸術・教養グループ	○1	○2	○3
Q28_4	労働組合・同業者組合	○1	○2	○3
Q28_5	政党	○1	○2	○3
Q28_6	環境保護団体	○1	○2	○3
Q28_7	人権・慈善団体	○1	○2	○3
Q28_8	自治組織・相互援助グループ	○1	○2	○3
Q28_9	消費者団体	○1	○2	○3
Q28_10	ボランティア団体	○1	○2	○3

全員回答

Q29 SAMT あなたは以下にあげるようなことをどの程度していますか。あてはまるものをお答えください。
(お答えはそれぞれ1つ)

[改ページ](#)

回答方向		い つ も し て い る	よ く し て い る	と き ど き し て い る	め っ た に し な い	し た こ と が な い
Q29_1	国政選挙や自治体選挙の際の投票	○1	○2	○3	○4	○5
Q29_2	国会や地方議会の議員とのつきあい	○1	○2	○3	○4	○5
Q29_3	市民運動への参加	○1	○2	○3	○4	○5
Q29_4	ボランティア・NPO活動	○1	○2	○3	○4	○5
Q29_5	募金や寄付	○1	○2	○3	○4	○5
Q29_6	サプリメント・健康食品の利用	○1	○2	○3	○4	○5
Q29_7	プレミアム（ワンランク上の）商品の購入	○1	○2	○3	○4	○5

全員回答

Q30 SAMT あなたは以下のような意見についてそう思いますか、それともそうは思いませんか。あてはまるものをお答えください。
(お答えはそれぞれ1つ)

[改ページ](#)

回答方向		そ う 思 う	や や そ う 思 う	な い ち ら と も い え	な い あ い ま り そ う 思 わ	そ う 思 わ な い
Q30_1	たいていのひとは信頼できる	○1	○2	○3	○4	○5
Q30_2	何をするにしても知らない人よりよく知った人の方が信頼できる	○1	○2	○3	○4	○5
Q30_3	一般につきあいの短い人より長く付き合っている人の方が必要なときに助けてくれることが多い	○1	○2	○3	○4	○5
Q30_4	まごまごしていると他人に追い越されそうな不安を感じる	○1	○2	○3	○4	○5
Q30_5	うかうかしていると自分がこれまで獲得したものを失ってしまいそうな不安を感じる	○1	○2	○3	○4	○5

全員回答

Q31 SAMT 以下の文章は、あなた自身にあてはまりますか。それとも、あてはまりませんか。それぞれあうものをお答えください
(お答えはそれぞれ1つ)

[改ページ](#)

回答方向		よくあてはまる	ややあてはまる	どちらともいえない	なあまりあてはまる	らまったくあてはまる
Q31_1	私の生き方は、おもに自分の考えで自由に決められる	○1	○2	○3	○4	○5
Q31_2	私のまわりの人たちは、私の考えを尊重してくれている	○1	○2	○3	○4	○5
Q31_3	生き方を自分で決めるための手段や情報は、十分に手に入れることができる	○1	○2	○3	○4	○5

全員回答

Q32 SAMT あなたは以下のような意見についてどう思いますか。それともそうは思いませんか。あてはまるものをお答えください。
(お答えはそれぞれ1つ)

[改ページ](#)

回答方向		そう思う	ややそう思う	などどちらともいえない	なあまりそう思う	そう思わない
Q32_1	今後の日本社会は、よい方向に向かっていく	○1	○2	○3	○4	○5
Q32_2	あらゆるものには長所と短所がある	○1	○2	○3	○4	○5
Q32_3	世の中にはすべてを手に入れる人間もいれば、何も手に入れない人間もいる	○1	○2	○3	○4	○5
Q32_4	全体としてみれば、世の中はバランスが取れている	○1	○2	○3	○4	○5
Q32_5	悪いことばかり続いた人も、次には何か良いことが起こるものだ	○1	○2	○3	○4	○5

全員回答

Q33 SA 一般的にあって、いまの世の中は公平だと思いますか。あなたのお気持ちは、次のうち、どれに近いですか。
(お答えは1つ)

[改ページ](#)

○1	公平だ
○2	だいたい公平だ
○3	あまり公平でない
○4	公平でない

全員回答

Q34 SA 現在、あなたはどの程度幸せですか。
「とても幸せ」を10点、「とても不幸」を0点とすると、何点くらいになると思いますか。
(お答えは1つ)

[改ページ](#)

とても不幸←					→とても幸せ				
○1	○2	○3	○4	○5	○6	○7	○8	○9	○10
0点	1点	2点	3点	4点	5点	6点	7点	8点	9点

全員回答

Q35 MA 以下の中から、あなたが現在持っているものをすべてお答えください。
(お答えはいくつでも)

[改ページ](#)

※任意回答(この設問だけ任意回答をお願いします)

☐ 1	乗用車
☐ 2	犬・猫などのペット
☐ 3	子ども部屋
☐ 4	ピアノ
☐ 5	バリアフリー施設
☐ 6	食器洗い機
☐ 7	文学全集・図鑑
☐ 8	美術品・骨董品
☐ 9	田畑(家庭菜園は除く)
☐ 10	金庫

全員回答

Q36 SA 過去1年間のあなた個人の収入は、税込みでいくらぐらいでしたか。
年金、株式配当や臨時収入、副収入などもすべて含めてお答えください。
(お答えは1つ)

[改ページ](#)

○1	なし
○2	25万円未満
○3	25～50万円未満
○4	50～75万円未満
○5	75～100万円未満
○6	100～125万円未満
○7	125～150万円未満
○8	150～200万円未満
○9	200～250万円未満
○10	250～300万円未満
○11	300～350万円未満
○12	350～400万円未満
○13	400～450万円未満
○14	500万円位 (450～550万円未満)
○15	600万円位 (550～650万円未満)
○16	700万円位 (650～750万円未満)
○17	800万円位 (750～850万円未満)
○18	900万円位 (850～950万円未満)
○19	1,000万円位 (950～1,050万円未満)
○20	1,100万円位 (1,050～1,150万円未満)
○21	1,200万円位 (1,150～1,250万円未満)
○22	1,300万円位 (1,250～1,350万円未満)
○23	1,400万円位 (1,350～1,450万円未満)
○24	1,500万円位 (1,450～1,550万円未満)
○25	1,600万円位 (1,550～1,650万円未満)
○26	1,700万円位 (1,650～1,750万円未満)
○27	1,800万円位 (1,750～1,850万円未満)
○28	1,900万円位 (1,850～1,950万円未満)
○29	2,000万円位 (1,950～2,050万円未満)
○30	2,050万円以上 (約 万円)

※自由回答必須

全員回答

Q37

SA

では、過去1年間のあなたのお宅（あなたを含めて、生計をともにしている家族全体で）の収入は、税込みでいくらぐらいでしたか。
年金、株式配当や臨時収入、副収入などもすべて含めてお答えください。
（お答えは1つ）

[改ページ](#)

※Q35≤Q36になるよう制割

○1	なし
○2	25万円未満
○3	25～50万円未満
○4	50～75万円未満
○5	75～100万円未満
○6	100～125万円未満
○7	125～150万円未満
○8	150～200万円未満
○9	200～250万円未満
○10	250～300万円未満
○11	300～350万円未満
○12	350～400万円未満
○13	400～450万円未満
○14	500万円位（450～550万円未満）
○15	600万円位（550～650万円未満）
○16	700万円位（650～750万円未満）
○17	800万円位（750～850万円未満）
○18	900万円位（850～950万円未満）
○19	1,000万円位（950～1,050万円未満）
○20	1,100万円位（1,050～1,150万円未満）
○21	1,200万円位（1,150～1,250万円未満）
○22	1,300万円位（1,250～1,350万円未満）
○23	1,400万円位（1,350～1,450万円未満）
○24	1,500万円位（1,450～1,550万円未満）
○25	1,600万円位（1,550～1,650万円未満）
○26	1,700万円位（1,650～1,750万円未満）
○27	1,800万円位（1,750～1,850万円未満）
○28	1,900万円位（1,850～1,950万円未満）
○29	2,000万円位（1,950～2,050万円未満）
○30	2,050万円以上（約 万円）

※自由回答必須

SSP-W2020 1st 報告書

編 集：SSP プロジェクト（神林博史・永吉希久子）

発 行：SSP プロジェクト

発行日：2021 年 3 月 31 日
